

『源氏物語』における『遊仙窟』の受容
—「宇治十帖」を中心に—

蔡
芸

目次

序論

1

第一部 日本文学と『遊仙窟』

6

第一章 日本文学と『遊仙窟』

6

はじめに

6

一 平安時代以前の『遊仙窟』

6

二 平安時代の『遊仙窟』

7

三 平安時代以降の『遊仙窟』

7

おわりに

8

第二部 『源氏物語』と『遊仙窟』

12

第一章 『源氏物語』における『遊仙窟』の受容―「蜻蛉」の巻に着目して―

12

はじめに

12

一 「蜻蛉」の巻に見られる『遊仙窟』

12

二 女一の宮と十娘

16

三 薫が女一の宮への思慕

17

四 〈見る〉という主題

20

おわりに

22

第二章 『源氏物語』の北山と宇治の山荘と『遊仙窟』

26

はじめに

26

一 北山の風景と『遊仙窟』

26

二 宇治の山荘と『遊仙窟』

30

おわりに

33

第三章 『源氏物語』における『遊仙窟』の受容―「若紫」の巻に着目して―

35

はじめに

35

一 「若紫」の巻と『遊仙窟』の交渉

35

二 「若紫」の巻の北山の〈黄金〉と『遊仙窟』の〈金〉

37

三 「若紫」の登場人物と『遊仙窟』の人物との関係

40

四 「若紫」の巻の「歓楽的な一夜」 おわりに	45 42
---------------------------	-------

第四章 『源氏物語』における『遊仙窟』の受容―「橋姫」「椎本」「総角」の巻
を中心に―

はじめに	48 48
一 「蜻蛉」の巻と『遊仙窟』	49
二 「橋姫」「椎本」「総角」の巻の「一男双美」の型と『遊仙窟』	50
三 「宇治十帖」の「歓楽的な一夜」と『遊仙窟』	53
おわりに	56

第三部 薫という人物造型と『孝経』

60

第一章 『源氏物語』の薫という人物と『孝経』の受容関係―「孝」という思想に着目
にして―

はじめに	60 60
一 『源氏物語』と『孝経』の受容問題	61
二 皇女降嫁と「孝」の問題	64
三 薫の孝の問題	67
おわりに	69

第二章 『うつほ物語』仲忠の人物造型―『孝経』引用を中心に―
はじめに

73 73

- 一 〈孝の子〉の仲忠
- 二 平安時代の『孝経』の享受
- 三 東宮大夫の仲忠
- 四 仲忠の〈孝〉と〈忠〉
おわりに

73 74 75 78 80

結論

84

初出一覧

86

序論

魯迅は、『中国小説史略』で、六朝の志怪小説によって発展した唐の時代に書かれた小説を「唐代伝奇」と名づけて、新しい文体と定義した(注1)。斎藤拙堂は、『拙堂文話』で、「源氏物語、其体本南華寓言、其説閨情蓋徒漢武内伝・飛燕伝及唐人長恨歌伝・霍小玉伝諸篇得來」と、『源氏物語』と唐代伝奇小説との関係を述べている(注2)。この説は注目すべきだと思われるが、『拙堂文話』は、具体的な説明を述べていない。そもそも、『史記』『白氏文集』などの漢籍と『源氏物語』との受容関係の研究と違い、唐代伝奇と『源氏物語』の受容関係の研究は、二十世紀の半ばからようやくスタートしたのだ。川口久雄氏は、『源氏物語』と『飛燕外伝』『飛燕遺事』『趙后遺事』等との関係を論じて、『源氏物語』が唐代伝奇の影響を受けたことを主張している(注3)。近年において、『源氏物語』と唐代伝奇の研究がますます進行していく。例えば、新聞一美氏は、『源氏物語』の「帚木」「空蟬」「夕顔」の巻と唐代伝奇の『任氏伝』との関係を論じている(注4)。また、田中隆昭氏は、『源氏物語』が『長恨歌伝』によって、長編化したことを論じている(注5)。

本論文で主に扱っている『遊仙窟』は、唐代伝奇の一つである。作者の張文成は、歴史上の記録としては、あまり見られない人物である。『遊仙窟』は作者の張文成の経験譚としても読める。それは、『遊仙窟』が第一人称の小説だからだ。『遊仙窟』の成立時期には諸説がある。小島憲之氏は、初唐の説が有力だと唱えて、『遊仙窟』が後の唐代伝奇にも影響を与えたことを指摘している(注6)。『遊仙窟』は、皇帝に都から黄河に遣わされた官吏の張文成が、道中の山里に住まう若い義理の姉妹である五嫂と十娘と歡樂的な一夜を過ごす話である。日本への伝来は古く奈良時代に遡り、文人たちによく読まれた書物らしい(注7)。『遊仙窟』が平安時代に広く読まれたことが、作中の章句や張文成の成した詩句が、『和漢朗詠集』にも採られていることから理解されるだろう(注8)。

『源氏物語』の「蜻蛉」の巻には、薫が、女一の宮のもとを訪れたことが語られている。結局、女一の宮が不在だったので、女房の中将のおもとの会話を交わしただけに留まった。この時の薫と中将のおもとの会話の中に、『遊仙窟』の表現を踏まえた言葉が出てくる。この会話と『遊仙窟』との影響関係は、『奥入』に指摘されている(注9)。そのほか、「絵合」の巻に、光源氏と帥の宮の会話の中に『遊仙窟』の表現と連想できる一節が見られる。このことは、『河海抄』を初めとして、古注釈に指摘がある(注10)。この二つの例以外にも、『源氏物語』の注釈書には、『遊仙窟』による注釈も数多く見られるが、必ずしも客観的な根拠があるとは言えない。

『源氏物語』と『遊仙窟』の関係を論じた先駆とも言える丸山キヨ子氏は、「源氏物語・伊勢物語・遊仙窟——わかむらさき北山・はし姫宇治の山莊・うひかうぶりの段と遊仙窟との関係——」という論文の中で、「源氏物語の場面に遊仙窟がヒントを与えているのではないかと思われるところは二つある。わかむらさきの巻、北山における源氏君の垣間見、橋姫の巻、宇治の山莊における薫の垣間見の場面である」と指摘している(注11)。また、丸

山氏は、『遊仙窟』が『伊勢物語』の初段に影響を与え、それが『源氏物語』の「若紫」の巻にまで受け継がれたことも指摘している。丸山氏の指摘は示唆的である。近年の研究は、だいたい丸山氏の論を受けて発展させている。

原岡文子氏は、『源氏物語』の「若紫」の巻が『遊仙窟』を直接に該当巻が受容しているのではないかと考えられる点もなくはない」と指摘している(注12)。佐藤敬子氏は、「源氏物語は遊仙窟の引用によって、伊勢物語とは異なる新たな創造性、すなわち再創造性を発揮したのである」と述べている(注13)。

いっぽう、田中隆昭氏は、『源氏物語』の「若紫」の巻の北山の段の景色の描写や、光源氏と北山の僧都との会話の描写を考察し、言葉のレベルから、『遊仙窟』との関係を論じている(注14)。中西進氏は、「蜻蛉」の巻で『遊仙窟』の仙境の十娘の設定を利用して、女一の宮の異郷性を描いていることを指摘している(注15)。また、新聞一美氏は、訓読の角度から『源氏物語』が『遊仙窟』の影響を受けたことを論じて、『遊仙窟』の十娘の容貌が「橋姫」の巻の宇治の姫君たちに応用されることなどを指摘している(注16)。三角洋一氏は、「蜻蛉」の巻の中將のおもとが『遊仙窟』の十娘の侍女の影が見えると述べている(注17)。

また、「若紫」の巻と「宇治十帖」以外に、堀淳一氏は、「夕顔」の巻から「紅葉賀」の巻までの女君たちも『遊仙窟』の女性の造型と関係があると指摘している(注18)。新聞一美氏は、「夕顔」の巻の「邂逅相遇」という話型は、『遊仙窟』の男性が仙女とたまたま出逢う話型から影響を受けていると論じている(注19)。

以上のことから、『源氏物語』と『遊仙窟』の研究は、筋の類似の指摘に始まり、さらに、言葉のレベル、人物の設定などへ広く論じられていることが見られる。

ところで、短編小説である『遊仙窟』は、これまで指摘されたように、ただ、『源氏物語』の巻々にそれぞれに影響しているだけなのだろうか。また、長編物語の構想に、それなりの手法で参加しているのではないだろうか。この問題を解決することが本論文の目的である。そこで、「蜻蛉」の巻に見られる『遊仙窟』の表現を踏まえた会話や、「橋姫」の巻に登場する、『遊仙窟』の五嫂と十娘と連想できる宇治の姉妹に注目する。「宇治十帖」は『源氏物語』の正編と違い、舞台が宇治に移る。高橋亨氏は、宇治の物語は、「女」の物語だと指摘している(注20)。この「女」という主題も『遊仙窟』と合っている。ただ、「橋姫」の巻や、「蜻蛉」の巻だけではなく、「宇治十帖」という全体の物語は、『遊仙窟』の影響を受けているのではないのだろうか。

本論の第一部は、『遊仙窟』と日本古典文学(江戸時代まで)の関係を確認する。続いて、第二部は、『源氏物語』と『遊仙窟』の受容関係、特に「宇治十帖」を中心に論じる。『宇治十帖』において、『遊仙窟』の影響を受けたと見られる箇所は、薫という人物を中心に描かれている。薫と漢籍との関係もよく見られるので、第三部は、『孝経』という新しい観点から薫の人物造型を考察する。

特にことわりがない限り、古典本文の引用は小学館「新編日本古典文学全集」による。『遊仙窟』の本文と書き下し文は、『遊仙窟全講増訂版』(八木沢元 明治書院 昭和五十年一

月)を用いた。『うつほ物語』の本文は、『うつほ物語 全 改訂版』(室城秀之 おうふう
平成十三年十月)による。

- (1) 魯迅『中国小説史略』（中島長文訳注 平凡社 平成十一年七月）
- (2) 斎藤拙堂・斎藤正和『全釈拙堂文話』（五六ページ）（明徳出版社 平成二十七年七月）
- (3) 川口久雄『源氏物語』における中国伝奇小説の影―『飛燕外伝』『飛燕遺事』『趙后遺事』を中心として―（『日本文学研究』第38号 昭和二十八年三四合併号）
- (4) 新聞一美「もう一人の夕顔―帚木三帖と任氏の物語―」（『源氏物語の人物と構造』中古文学研究会 昭和五十七年五月）
- (5) 田中隆昭「源氏物語と歴史と伝奇―中国史書類伝奇類とのかかわりから―」（『源氏物語の探究』第14輯 平成元年九月）
- (6) 小島憲之「漢籍の享受―唐代小説『遊仙窟』の場合」（『国語国文』36 昭和四十二年九月）
- (7) 『万葉集』の相伴旅人の「松浦河に遊ぶ序」（巻四）、山上憶良の「沈痾自哀文」（巻五）などに『遊仙窟』の影響が見られる。この点について、第一章に詳しく論じる。
- (8) 『和漢朗詠集』は『源氏物語』と同時代の作品で、藤原公任を編集した歌集で、当時よく詠まれた漢詩句が入選されている。
- (9) 『奥入』のは、「遊仙窟」イキノ タエナムトスルモノヲ 故々イカハカリカ アハレナラム 将ホツキ タナスエヲ 織ヨリ 手ノ 一カキナラス 時ホツキ 々ヲ 弄ニ 二キクタニモ 小ニ 絃ニ 一ニ 耳ニ 聞ニ 猶ニ
- 気絶イキノ 眼見イカハカリカ 若アハレナラム 為怜キテウノイキサシハゴノカミノサイキケイカ オトモウトナレハ 気調キテウノイキサシハゴノカミノサイキケイカ 如兄オトモウトナレハ 崔季珪之小妹オトモウトナレハ
- 容貌ヨウハウノカラハセハニタリ 似オチニ 二ハンアンジンカ 舅ハハカタノヲヒナレハ 一ハ 潘安仁之ハハカタノヲヒナレハ 外ハハカタノヲヒナレハ 甥ハハカタノヲヒナレハと指摘している。『奥入』は「日本古典文学影印叢刊」（貴重本刊行会 昭和六十年九月）による。）
- (10) 『河海抄』は「遊仙窟」云々出於知恵」と指摘している。四辻善成が注する『河海抄』は、『源氏物語』研究初期の集大成的注釈書といえる。『源氏物語』古注釈史においても画期的な著書であり、その後の注釈に大きな影響を及ぼした。『河海抄』が指摘する『遊仙窟』との関係がある箇所は、五十四か所である。現存する古注釈書の中に、数が最も多いとは言える。『河海抄』は『紫明抄 素寂著 河海抄 四辻善成著 玉上琢彌編』（角川書店 昭和四十三年六月）を参照した）
- (11) 丸山キヨ子「源氏物語・伊勢物語・遊仙窟―わかむらさき北山・はし姫宇治の山荘・うひかうぶりの段と遊仙窟との関係―」（『日本文学』東京女子大学日本文学研究室 昭和三十六年二月）
- (12) 原岡文子『源氏物語 若紫』（有精堂校注叢書 昭和六十三年九月）
- (13) 佐藤敬子「若紫の巻のかいまみ―遊仙窟・伊勢物語初段との引用関係を中心とし

- て」(論究第37号(論究社)平成五年)
- (14) 田中隆昭「北山と南岳―源氏物語若紫卷の仙境的世界―」(『国語と国文学』平成八年十月、『源氏物語 引用の研究』所収、勉誠出版 平成十年二月)
- (15) 中西進『源氏物語』と『遊仙窟』(『文学史上の『源氏物語』』国文学 解釈と鑑賞別冊) 至文堂 平成十年六月)
- (16) 新間一美『源氏物語』若紫卷と『遊仙窟』(『源氏物語の展望』第5輯 三弥井書店 平成二十一年三月)
- (17) 三角洋一「蜻蛉卷の末尾部分と『遊仙窟』」(『むらさき』47号 紫式部学会編 平成二十二年十月)
- (18) 堀淳一「変奏と連鎖の構造―「夕顔」巻から「紅葉賀」巻に至るまでの女君たちと『遊仙窟』」(『王朝文学研究誌』8 平成九年三月)
- (19) 新間一美「源氏物語夕顔巻と遊仙窟―「邂逅相遇」の物語」(『源氏物語と東アジア』新典社研究叢書213 平成二十二年九月)
- (20) 高橋亨「宇治物語時空論」(『国語と国文学』51号 昭和四十九年十二月、『源氏物語の対位法』所収、東京大学出版会 昭和五十七年五月)

第一部 日本文学と『遊仙窟』

第一章 日本文学と『遊仙窟』

はじめに

『遊仙窟』は唐代伝奇で、作者は張文成である。中国では明朝まで読まれていたが、戦乱を経て散逸した(注1)。遣唐使とともに、日本に伝来したと見られる。日本には、写本や注釈書なども数多く残っていて、現代まで読まれている。

『遊仙窟』の現存する写本の中で、最も古いものは、実践女子大学山岸文庫蔵本で、正応元年(一二八八)の奥書があり、割注が施されている有注本である。残念ながら、現存する部分が全体の一割にも満たない。奥書がある有注本の元亨元年(一二三二)の金剛寺本も、完本ではなく、前後が失われた本である。完本として残っているのは、康永三年(一三四四)の醍醐寺本と、文和二年(一三三三)の真福寺本である。両者とも無注本である。その他に、嘉慶三年(一三八九)の陽明文庫本がある。江戸時代に入って、文保三年(一三二八年)江戸初期無期刊本、慶安五年(一六五二)刊本、元禄三年(一六九〇)刊本なども刊行された。本章では、日本文学と『遊仙窟』の関係を簡単に確認する。

一 平安時代以前の『遊仙窟』

『遊仙窟』の書名が、現存する日本古典文学の作品中に初めて見られるのは、奈良時代の歌人である山上憶良の「沈痾自哀文」で、『万葉集』に収められている(注2)。

唐の莫休符の『桂林風土記』に、「(前略)名鷲、字文成。弱冠応挙、下筆成章。(中略)又新羅、日本国前後遣使入貢、多求文成文集帰本国。其為声名遠播如此。著《雕龍策》、《帝王龜鏡》、《朝野僉載》二百卷。文成以五為県尉、因著《才命論》以適誌、盛行於世。有李季孫者、註《才命論》、言是燕公詞。蓋不覽唐史、率意紀文、大惑時人、一向紕繆」と書かれている(注3)。新羅や日本の使者が、多く、張文成の記事を求めて、その「文集」を本国に持ち帰ったことが分かる。山上憶良は、大宝元年(七〇一)に遣唐使少録に任命されて、第七回の遣唐使として入唐し、二年間滞在した。この間に『遊仙窟』を手に入れた可能性が高いと見られる。

同じ時代の歌人の大伴旅人の作品である「遊松浦川序」(『万葉集』卷四)にも『遊仙窟』の影響が多く見られる(注4)。山上憶良は、筑前守として赴任している時に、大宰帥の大伴旅人と親友になったから、旅人は山上憶良から『遊仙窟』を手に入れた可能性があるだろう。また、大伴旅人の息子である大伴家持が坂上大嬢へ贈って『万葉集』に採られている十五首の歌にも、『遊仙窟』の影響が多く見られる(注5)。

二 平安時代の『遊仙窟』

平安時代に入って、『遊仙窟』は貴族の間で広く読まれた。寛平三年（八九一）頃に成立した『日本国見在書目録』は、藤原佐世が宇多天皇の勅命によって編集された、日本に渡来していた漢籍の目録である（注6）。『日本国見在書目録』に「遊仙窟一卷」の記録がある（別集家）。平安時代初期に編集された辞書である『和名類聚抄』（承平年間（九三一〜九三八）には、『遊仙窟』の書名を直接に挙げられた引用が十四ヶ所ある（注7）。

平安初期の歌物語である『伊勢物語』と『遊仙窟』との受容関係が多く論じられている（注8）。その中で、『伊勢物語』の初段は、ある男が、初冠をして奈良の京の春日の里に鷹狩に行つて、美しい姉妹を垣間見た話である。この姉妹の容貌は「いとなまめいたる」（注9）とある。契沖は、『勢語臆断』で、「なまめくは遊仙窟に婀娜をなまめくとよめり」（注10）と、『伊勢物語』が『遊仙窟』の訓読を参考にしたことを指摘している。その上、訓読だけではなく、二人の美人と出逢う話は、『遊仙窟』を利用したという指摘もある（注11）。また、『源氏物語』が大きな影響を受けた『うつほ物語』には、『遊仙窟』の言葉が見られる。

かく仰せ承るはうれしけれど、ここに五人候ふ人は、四人は、皆犬に侍り。

（「国譲・下」の巻 七四六〜七四七ページ）

物語の中で、立場争いが激しくなる中、朱雀帝の後の宮が、弟である兼雅の協力を要請している。兼雅は、ここに集まっている人たちの四人が正頼の婿であることを述べて、后の宮の要請を拒否した。『うつほ物語全改訂版』の頭注には、「犬」を婿の意と説明し、『遊仙窟』の「女婿是婦家狗、打殺無_レ文」を引用している。

『遊仙窟』に出ている詩と作者張文成の詩は、『和漢朗詠集』や『新撰朗詠集』にも採られている（注12）。

張文成は、中国において、『新唐書』以外に見られない人物である。しかし、平安時代末期に成立した『唐物語』には、張文成が則天皇后の愛人であったという話（第九話）が見られる（注13）。この逸話の最後では、「この文は遊仙窟と申して、我国にも伝はれり」と、日本で『遊仙窟』が流布していることを明記している。

三 平安時代以降の『遊仙窟』

平安時代以降、『遊仙窟』は多様な作品に影響を与えたことが見られる。鎌倉前期の漢詩文集、藤原孝範の『明文抄』に、『遊仙窟』の引用がいくつか見られる（注14）。

また、『遊仙窟』の訓読は中世の辞書によく見られる（注15）。しかし、『遊仙窟』の訓読がいつ頃成立したのは分からない。『明文抄』には、『遊仙窟』の訓読に関する記録がある

(注 17)。

故人伝曰。遊仙窟説甚以興。天曆御時。有御談之御志而當時伝其説之人只木島神主^失名知説之由風聞。仍江納言維時卿。忽策疋馬。詣木島神主。示可受此説之旨。神主敷荒蓆於庭上。具授其説^{云々}。維時卿馳帰。參禁裏奉授之。
(一五四ページ)

「江納言維時卿」は、大江維時のことである。維時は、嵯峨朝の有名な学者で、木島神主から、『遊仙窟』の訓読を教えられた伝説が『文明抄』に見られる。奥野信太郎氏は、この伝説は大江維時が木島明神とする渡来人である秦氏が伝承する『遊仙窟』に学んだことが伝説化したものであると指摘している(注 16)。

『遊仙窟』は江戸時代の滑稽本、洒落本などにも影響を与えている。中でも、浮世草子の『風俗遊仙窟』は、その代表である。『風俗遊仙窟』は、作者の本名は不明で、寛延二年(一七四九)の作で、全四巻である。作者は、張文成の子孫に託して、『遊仙窟』の話をもとにして、江戸時代の『遊仙窟』を描いている。

おわりに

『遊仙窟』は唐土に生まれた作品であるが、本国では残っていない。幸いに、日本で本文だけではなく、多様な文学作品の中にも保存されている。以上は、『遊仙窟』と日本文学との深い関係の一端を述べたものである。『遊仙窟』の直接の引用や訓読の引用が多く見られる。それは、『源氏物語』が『遊仙窟』を受容した手法と大きく隔だっていると思われる。この点に関しては、後に触れよう。

- (1) 明朝の小説『春夢瑣言』の序文に、「盖世有張文成、所著遊仙窟、其書極淫之事、亦往往有詩、其詞尤陋寢不足見、至写媾合之態、不过脉張氣怒、頃刻数接之数字、頓覺無余味」と書かれていることで、明朝まで読まれていたと見られる。
- (2) 『万葉集』の本文の引用は、「新編日本文学全集」（小学館）による。「沈痾自哀文」で、『遊仙窟』曰、九泉下人、一錢不_レ直。」（七十七ページ）とある。
- (3) 唐の莫休符を撰する。『桂林風土記』は昭宗の光化二年（八九九年）に、檢校散騎常侍守融州刺史の任中に書いている。『全唐文』に撰入される。本文の引用は、維基文庫自由的図書館による。
- (4) 大伴旅人の「遊松浦川序」に、「僕問曰、誰郷誰家兒等、若疑神仙者乎」（五十一ページ）と書かれている。この部分は、『遊仙窟』の「見_下一女子向_二水側_一浣_レ衣。余問曰、此誰家舎也」から影響を受けたことが見られる。また、松浦川沿いで、会った「釣_レ魚女子」の容貌は、「花容無_レ双、光儀無_レ匹」と「開_二柳葉於眉中_一、発_二桃花於頬上_一」である。この描写は『遊仙窟』にも見られる。
- (5) 例えば、『万葉集』の巻四の第741番歌は、「夢の逢ひは苦しかりけりおどろきて掻き探れども手にも触れねば」である。男が、長々逢えない人と夢に逢ったけれども、目が覚めて、あの人を探しても手に触れることができないという歌である。この歌は、『遊仙窟』の「少時坐睡、即夢見_二十娘_一。驚覺攬_レ之、忽然空_レ手」という、主人公は夢に十娘を見て手をとって引き寄せたが触れられなかったという場面と連想できる。足立雍子氏の論文で詳しく論じている。「薫の位相についての一考察——『源氏物語』『蜻蛉』巻後半、『遊仙窟』との関わりを中心に」「埼玉女子短期大学研究紀要」第21号 平成二十二年三月）
- (6) 『日本国見在書目録』（『続群書類従 第30輯下 雑部』東京続群書類従完成会 昭和三十四年七月）
- (7) 『和名類聚抄』は「雕龍——日本古典全文検索叢書シリーズ⑨」による。『和名類聚抄』の中で、『遊仙窟』の書名を挙げられて直接の引用が十四ヶ所ある。以下通りである。
- ① 窮鬼 遊仙窟云窮鬼師説伊岐須太万
- ② 古老 遊仙窟云古老和名於岐奈比止今案云古老又一云老旧一云日本紀云老宿同上
- ③ 顔面 四声字苑云顔五姦反訓与面同眉目間也遊仙窟云面子師説加保波世一云保々豆岐
- ④ 眼皮 附広雅云眼五簡反和名万奈古目子也一云瞳童反訓同上遊仙窟云眼皮師説万比岐一説万奈古井
- ⑤ 眦 広雅云眦在詣反又才賜反和名万奈之利目裂也遊仙窟云眼尾師説訓同上

- ⑥要月 説文云 於宵反或作腰和名古之身中也遊仙窟云細細腰支師説古之波勢
- ⑦手子 遊仙窟云手子師説云太奈須惠
- ⑧牙床 遊仙窟云六尺象牙床楊氏漢語抄云牙床久禮度古
- ⑨筵 説文云筵音延和名無之路竹席也遊仙窟云五綵龍 筵今案俗又有九蝶筵依
 文名之
- ⑩疊子 唐式云飯椀羹椀疊子各一楊氏漢語抄云疊子字 之沼利乃佐良遊仙窟云麟
 脯豹胎紛綸於玉疊今案以玉為疊子也
- ⑪魚條 遊仙窟云東海鯔條魚條讀須波夜利本朝式云楚割
- ⑫雉脯 遊仙窟云西山鳳脯音甫師説保之止利俗用干鳥二字
- ⑬膠 遊仙窟云雉膠音翠師説比太禮説文云膠今案如許慎説者俗所謂阿布良之利
 是鳥尾肉也
- ⑭鯔 孫愐切韻云鯔側持反魚名也遊仙窟云東海鯔條鯔讀奈与之條讀見飲食部
- (8) 鈴木儀一「伊勢物語と遊仙窟」(渡辺三男博士古稀記念日中語文交渉史論叢「
 桜楓社 昭和五十四年四月)。中西進『源氏物語』と『遊仙窟』(『国文学解釈
 と鑑賞』至文堂 平成十年六月)。山本登朗「かいまみ」の背景―仙女譚から
 『伊勢物語』へ―(短歌誌「礫」平成十九年八月)、『遊仙窟』文化圏構想は
 可能か―「かいまみ」と「女歌」(『和漢比較文学』平成二十二年二月)。
- (9) 『伊勢物語』の本文は、「新編日本古典文学全集」(小学館 平成六年十二月)によ
 る。
- (10) 『勢語臆断』は『契沖全集9』(岩波書店 昭和五十年四月)
- (11) 丸山キヨ子「源氏物語・伊勢物語・遊仙窟―わかむらさき北山・はし姫宇治の
 山莊・うひかうぶりの段と遊仙窟との関係―」(『日本文学』東京女子大学日本
 文学研究室 昭和三十六年二月)。注(8)の鈴木儀一氏の論文。
- (12) 『和漢朗詠集 卷下』
- 705 容貌似舅、潘安仁之外甥。氣調如兄、崔季珪之小妹。〔遊仙窟〕
- 778 更闌夜静長門閉而不開。月冷風秋团扇杳而共絶。〔張文成策文〕
- 『新撰朗詠集』
- 732 可憎病鵲半夜驚人、薄媚狂鷄三更唱曉 〔張文成〕
- (本文は『和歌文学大系47』(明治書院 平成二十三年七月)による。)
- (13) (前略) 恋わふるそのみくつとなりぬればあふせくやしき物にそ有りける。
 この文は遊仙窟と申て、我国にも伝はれり。后是を見給ふたひに御身ほろひぬ
 へくおほされけり。唐の高宗の后に則天皇后の御事也。
- 『唐物語』は、中国の故事を翻案し歌物語の形式にした説話物語集である。『蒙
 求』『白氏文集』などを主要な出典とし、多くは有名な故事を題材としているが、
 この第九話は中国の原典が発見されていない。本文は、『校本唐物語』(池田利
 夫編 笠間書院刊 昭和六十三年)による。

- (14) 『明文抄』(『続群書類従第30輯下雑部』東京続群書類従完成會 昭和三十四年七月)第三卷の「人事部」に、「花容婀娜。天上無儔。玉体逶迤。人間少匹。輝々面子。荏苒畏彈穿。細々腰支。参差疑勒斷。遊仙窟」と書かれている。
- (15) 平井秀文「中世辞書の「遊仙窟」訓」(『日本文学研究』梅光学院大学 昭和四十九年十一月)、「中世辞書の「遊仙窟」訓」(『日本文学研究』梅光学院大学 昭和五十年十一月)。高橋宏幸『『図書寮本類聚名義抄』所引『遊仙窟』のテキストと和訓について』(都留文科大学大学院紀要) 平成二十一年十二月)。
- (16) 奥野信太郎「遊仙窟訓読の伝説について」(『芸文おりおり草』平凡社 平成四年九月)

第二部 『源氏物語』と『遊仙窟』

第一章 『源氏物語』における『遊仙窟』の受容―「蜻蛉」の巻に着目して―

はじめに

『源氏物語』の「蜻蛉」の巻の末尾には、女一の宮（明石の中宮腹の皇女）の女房中将のおもごとと、薫が交わした会話に、『遊仙窟』を踏まえる表現が出ている。本章では、『遊仙窟』がその箇所で見られることによって、女一の宮の物語にどんな意義を与えているかということ明らかにしたい。

一 「蜻蛉」の巻に見られる『遊仙窟』

薫は、以前、憧れの女一の宮を偶然に垣間見た。薫は、その時の衝撃が忘れられず、ふたたび、女一の宮を垣間見た渡殿を訪れた。その際に、女一の宮は不在で、女房たちが、月を見るために、渡殿に集まっています、箏の琴の爪音が聞こえてきた。この場面を引用しよう。

例の、西の渡殿を、ありしにならひて、わざとおはしたるもあやし。姫宮、夜はあなたに渡らせたまひければ、人々月見るとて、この渡殿にうちとけて物語するほどなりけり。箏の琴いとなつかしう弾きすさむ爪音をかしう聞こゆ。思ひかけぬに寄りおはして、^A「など、かくねたまし顔に掻き鳴らしたまふ」とのたまふに、みなおどろかるべかめれど、すこしあげたる簾うちおろしなどもせず、起き上がりて、^B「似るべき兄やはべるべき」と答ふる声、中将のおもごとか言ひつるなりけり。^C「まろこそ御母方をぢなれ」と、はかなきことをのたまひて、……

(「蜻蛉」の巻 二七一～二七二ページ)

薫は、箏の琴を弾いていた女房たちのところへ近づいて、(A)「など、かくねたまし顔に掻き鳴らしたまふ」と言葉を掛けた。すると、女房の中中将のおもとが、その薫の言葉を受けて、(B)「似るべき兄やはべるべき」と言った。それに対して、薫は、さらに、(C)「まろこそ御母方のおぢなれ」と答えた。

このように見る限り、この会話は意味不明である。会話の意味するところを解く上で、『遊仙窟』の参照が必要である。その際に、藤原定家の『奥入』（注1）の指摘が最も参考になると思われる。『奥入』の当該箇所を見よう。

遊仙窟

A 故々 将^二織手^一 一時々弄^二小絃^一

耳聞^ニ 猶氣絶^{イキノ} 眼見若^{イカハカリカ} 為怜^{アハレナラム}

C 氣調 如兄 崔季珪之小妹

B 容貌 似^ニ舅^一 潘安仁之外甥

「蜻蛉」の巻の、薫と中将のおもとの会話と『奥入』を見比べていく。薫と中将のおもとの会話のA、B、Cは、それぞれ『奥入』のA、C、Bと対応している。

薫の発言(A)は、『奥入』のAと対応する。『奥入』のAは、『遊仙窟』の一説を引いているが、ただ、冒頭部分を「ネタマシカホニ」と訓読している。その「ネタマシカホニ」という言葉が、薫の発言(A)と一致している。「故」という字を二つ重ねた「故故」という言葉に「ネタマシカホニ」という読み方は、現在されていないが、『奥入』や『源氏物語』の時代には、そのように訓読していたということだと考えられる(注2)。中将のおもとの「似るべき兄はべるべき」という発言(B)に対する薫の答えが、「まろこそ御母方をぢなれ」(C)である。このBとCの応酬は、『奥入』が引いている『遊仙窟』のCとBに当たる。『奥入』の指摘における『遊仙窟』の場面は二つある。それでは、『遊仙窟』に当たる部分を引く。

① 女子答曰、博陵王之苗裔、清河公之旧族。容貌似^レ舅、潘安仁之外甥。氣調如^レ兄、崔季珪之小妹。

(女子答へて曰く、博陵王之苗裔、清河公之旧族なり。容貌は舅に似たり、潘安仁の外甥なればなり。氣調は兄の如し、崔季珪の小妹なればなり。)

② 須臾之間、忽聞^ニ内裏調^レ箏^一之聲、僕因詠曰、

自隱多^ニ姿則^一 欺^レ他独自眠

故故将^ニ織手^一 時時弄^ニ小絃^一

耳聞猶氣絶 眼見若為怜

(須臾の間にして、忽ち内裏にて箏を調ぶるの声を聞く。僕因つて詠じて曰く、

自ら隠るるも姿則多る。他を欺きて独り自ら眠る。

故故織手を將つて、時時小絃を弄す。

耳に聞くも猶氣絶えんとす、眼に見ば若為ばかり怜からん

『遊仙窟』の主人公は張文成である。張文成が皇帝に遣わされて、出かける途中、「神仙の窟」で館を見つけた。張文成が、近くで洗濯をしている下女らしき人に、誰の住まう館かと尋ねると、若い未亡人の女性が住んでいるということである。その女性が主人公の十娘である。後に、張文成はこの十娘と歌を詠み交わし、歓楽の一夜を過ごして、二人はそのまま別れて二度と会えないことになる。

その神仙の館を張文成が発見して、下女と交わした会話①に、下女は館の女主人の素性を、「博陵王之苗裔、清河公之旧族」(注3)と明かして、「容貌似舅、潘安仁之外甥。氣調如兄、崔季珪之小妹」(注4)と説明した。この部分を踏まえて、「蜻蛉」の巻では、薫と中将のおもとが、「似るべき兄やははべるべき」(B)、「まろこそ御母方をぢなれ」(C)と会話の応酬をしているのである。

その後、張文成が館から聞こえる箏の琴の音を耳にした②。箏の琴を弾いているのは十娘である。これは『奥入』の記事と一致している。前に述べたように、「故故」の訓読は『奥入』の訓読とかなり異なっている。ところで、『奥入』の訓読がないと、ここが『遊仙窟』の引用であることが分からないため、『奥入』の指摘は極めて重要である。『奥入』の訓読を参考しながら、「蜻蛉」の巻を読むと、特に中将のおもとの発言(B)は、薫の発言(C)と噛み合わないと感じられる。まず、『源氏物語』の注釈書を探ってみる。

薫の発言(A)について、『源氏物語』の注釈書は、概ね、『奥入』が引用した『遊仙窟』の一節を引いている。薫は、例によって、西の渡殿に「ありしにならひて、わざと」(波線部)訪ねた。姫宮は、「夜はあなたに渡らせたまひければ」(波線部)とあるように不在だったのであるが、中将のおもとが弾く箏の琴の爪音が「をかしう」(波線部)聞こえてきた。張文成詩②の首聯は、「自隱多姿則一、欺他独自眠」である(波線部)。「あなたは美しい姿を隠れて、私は寂しくてひとりで眠る」の意味で、張文成は、戯れの口調で、十娘の姿が隠れたことに文句を言った。領聯に、薫の発言(A)が見られる。薫は、張文成の詩の領聯を用いて、中将のおもとに話しかけているが、心には、不在の女一の宮のことを思っていると考えられる。

中将のおもとの発言(B)の部分については、諸説が分かれている。『花鳥余情』は、「一品宮は女二宮の御このかみなり」(注5)と解釈した。「このかみ」を女二の宮(薫の妻)の姉である女一の宮のことを指すと解いた。『花鳥余情』の解釈と違って、『弄花抄』は、薫の戯れの発言(A)を、「耳に聞たにも一眼にみん時いかはかりかはおもしろからんと云

心はへ也」と解釈した(注6)。張文成は、箏の音に惹かれて、詩を詠んだ(②)。この詩の頸聯は、「耳聞猶氣絶、眼見若為憐」(傍線部)である。『弄花抄』は、この頸聯を踏まえ、薫の発言(A)を、「女一宮の事」を念頭においたものと解釈した。しかし、実際に箏の琴を弾いていたのは、女房のうちの誰かであった、女一の宮ではないし、薫もそのことは分かっているはずである。そして、中將のおもとの発言(B)を、「心は匂宮の事を思へり女一宮に似給へる匂宮の兄にていらせ給へるを見給へかしなといふ心也」と解釈した。ところで、中將のおもとは、薫が女一の宮を慕っていることを知らないはずである。つまり、中將のおもとは念頭に置いている「このかみ」は、女一の宮でも、匂宮でもなかったはずだと考えられる。したがって、『弄花抄』の説明が妥当であるとは思われない。

薫の答え(C)に関して、『花鳥余情』は、「薫は明石の中宮の弟であれば、女一の宮の母方のおじにあたれる」と説明した。薫は、系譜上では、光源氏の子であり、女一の宮の生母の明石の中宮の異腹の弟に相当している。だから、薫は女一の宮の母方の叔父とは言えるのだろうか。しかし、中將のおもとは、薫が自分を母方の叔父だと述べたことに、何を感じただろうか。恐らく、中宮腹の皇子皇女たちの叔父の意味だとは了解しただろうが、薫の念頭に女一の宮があることまでは、その時点で特定できなかっただろう。そして、薫の答えは、唐突な発言であったと思われる。

日本語敬語の角度からみると、『玉の小櫛』の解釈が妥当だと思われる(注7)。『玉の小櫛』を引用しよう。

ねたましがほに 女一宮の事を心にもちてとあるは、わろし、其意はなし

にるべきこのかみや侍るべき これを、女一の宮又匂宮などの事にかけていへる
説は、みな誤也、もし然らば、似給ふべきこのかみやおはすべきとこそいふべけれ、
侍るべきとはいかでかいはん、さればたゞ、薫君の、遊仙窟の詞をのたまへるをうけ

て、又同じ書の詞にて、答へたるのみにて、我うへにていへる詞也、我をねたましが
ほ也とのたまへども、かの崔季珪がやうなる兄は侍るべきかはといふ也、次なる薫君
の詞は、此答によりて、又その対の語をもてのたまへる也、

「蜻蛉」の巻に見える中將のおもとの発言(B)は、『玉の小櫛』(傍線部)が解釈した通りである。「薫さまは私たち女房のことを意味ありげな顔で箏を弾く十娘に喩えたが、十娘の兄崔季珪のような美男子の兄が、我々などにいるはずはありません」という意味である。要するに、薫の言った「ねたまし顔」の女性を、中將のおもとは自分たちのことだと考えたわけである。『日本古典文学大系』が、「遊仙窟の故事を用いたのは、只、それを、風流じみて戯れに言いかわしたに過ぎない。殊更に、この所を女一宮と匂宮に関係させて説く必要は、全くないのである。」(注8)と指摘しているは、『玉の小櫛』を受けた見解と

思われる。ところで、わざわざ『遊仙窟』という唐代の作品を引っ張り込んでおいて、それには何の意味もないというのは腑に落ちない話ではあろう。やはり、この会話に『遊仙窟』が踏まえられたことには、それなりの意義を見出すべきものと思われる。

二 女一の宮と十娘

新間一美氏は、この「蜻蛉」の巻に見られる会話文と『遊仙窟』を比べながら、『遊仙窟』の訓読の重要性を論じている(注9)。三角洋一氏は、中將のおもとが、ここで、十娘の下の役を演じることによって、読者に『遊仙窟』を想い起こすように指示していると指摘している(注10)。ところで、薫は、その中將のおもとの発言(B)を受けて、「まろこそ御母方のをぢなれ」(C)と言った。薫は女一の宮の母方の叔父であるから、薫が『遊仙窟』の十娘に準えたのは、女一の宮である(注11)。つまり、中將のおもとは、自分たちが十娘に喩えられていると思って、会話を進めていたのに、突然、薫は女一の宮のことにすり替えてしまったのである。

薫は、なぜこの箇所です娘に喩える女性を女一の宮に準え直したのだろうか。また、『遊仙窟』の十娘と「蜻蛉」の巻の女一の宮は、それなりの共通点があるのだろうか。二人の共通点を探ってみよう。まず、十娘の描写を見ていく。

女子答曰、博陵王之苗裔、清河公之旧族。容貌似舅、潘安仁之外甥。氣調如兄、崔季珪之小妹。華容婀娜、天上無儔、玉体透迤、人間少疋。耀耀面子、荏苒畏彈穿、細細腰支、參差疑勒斷。韓娥宋玉、見則愁生、絳樹青琴、對之羞死。千嬌百媚、造次無可比方、弱体輕身、談之不能備尽。

(女子答へて曰く、博陵王の苗裔、清河公の旧族なり。容貌は舅に似たり、潘安仁の外甥なればなり。氣調は兄の如し、崔季珪の小妹なればなり。華容婀娜として、天上にも儔無く、玉体透迤として、人間に疋少し。耀耀たる面子は、荏苒として彈穿を畏れ、細細たる腰支は、參差として勒斷を疑ふ。韓娥宋玉も、見れば則ち愁生じ、絳樹青琴も、之に對すれば羞ぢて死せん。千嬌百媚、造次は比方す可き無く、弱体輕身、之を談るも備さに尽すこと能はず、と)

十娘は王族の子孫(注12)であり、容姿は、「華容婀娜、天上無儔、玉体透迤、人間少疋」(波線部)のである。十娘の顔の方は、「談之不能備尽」(傍線部)となっている。十娘の美しさは言葉で伝えることができないということである。簡単に言うと、極めて美しい人だという意味である。いっぽう、女一の宮はどうだろうか。

春宮の御さしつぎの女一の宮をこなたにとりわきてかしづきたてまつりたまふ。その御あつかひになん、つれづれなる御夜離れのほども慰めたまひける。いづれも

分かず、うつくしくかなしと思ひきこえたまへり。

（「若菜・下」の巻 一七七〜一七八ページ）

女一の宮は、春宮のすぐ下の妹宮である。今上帝の後である、明石の中宮の第一皇女で、極めて高い身分である。紫の上は、女一の宮を六条の院に引受けて、大事に育てていた。また、女一の宮の容貌は、

唐衣も汗衫も着ず、みなうちとけたれば、御前とは見たまはぬに、白き薄物の御衣着たまへる人の、手に氷を持ちながら、かくあらしをすこし笑みたまへる御顔、言はむ方なくうつくしげなり。

（「蜻蛉」の巻 二四八ページ）

とあるように、十娘と共通している。二人の高貴な血筋も共通している。このように、二人が共通点を持っているのは確かである。しかし、それだけではなく、薫が女一の宮を十娘に準えたことには、もつと深い意味があると思われる。

三 薫が女一の宮への思慕

「蜻蛉」の巻の重要なテーマの一つは、薫が女一の宮に憧れるという物語である。それを描く場面を見ていく。

ア ここにやあらむ、人の衣の音すと思して、馬道の方の障子の細く開きたるより、やをら見たまへば、例、さやうの人のゐたるけはひには似ず、はればれしくしつらひたれば、なかなか、几帳どもの立てちがへたるあはひより見通されて、あらはなり。氷を物の蓋に置いて割るとて、もて騒ぐ人々、大人三人ばかり、童とゐたり。唐衣も汗衫も着ず、みなうちとけたれば、御前とは見たまはぬに、白き薄物の御衣着たまへる人の、手に氷を持ちながら、かくあらしをすこし笑みたまへる御顔、言はむ方なくうつくしげなり。いと暑さのたへがたき日なれば、こちたき御髪の、苦しう思さるるにやあらむ、すこしこなたになびかして引かれたるほど、たとへんものなし。ここらよき人を見集むれど、似るべくもあらざりけり、とおぼゆ。御前なる人は、まことに土などの心地ぞするを、思ひしづめて見れば、黄なる生絹の単衣、薄色なる裳着たる人の、扇うち使ひたるなど、用意あらむはや、とふと見えて、「なかなかものあつかひに、いと苦しげなり。たださながら見たまへかし」とて、笑ひたるまみ愛敬ぶきたり。声聞くにぞ、この心ざしの人とは知りぬる。……「いな、持たらじ。掬むつかし」とのたまふ。御声いとほのかに聞くも、限りなくうれし。まだいと小さくおはしまししほどに、我も、ものの心も知らで見たてまつりし時、めでたの児の御さまや、と見たてまつりし。その後、たえてこの御けはひをだに聞かざりつるものを、いかなる神

夏、亡くなった光源氏と紫の上のために、六条の院で御八講が行われている。明石の宮と女一の宮が六条の院に滞在して、女房たちも大勢春の町に集まっている。薫が、偶然に、「白き薄物の御衣」を着ていた女一の宮を垣間見た。薫は、長年、女一の宮を思慕している。女一の宮の異腹妹である女二の宮と結婚してからも、その気持ちが絶えない。念願が叶った薫は、「いかなる神仏のかかるをり見せたまへるならむ」と思って、神仏の導きで女一の宮の姿を見ることができたと理解した。

イ やうやう聖になりし心を、ひとふし違へそめて、さまざまなるもの思ふ人ともなるかな、その昔世を背きなましかば、今は深き山に住みはてて、かく心乱らまじや、など思しつづくるも、安からず、などで、年ごろ、見たてまつらばやと思ひつらん、なかなか苦しうかひなかるべきわざにこそ、と思ふ。「蜻蛉」の巻 二五一ページ

薫が女一の宮の姿を一目見たいと思ってきた念願がかなったが、かなってみると、かえって思いが募り、胸が苦しくなったと述べて、「年ごろ、見たてまつらばやと思ひつらん、なかなか苦しう、かひなかるべきわざにこそ」と思っている。

ウ 絵に描きて恋しき人見る人はなくやはありける、ましてこれは、慰めむに似げなからぬ御ほどぞかしと思へど、昨日かやうにて、我まじりぬ、心にまかせて見たてまつらましかばとおぼゆるに、心にもあらずうち嘆かれぬ。

「蜻蛉」の巻 二五二〜二五三ページ

垣間見の翌日に、薫が妻の女二の宮に、女一の宮と同じ装束を着せた。また、女房たちに氷を割らせて、女二の宮に持たせた。ところで、いくら女一の宮を真似させても、薫は女一の宮の美しさとは比較にならない女二の宮を見て、「昨日かやうにて、我まじりぬ、心にまかせて見たてまつらましかば」と嘆いた。

エ 女の御身なりのめでたかりしにも劣らず、白くきよらにて、なほありしよりは面瘦せたまへる、いと見るかひあり。おぼえたまへりと見るにも、まづ恋しきを、いとあるまじきこととしづむるぞ、ただなりしよりは苦しき。

「蜻蛉」の巻 二五三〜二五四ページ

その後、薫は明石の中宮のところに参上して、匂宮が現れた。薫が匂宮の美しさを、「いと見るかひあり」と思い、女一の宮に似ていると思つて、「おぼえたまへりと見る」とある。しかし、同時に、その女一の宮に対する気持ちは「いとあるまじきこと」であり、薫が堪

える。

オ 芹川の大將のとは君の、女一の宮思ひかけたる秋の夕暮に、思ひわびて出でて
行きたる絵をかしよう描きたるを、いとよく思ひ寄せらるかし。かばかり思しなびく人
のあらましかばと思ふ身ぞ口惜しき。

荻の葉に露ふきむすぶ秋風も夕ぞわきて身にはしみける

と書きても添へまほしく思せど、さやうなるつゆばかりの気色にても漏りたらば、
いとわづらはしげなる世なれば、はかなきことも、えほのめかし出づまじ。

〔蜻蛉〕の巻 二五九〜二六〇ページ

薫は、絵を収集して、女一の宮とところを送った。その中に、「とは君」が「女一の宮」という女性に思いを寄せた絵がある。諸説はあるが、新編日本古典文学全集の頭注は、「とは君」は「芹川の大將」の幼名かと解説している(注13)。その説によれば、「芹川の大將」という大將が女一の宮を慕うことが、薫という大將が女一の宮を慕う状況と一致している。これらの記事で女一の宮を垣間見て以来、薫はこのようにずっと思いを寄せてきた。その思いは、薫と中將のおもとが会話を交わした直後の場面のような気持ちにつながる。この場面を挙げよう。

カ 「例の、あなたにおはしますべかめりな。何わざをかこの御里住みのほどにせ
させたまふ」など、あぢきなく問ひたまふ。「いづくにても、何ごとをかは。ただ、か
やうにてこそは過ぐさせたまふめれ」と言ふに、をかしの御身のほどやと思ふに、す
ずるなる嘆きのうち忘れてしつるも、あやしと思ひ寄る人もこそと紛らはしに、さし
出でたる和琴を、ただ、さながら掻き鳴らしたまふ。律の調べは、あやしくをりにあ
ふと聞こゆる声なれば、聞きにくくもあらねど、弾きはてたまはぬを、なかなかなり
と心入れたる人は消えかへり思ふ。わが母宮も劣りたまふべき人かは、后腹と聞こゆ
ばかりの隔てこそあれ、帝々の思しかしづきたるさま、異事ならざりけるを、なほ、
この御あたりはいとことなりけるこそあやしけれ。明石の浦は心にくかりける所かな、
など思ひつづくることどもに、わが宿世はいとやむごとなしかし、まして、並べて持
ちたてまつらばと思ふぞいと難きや。

〔蜻蛉〕の巻 二七二〜二七三ページ

薫は、自分の母である女三の宮(朱雀帝の皇女)と比べてみても、女一の宮の方がさらに上だと感じて、「明石の浦は、心にくかりける所かな」と思っている。女一の宮の美しさが、彼女の母親である明石の中宮の生まれた明石の地に由来するという理解だと思われる。この明石の異郷性については、すでに指摘されている(注14)。中西進氏は、この場面について、『遊仙窟』をもって仕立てられた舞台は、女一の宮の奥にもう一つ「明石の浦」という隠し舞台をしつらえたと指摘している(注15)。

薫にとつて、無上の美しさを持つ女一の宮は、この世の存在とは思われない。そうした薫の思いを示すためには、『遊仙窟』の異郷のイメージが必要であった。そして、その異郷性を強く示すためには、『遊仙窟』に加えて、『源氏物語』に登場する明石という異郷も必要だったのである。言わば、女一の宮は、二重の異郷性に彩られていることになる。『遊仙窟』の「仙窟」に、明石という異郷を重ねた、深い異郷のイメージの中で、この世のものとは思えない絶世の美女である女一の宮が描かれるということである。

四 へ見るくという主題

女一の宮は、「神仙の窟」に住む十娘のように、薫には手が届かない女性なのである。しかし、ここで一つ疑問が湧く。薫は女一の宮を、その手に抱くことはなかったが、『遊仙窟』の張文成は、一度だけだが、十娘との甘美な夜を過ごしている。その違いはどう考えた方がいいのだろうか。それを見る上で、「蜻蛉」の巻の最後の部分が重要ではないだろうか。「蜻蛉」の巻の巻末の部分を見よう。

……ただかの一つゆかりをぞ思ひ出でたまひける。あやしうつらかりける契りどもを、つくづくと思ひつづけながめたまふ夕暮、蜻蛉のものはかなげに飛びちがふを、

「ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消えしかげろふ

あるかなきかの」と、例の、独りごちたまふとかや。

（「蜻蛉」の巻 二七五〜二七六ページ）

この巻の最後のところは、このように結ばれている。薫は、夕暮れに、飛び交う蜻蛉を見て、「ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消えしかげろふ」という歌を詠んでいる。この時に、蜻蛉に喩えられたのは、「ただかの一つゆかり」であった。つまり、「八の宮のゆかりの姫君たち」である。新編日本古典文学全集の頭注は、「あやしうつらかりける契りども」に、大君、中の君、浮舟という宇治の三姉妹との縁を挙げている（注16）。ところが、「蜻蛉」の巻の終盤には、宇治の三姉妹の話題は出てこない。女一の宮の話が長々と語られ、次に女一の宮の女房に成り下がった「宮の君」に少し触れられて、「ありと見て」云々の歌が詠まれて終わる。そこで宇治の三姉妹が登場するのであるが、少し唐突で、必然性に欠けたものと言えよう。唐突ながら、ここで宇治の姉妹たちの話が出てくるは、「蜻蛉」の巻で宇治の三姉妹全体の物語が終わり、以後の「手習」の巻、「夢浮橋」の巻では、浮舟一人の物語に絞られるからだと思われる。となると、この「蜻蛉」の巻の巻末は、宇治の三姉妹の物語の終焉である。そして、同時に、これまでの物語の総括でもあったと考えられる。

女一の宮の物語も、前に引用した箇所ですべて終わってしまったのであるが、総括らしい総括はない。したがって、女一の宮の物語の総括も、この「蜻蛉」の巻の巻末で成し遂げられると見るのが、妥当だろう。そう考えると、例の「ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消えしかげろふ」という薫の独詠歌は、宇治の三姉妹を念頭にただけにとどまらないのではないだろうか。

長年の念願が叶って女一の宮の姿を垣間見て、自分の目に姿を焼きつけながら、結局はこの手にできなかった、幻のような女一の宮に対する無念の思い、そこを読まなければならぬような気がするのである。

そう考えると、前に見てきた薫が女一の宮を思慕している一連のエピソードは示唆的だと思われる。あくまで場面に、繰り返し「見る」という言葉が確認できる。この巻で語られる女一の宮の一連のエピソードは、まさに「見る」が主題になっている。女一の宮の姿を見た薫が、結ばれることを夢に見て、見果てぬ夢に終わる。「見る」という言葉に支えられて、最後まで思いを果たせなかった女一の宮の物語は、「ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消えしかげろふ」という最後の独詠歌と響き合うように思われるのは、とても偶然だとは考えられないだろう。

また、薫と中将のおもとが会話を交わした直後の場面（カ）の最後に、薫は、女一の宮と女二の宮を「並べて持ちたてまつらば」と思っているが、やはり「いと難きや」と嘆いた。足立雍子氏は、「そのように二人の女性を手にとりたいという思いは『遊仙窟』にも見出せる」と指摘している（注17）。

薫にとって、「明石の浦」のゆかりの女一の宮は、「神仙の窟」に住んでいる女たちのように、手が届かない女性なのではないだろうか。女一の宮の物語に、『遊仙窟』が引用された事情については、女一の宮が異郷の仙女に見立てるための仕掛けだったと考えた。そうだとすれば、薫にとって女一の宮はこの世の男性が手にできない幻のような異郷の女性だったわけである。

もちろん、『遊仙窟』では、一応張文成と十娘の間に歓楽の一夜が成立したが、薫は女一の宮に指一本触れることができなかった。ところで、平安時代の最上流貴族男性にとって、当帝の後腹の第一皇女である女一の宮ほどの高貴な女性の姿を見たことじたいは、夢のような話なのである。そのような無上の幸運に与かりながら、それ以上の関係に進めなかった点に、一夜限りで終わった張文成との符号を見出せるように思われる。

確かに、『遊仙窟』の話は、歓楽の一夜をとにもする点に話題の中心がある。ただし、前に引用した中西氏の論文で、女一の宮が置かれた「御里住み」が「仙境まがい」のものとして見立てられていることが指摘されていて重要である（注18）。女一の宮を垣間見たことじたいが、薫にとって最大級の歓楽なのであり、それが実現されながら、それ以上発展しなかったところに最も肝心な点がある。

このように考えると、「蜻蛉」の巻の最後の「ありと見て手にはとられず……」の独詠歌に、女一の宮の物語までもが色濃く滲んでいるような気がするのは、単なる錯覚ではない

だろう。女一の宮の物語も、この薫の独詠歌を以って閉じられたものと考えerわけである。

おわりに

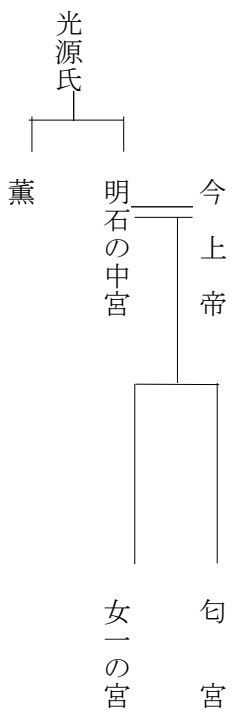
「蜻蛉」巻末は、女一の宮の物語の総括の意味もあわせ持っているものと考えられ、文脈上は宇治の姫君たちとの悲哀を物語ったとされる「ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消えしかげろふ」という薫の独詠歌には、なまの姿を垣間見おきながら、実際に手にはできなかつた女一の宮に対する薫の無念の情が底流しているのである。

- (1) 『奥入』は、「日本古典文学影印叢刊」（貴重本刊行会 昭和六十年九月）による。
- (2) 故故将織手時弄小絃（こゝにねたましかほにしてほそやかるてをもてよりよりにほそをゝかきならず）醍醐寺本蔵古鈔本（『遊仙窟』付録 岩波文庫 平成二年一月）による訓読である。
- (3) 博陵王、東漢末から唐代まで続いた貴族社会における名族の一つ。清河公、名族の一つ。
- (4) この場面は、『和漢朗詠集』（卷下・妓女）に収録されている。
705 容貌似^レ舅、潘安仁之外甥。
容貌のかほばせは舅に似たり 潘安仁が外甥なれば
氣調如^レ兄、崔季珪之小妹。
氣調のいきざしは兄のごとし 崔季珪の小妹なれば
（本文は、「新潮日本古典集成」（新潮社 昭和五十八年九月）による。）
- (5) 古注釈の引用は、「源氏物語古注集成」（桜楓社）による。
松永本『花鳥余情』（伊井春樹編 源氏物語古注釈1 昭和五十三年四月）
これも遊仙窟の詞なり一品宮は女二宮の御このかみなりうすものゝひとへきせ奉りてみ給しなとはかたちの似給へる心なるへし
- (6) 『弄花抄』（伊井春樹編 源氏物語古注釈8 昭和五十八年四月）
人にねたましく思はするやうに琴などを引と也薰の心は見河遊仙窟の句の故^{ネタマ}
^{シカホニ}此心を下に思ひての給へり耳に聞たにも一眼にみん時いかはかりかはおもしろからんと云心はへ也女一宮の事を心にこめての給へり
同遊仙窟に 氣調のいきざしは兄のごとしと云詞にていらへたり心は匂宮の事を思へり女一宮に似給へる匂宮の兄にていらせ給へるを見給へかしなといふ心也
による。
- (7) 『源氏物語玉の小櫛』は、『本居宣長全集 第四卷』（筑摩書房 昭和四十四年一月）による。
- (8) 日本古典文学大系『源氏物語5』（岩波書店 昭和三十八年四月）
- (9) 新聞一美「源氏物語若紫巻と遊仙窟」（『源氏物語の展望』第五輯 三弥井書店 平成二十一年三月）。前注（2）に見られる「故故将織手時弄小絃」という句に「弄す」という語がある。『遊仙窟』の古写本により、「弄す」が「つみならず」と「かきならず」という二種類の訓がある。新聞氏は、この「つみならず」という訓が別本系の「蜻蛉」の巻に見られることを指摘している。『遊仙窟』の訓読は『源氏物語』の本文研究において重要な意味を持っていると指摘している。
- (10) 三角洋一「蜻蛉巻の末尾部分と『遊仙窟』（「むらさき」47号 紫式部学会編 平

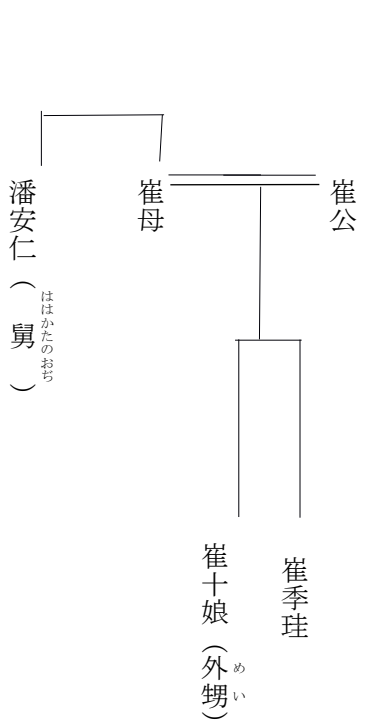
成二十二年十月) 中将のおもとの役割 (前略) そして中将には、主である女一の宮の風流な日常を薫に伝える役割が、(中略) 中将は崔十娘の婢の役を演じることで、読者に『遊仙窟』を想い起こすように指示しているのであった。

(11) 【参考系図】

(『源氏物語』「蜻蛉」の巻の人物系図)



(『遊仙窟』下女の語った十娘の素性)



(12) 前注の(3)。

(13) 新編日本古典文学全集の頭注(「蜻蛉」の巻 二五九ページ)に、「芹川の大將」は散逸物語の一つ。それを絵にしたもの。「とお君」は、主人公の芹川の大將の幼名か。この絵は、女一の宮に恋する主人公が、思いあまって女君を訪ねる秋の夕暮の場面。この絵の主人公に、自分(薫)の女一の宮思慕をなぞらえてみる。

(14) 太田敦子「女一宮と氷」『源氏物語』「蜻蛉」巻における薫の垣間見をめぐって——(『源氏物語姫君の世界』新典社 平成二十五年四月)に、「その氷を女房たちと与える女一の宮には、「明石」という異郷を背景にもつ姿が見て取れた。」とある。

(15) 中西進『源氏物語』と『遊仙窟』(「文学史上の『源氏物語』」『国文学解釈と鑑賞別冊』至文堂 平成十年六月)は、「この、薫がたどる心理の過程を、より奥深く仙郷へと入り込んでいく過程だといえ、あまりにも比喩的になりすぎるかもしれないが、少なくとも『遊仙窟』をもって仕立てられた舞台は、一の宮の奥にもう一つ「明石の浦」という隠し舞台をしつらえたとはいえるだろう。」と語っている。

(16) 新編日本古典文学全集の頭注(「蜻蛉」の巻二七五ページ)によって、「あや

しうつらかりける契りども」は、大君との死別、中の君が他人の妻、浮舟が行方不明のことを指している。

(17) 足立雍子「薫の位相についての一考察——『源氏物語』『蜻蛉』巻後半、『遊仙窟』との関わりを中心に」(埼玉女子短期大学研究紀要第21号 平成二十二年三月) 十娘ともう一人の女性の五嫂は、「神仙の窟」に開かれた宴に出ていた。五嫂という女性もたいそう美人であるし、張文成が、「欲兩花俱採」と思った。十娘は張文成に、「遮_レ三不_レ得_レ一、覓_レ兩都盧失」と諫めた。結局、張文成は、二人の美女を共に手に入れる願望が叶わなかった。

(18) 前注(15)の論文。「しかも今の状況を「御里住みのほど」というのは用意周到ではないか。事実からいっても、ここで「里」を意識することは、「御里」を仙郷まがいのものと見なそとする意志が動いているのではないか。」とある。

第二章 『源氏物語』の北山と宇治の山荘と『遊仙窟』

はじめに

『遊仙窟』は異郷訪問譚である。それは、冒頭部分から伺える。

須臾之間、忽至^二松柏巖^一桃花澗^二。香風触^レ地、光彩遍^レ天。

張文成は、積石山に入って、「桃花澗」という所に辿り着いた。この「桃花澗」は、陶淵明の異郷訪問譚『桃花源記』の仙境である。『遊仙窟』は張文成が、既に、仙境の世界に入ったことを示している。一方、『源氏物語』の世界で、光源氏の邸である六条の院は「生ける仏の御国」「初音」の巻 一四三ページ）であり、仙境のような空間である。ところが、六条の院の以外の空間はどうだろうか。本章では、『遊仙窟』と、その影響を受けた「若紫」の巻の北山と、「橋姫」の巻を初めとする「宇治十帖」に見られる宇治の山荘関係を明らかにしたい。

一 北山の風景と『遊仙窟』

「若紫」の巻で、光源氏が瘧病に悩まされて、供人四五人を連れて、北山の聖のところへ行った。その途中の風景は、

やや深う入る所なりけり。三月のつごもりなれば、京の花、盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまもならひたまはず、ところせき御身にて、めづらしう思されけり。

〔若紫〕の巻 一九九～二〇〇ページ）

と描かれている。三月の末であるが、都と異なつて、北山では、「山の桜はまだ盛りにて」（傍線部）とあるように、まだ山桜が咲いている。このような景色を見慣れていない光源氏は、霞がかかった景色を眺めて、「絵にいとよくも似たるかな」（「若紫」の巻 二〇二ページ）と感じている。

明けゆく空はいといたう霞みて、山の鳥どもそこはかとなく轉りあひたり。名も知らぬ木草の花どもいろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみ歩くもめづらしく見たまふに、なやましさも紛れはてぬ。……僧都、見えぬさまの御くだもの、何くれと、谷の底まで掘り出でいとなみきこえたまふ。

〔若紫〕の巻 二一九～二二〇ページ）

北山の聖に加持をしてもらった光源氏が、北山の僧都の坊で一夜を過ごした。その翌朝、北山の僧都の坊に、「名も知らぬ木草の花ども」や、歩いている「鹿」が見えた。また、北山の僧都は、光源氏のために、「見えぬさまの御くだもの、何くれ」を掘り出した。ここで見られる「鹿」も、仙境を表現するものである（注1）。

新聞一美氏は、『遊仙窟』の仙境を山の仙境と水の仙境に分けて対照して、『源氏物語』においても、同様に二つの仙境に分けられると指摘している（注2）。新聞氏が指摘するように、「若紫」の巻の北山は、『遊仙窟』の「山」の仙境と対応している。病に悩まされている光源氏は、ある人に「北山になむ、なにがし寺といふ所にかしこき行ひ人はべる」（「若紫」の巻 一九九ページ）と教えられた。しかし、年配の聖が都に行くのは無理である。それをきっかけとして光源氏一行が北山へ出かけた。

「山」を「仙境」とする描写は、『源氏物語』の以前の作品の中にも見られている。

「物語の出来初めの親」と言われる『竹取物語』の中には、竹取の翁が「野山」でかぐや姫を発見したと描かれている。

いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしくうてあたり。

『竹取物語』 一七ページ

竹取の翁は、かぐや姫を山の麓にある家に連れて帰って育てた。

また、物語の末尾に、勅使は天皇のかぐや姫への返事の手紙とかぐや姫から贈られた不死薬を駿河の国にある山の頂で焼いたと書かれている。

勅使には、つきのいはがさといふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂に持てつくべきよし仰せたまふ。峰にてすべきやう教へさせたまふ。御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。

そのよしうけたまはりて、士どもあまた具して山へのぼりけるよりなむ、その山を

「ふじの山」とは名づけける。

その煙、いまだ曇の中へ立ちのぼるとぞ、いひ伝へたる。

『竹取物語』 七七ページ

かぐや姫の発見から物語の最後まで、「山」ということばが多く出ている。『竹取物語』においては、「山」が人間の世界と天人の世界を繋ぐ空間である。

『源氏物語』に大きな影響を与えた『うつほ物語』にも、仙境と思われる「山」の描写

が見られる。『うつほ物語』の「俊蔭」の巻に、「北山」という場所が見られる。元服前の仲忠が母である俊蔭の娘と一緒に暮らしていた所である。北山は、次のように語られている。

「……この川のみやは、魚はある」と思ひて、下りて、その川より、渡りて、北ざまに指して行きて、山に入りて見れば、大なる童、土を掘りて、物を取り出でて、火を焚きて、焼き集めて、また、大なる木の下に行きて、椎・栗などを取りて、この子を、「何しに、この山はあるぞ」問へば、「魚釣りに来つるぞ、『おもとに食はせ奉らむ』とて」と言へば、「山には、魚はなし。また、生きたる物殺すは、罪ぞ。これを拾ひて食へ」と教へて、この掘り拾ひ集めたる物どもを取らせて、童は失せぬ。この子、「うれし」と思ひて、持て行きて、母に食はす。この後は、山に入りて、見せ知らせし芋・野老よらを掘りて、木の実・葛の根を掘りて養ふ。雪高う降る日、芋・野老のあり所も、木の実のあり所も見えぬ時に、この子、「わが身不孝ならば、この雪高く降りまされ」と言ふ時に、いみじう高く降る雪、たちまちに降りやみて、日いとうららかに照りて、ありし童出でて来て、例の芋・野老焼き調じて取らせて、失せぬ。……山深く入りて見れば、いみじう厳しき杉の木、四つ、物を合はせたるやうにて立てるが、大きな屋のほどに空き合ひてあるを見て、この子の思ふやう、「ここにわが親を据ゑ奉りて、拾ひ出でむ木の実をも、まづ参らせばや」と思ひて、寄りて見るに、厳しき牝熊・牡熊、子生み連れて住むうつほなりけり。……牝熊・牡熊、荒き心を失ひて、涙を落として、親子の愛しさを知りて、二人の熊、子どもを引き連れて、この木のうつほをこの子に譲りて、異峰に移りぬ。

（「俊蔭」の巻 三八〜三九ページ）

北山に登場していた「大きな童」、雪が降りやむ話、熊が「うつほ」を譲る話は、「北山」の仙境性も表わしていると見られる。これらの話は、中国の『孝子伝』との影響があることはすでに定着している（注3）。室城秀之氏は、「北山」は「仙境」である根拠を取り上げている。それは、「俊蔭」の巻に、兼雅と俊蔭の娘が再び北山で出会う場面の兼雅の称呼である。室城氏は、兼雅の称呼が、北山に入って行く前では「大将」、北山で俊蔭の娘と再会する場面では「客人」、さらに、北山から出てからは再び「大将」と変化することを根拠に、「兼雅が入って行った空間は、兼雅の大将としての世俗的な官職を無化する空間であった。」と指摘している（注4）。『うつほ物語』の「北山」は、人間の世界から切り離された「仙境」だと考えられる。当時の人にとって、「山」という空間は人間の世界とは異なる世界であったことは、確かなことである。

『源氏物語』の「若紫」の巻に戻る。北山で、光源氏の目に入った聖の住まいは、「峰高く、深き岩の中」にある。「新編日本古典文学全集」の頭注は、聖の住まいを「岩に囲まれた奥深い所」と説明している（「若紫」の巻 二〇〇ページ）。ここで思い出されるのは、『遊仙窟』の「神仙の窟」である。張文成が二人の美人と巡り合った場所は「積石山」である。

古老の話によって、この山の奥に、「神仙の窟」がある。醍醐寺本『遊仙窟』の訓は、「此レハ神仙ノイワヤナリ」（二ウ）である。

「若紫」の巻の場合は、その夜、北山の僧都は光源氏を自分の「柴の庵」に招いた。「柴の庵」は柴など作られた粗末な小屋である。また、北山の僧都は、光源氏に「草の御むしろ」（若紫）の巻 二一〇ページ）も用意できると語った。僧都の謙辞でもあるが、これと似ている表現が『遊仙窟』にも見られる。それは、『遊仙窟』の女性主人公である十娘の住まいである。

余乃問曰、承聞此処有神仙窟宅。故來祇候。山川阻隔、疲頓異常。欲下投娘子、片時停歇上、賜惠交情、幸垂聽許。女子答曰、兒家堂舍賤陋、供給單疎、只恐不堪、終無悵惜。余答曰、下官是客、觸事卑微、但避風塵、則為幸甚。遂止余於門側草亭中、良久乃出。

（余乃ち問うて曰く、承聞するに此の処に神仙の窟宅有り、と。故に來つて祇候す。山川阻隔し、疲頓異常なり。娘子に投じて、片時停歇せんと欲す、交情を賜恵し、幸に聽許を垂れよ、と。女子答へて曰く、兒が家は堂舍賤陋、供給單疎にして、只恐らくは堪へざらん、終に悵惜すること無し、と。余答へて曰く、下官は是れ客ならば、事に触れて卑微なり、但風塵を避くれば、則ち幸甚と為す、と。遂に余を門側の草亭の中に止め、良久しくして乃ち出づ。）

張文成は、川浴いで衣を洗う女に「神仙窟宅」を訪問する意図をうち明けて、一夜の宿を乞うた。その時、女は張文成を「草亭」に待たせた。「草亭」や「窟」は、道教の「無為」の神仙思想の具体的な表現でもあり、隠棲者の印でもある。『遊仙窟』に、十娘は戦乱を逃れるために、隠棲者となったことも語られている。

十娘答曰、兒是清河崔公之末孫、適弘農楊府君之長子、就成大礼、随父住于河西。蜀生狡猾、屢侵邊境。兄及夫主、棄筆從戎、身死寇場、營魂莫返。兒年十七、死守一夫、嫂年十九、誓不冉醮。兄即清河崔公之第五息、嫂即太原王公之第三女。別宅於此、積有三年。室宇荒涼、家途翦弊。

（十娘答へて曰く、兒は是れ清河の崔公の末孫にして、弘農の楊府君の長子に適き、就て大礼を成し、父に随て河西に住めり。蜀生狡猾にして、屢々邊境を侵す。兄及び夫主は、筆を棄てて戎に従ひ、身寇場に死して、營魂返ること莫し。兒年十七、死すとも一夫を守らんとし、嫂は年十九、再び醮らざるを誓ふ。兄は、即ち清河の崔公の第五息、嫂は即ち太原の王公の第三女。別に此に宅して、積りて歳年有り。室宇荒涼、家途翦弊せり。）

十娘は清河公の子孫であるが、兄と夫が戦争中で亡くなって、五嫂と共に、積石山で宅

をして住むことになった。「神仙之窟」や「草亭」は十娘と五嫂の隠棲者の身分を暗示していると思われる。「若紫」の巻の場合は、北山の聖と北山の僧都を「深き岩の中」と「柴の庵」に住まわせて、両者ともに仙境に住んでいる人間を表すと考えられる。

『遊仙窟』の積石山の「神仙之窟」「草亭」、「若紫」の巻の北山の「峰高く、深き岩の中」「柴の庵」は全て仙境の中の建物である。「若紫」の巻の北山は、『遊仙窟』の仙境を参考にして、「北山」に「峰高く、深き岩の中」の邸と「柴の庵」を設置したと考えられる。

二 宇治の山荘と『遊仙窟』

「若紫」の巻の北山の聖の「峰高く、深き岩の中」にある住まいと似ているのは、「宇治十帖」に見られる「山の岩屋」である。

御みづからも、さまざまの御とぶらひの、山の岩屋にあまりしことなどのたまへるに、参でんと思して、……
(「橋姫」の巻 一五三ページ)

薫は、宇治の阿闍梨に感謝するため、様々な布施を用意して、阿闍梨がいる寺へ送った。ここでは、阿闍梨の寺を「山の岩屋」と称している。この「山の岩屋」は『遊仙窟』の「神仙の窟」とも関連があるだろうか。また、宇治の山荘も仙境として読めるだろうか。

宇治はどういう空間だろうか。これに関しては数多く論じられているが、高橋亨氏は、宇治を王権喪失と異郷的な空間であることを指摘している(注5)。それは、過去を負う八の宮を菟道稚郎子(うみちのちいらこ)に準える読み方である。本節では、八の宮という人物の角度からではなく、薫という人物の角度から、宇治の山荘という空間を読み解いてみよう。

薫は、「宇治十帖」ではよく「客人」と称されている(注6)。八の宮が、薫に姫君たちの後見を託す場面に、

「色をも香をも思ひ棄ててし後、昔聞きしこともみな忘れてなん」とのたまへど、人召して琴とりよせて、「いとつきなくなりになりたりや。しるべする物の音につけてなん、思ひ出でらるべかりける」とて、琵琶召して、客人にそそのかしたまふ。取りて調べたまふ。
(「橋姫」の巻 一五七ページ)

とある。八の宮は、「客人」である薫に合奏を勧めた。宇治の山荘の主人である八の宮に対して、薫が「客人」であることは当然だった。

八の宮が亡くなった後、薫の手引きで、匂宮は中の君と結婚した。

宮を、所につけてはいとことにかしづき入れたてまつりて、この君は、主方に心やすくもてなしたまふものから、まだ客人居のかりそめなる方に出だし放ちたまへれば、

いとからしと思ひたまへり。恨みたまふもさすがにいとほしくて、物越しに対面したまふ。
〔総角〕の巻 二八七ページ)

八の宮家の婿である匂宮と違い、八の宮に姫君たちの後見を托されている薫は、まるで「主方」のような存在であるが、「客人居」に泊まらせることになる。この待遇を、薫は恨んでいる。しかし、大君が亡くなった後、薫は自分が宇治の山荘の「客人」であることを認められた。

みづからは、渡りたまはむこと明日とての、まだつとめておはしたり。例の、客人居の方におはするにつけても、今は、やうやうもの馴れて、我こそ人よりさきに、かうやうにも思ひそめしか、など、ありさま、のたまひし心ばへを思ひ出でつつ、さすがに、かけ離れ、ことのほかになどはしたなめたまはざりしを、わが心もてあやうしも隔たりにしか、と胸いたく思ひつづけられたまふ。かえばみせし障子の穴も思ひ出でらるれば、寄りて見たまへど、この中をばおろし籠めたれば、いとかひなし。

〔早蕨〕の巻 三五三〜三五四ページ)

父の八の宮と姉の大君を相継いで失った中の君は、頼りなく一人で宇治の山荘で暮らしている。そのため、匂宮は、中の君を京に迎えることを決意した。上京の前日、薫はもう一度宇治の山荘を訪れた。その日、「客人居の方」(傍線部)に泊まった薫が、昔とは違い、「やうやうもの馴れて」(傍線部)とあるように、「客人居」にも馴れている様子が見られる。それは、薫も自分が宇治の山荘の「客人」ということを認めているのだろう。

後に「東屋」の巻で、薫は、が宇治の山荘を改築して、宇治の姫君たちの異腹の妹である浮舟を迎えた。しかし、改築した八の宮の邸に、薫が「客人居」に泊まる描写や「客人」の称呼は一切見られない。大君の死去と中の君の上京によって、薫の「客人」の身分が自然に解消したと考えられる。前に(31ページ)室城氏が、『うつほ物語』の「俊蔭」の巻で、兼雅の呼称によって、俊蔭の娘の親子が住んでいる北山の仙境性を表しているという指摘した(注7)。この指摘を踏まえて、『源氏物語』の場合は、薫の「客人」の呼称によって、「東屋」の巻の以前の宇治の山荘の話が仙境の話ととられることが可能だと思われる。

同じく仙境訪問譚の『遊仙窟』の場合はどうだろう。序論に述べたように、『遊仙窟』は作者の張文成の経験譚としても読める。作品の中、男性主人公はよく「客」と自称している。衣を洗う女子に一夜の宿を乞いた時に、男性主人公は「下官是客」と言っている。十娘が侍女たちに、男性主人公を屋敷内に案内させることを命じた時、男性主人公は「遠客卑微」と自らへりくだっている。薫とは違い、『遊仙窟』の男性主人公は自分が「客」であることを最初から認識している。しかし、いずれも、仙境の女性に対して、男性主人公を「客」と設定していることが伺える。

ところで、「橋姫」の巻にもう一か所が『遊仙窟』の影響が見られる。それは、宇治の山

荘の建物の自体である。薫は、宇治の阿闍梨の手引きで、八の宮の山荘に通い始めた。その時、薫の目に入った八の宮が住んでいる建物は、

げに、聞きしよりもあはれに、住まひたまへるさまよりはじめて、いと仮なる草の庵に、思ひなしことそぎたり。同じき山里といへど、さる方にて心とまりぬべくのとやかなるもあるを、いと荒ましき水の音、波の響きに、もの忘れうちし、夜など心とけて夢をだに見るべきほどもなげに、すこく吹きはらひたり。

（「橋姫」の巻 一三二―ページ）

とある。八の宮は、「若紫」の巻の北山の僧都と同様に、「庵」に住んでいる。ところが、北山の僧都の「いと心ことによしあり」（「若紫」の巻 二二―ページ）と語られている「柴の庵」と違い、八の宮のは、「思ひなしことそぎたり」と語られている。薫は、八の宮の邸を見て、姫君たちことを、「世の常の女しくなよびたる方は遠くや」（「橋姫」の巻 一三三―ページ）と思っている。八の宮の一族の「隠棲」の印象が、つよく感じられる。薫と八の宮の最後の会話で、八の宮が死後のことを全部薫に依頼した。

「おのづから、かばかりならしそめつる残りは、世籠れるどちに譲りきこえてん」とて、宮は仏の御前に入りたまひぬ。

「われ亡くて草の庵は荒れぬともこのひとはかれじとぞ思ふ

かかる対面もこのたびや限りならむとも心細きに、忍びかねて、かたくなしきひが言多くもなりぬるかな」とて、うち泣きたまふ。客人、

「いかならむ世にかかれせむ長きよのちぎり結べる草の庵は

相撲など、公事も紛れはべるころ過ぎてさぶらはむ」など聞こえたまふ。

（「椎本」の巻 一八二―ページ）

八の宮は以前から出家の意志があつたが、若い娘たちのために、在家の聖になる。しかし、年を経て、八の宮が自分の寿命を感じて、「法の友」である薫に、「草の庵」を託した。歌の中に出てくる「草の庵」は、ただ八の宮の邸ではなく、姫君たちのことも含めている。

「草の庵」は、八の宮の一族の重要な象徴である。

「橋姫」の巻の冒頭では、八の宮の政治に翻弄された半生を描いている。桐壺帝の第八の皇子として生まれた宮は、朱雀帝の御代に立坊する可能性もあつた。しかし、光源氏が政界に復帰してから、八の宮は世間に見捨てられたのであつた。八の宮も、「今は限りとよろづを思し棄てたり」（「橋姫」の巻 一二五―ページ）とあるように、立坊される希望を捨てた。また、宮邸が焼亡したために、八の宮の一族が宇治の山荘に移住して、ますます京と疎遠となっていく。その結果、大君が二十五歳、中の君が二十三歳（注8）になったが、求婚者が一人もいなかった。

ここで、『遊仙窟』の女性主人公である十娘と五嫂の話をもう一度挙げよう。

十娘答曰、兒是清河崔公之末孫、適弘農楊府君之長子、就成_ニ大札_一、随_レ父住_ニ于河西_一。蜀生狡猾、屢侵_ニ辺境_一。兄及夫主、棄_レ筆從_レ戎、身死_ニ寇場_一、瑩魂莫_レ返。兒年十七、死守_ニ一夫_一、嫂年十九、誓_レ不_ニ再醮_一。兄即清河崔公之第五息、嫂即太原王公之第三女。別宅_ニ於此_一、積有_ニ歳年_一。室宇荒涼、家途翦弊。

(十娘答へて曰く、兒は是れ清河の崔公の末孫にして、弘農の楊府君の長子に適き、就て大札を成し、父に随て河西に住めり。蜀生狡猾にして、屢々辺境を侵す。兄及び夫主は、筆を棄てて戎に従ひ、身寇場に死して、瑩魂返ること莫し。兒年十七、死すとも一夫を守らんとし、嫂は年十九、再び醮らざるを誓ふ。兄は、即ち清河の崔公の第五息、嫂は即ち太原の王公の第三女。別に此に宅して、積りて歳年有り。室宇荒涼、家途翦弊せり。)

前に述べたように、十娘と五嫂は、中国の魏晋南北朝から隋唐にかけている貴族の子孫である。ところが、二人とも戦乱で夫を失った。後見を失ったこの義理の姉妹は、やむなく積石山で隠棲の生活をしている。この義理の姉妹は、父親が失脚したために山荘に籠める大君と中の君と共通点が見られる。

おわりに

「若紫」の巻の北山や「橋姫」の巻を初めとするの「宇治十帖」に見られる宇治の山荘は、都と対立している空間である。また、いずれも「仙境」として捉えられる。それだけではなく、『源氏物語』には、正編の女性主人公である紫の上が「若紫」の巻から登場している。「宇治十帖」の女性主人公である宇治の姫君たちが「橋姫」の巻から登場している。この二つの場面に、『遊仙窟』の影響が見られる。その上、この北山の仙境と宇治の山荘の仙境には、『遊仙窟』の要素も見られるのである。

- (1) 田中隆昭「北山と南岳―源氏物語若紫巻の仙境的世界―」(『国語と国文学』平成八年十月、『源氏物語 引用の研究』所収、勉誠出版 平成十年二月)
- (2) 『遊仙窟』は、張文成が黄河の源へ出かける途中で、積石山に桃花源のような所での話である。新間一美氏は、『遊仙窟』の話が「山」と「水」という二つの仙境があることを指摘している。また、氏は、「若紫」の巻に見られる北山と清良の話に出てくる明石も「山」と「水」の仙境と唱えて、この二つの仙境は『遊仙窟』の影響を受けたと論じている。(『遊仙窟』「源氏物語夕顔巻と遊仙窟―邂逅相遇」の物語―)『源氏物語と東アジア』新典社研究叢書 213 平成二十二年九月)
- (3) 阿部恵子「仲忠孝養譚について―その出典及び俊蔭巻での構想上の位置―」(『実践国文学』第三号 昭和四十八年三月)。三木雅博『うっほ物語』忠こそその〈継子いじめ譚〉の位相―『孝子伝』の伯奇譚・クナラ太子譚との比較考察から(『国語国文』七三号 平成十六年一月)。狩野一三『うっほ物語』仲忠孝養譚の位置(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』 平成十六年二月) など。
- (4) 室城秀之『うっほ物語の表現と論理』(若草書房 平成八年十二月)
- (5) 高橋亨「宇治物語時空論」(『国語と国文学』 51号 昭和四十九年十二月、『源氏物語の対位法』所収、東京大学出版会 昭和五十七年五月)
- (6) 『源氏物語』の「宇治十帖」に、「客人」の用例は17例がある。そのうちの11例は、薫に用いられている。
- (7) 前注(4)の論文。
- (8) 姉君二十五、中の君二十三にぞなりたまひける。(『椎本』の巻 一七六―一七七ページ)

第三章 『源氏物語』における『遊仙窟』の受容―「若紫」の巻に着目して―

はじめに

「若紫」の巻は『源氏物語』の一つの発端として、『伊勢物語』との影響関係が古注釈などから注目されている。ところで、「若紫」の巻と唐代伝奇、特に『遊仙窟』との受容関係は、序論で述べた通り、丸山キヨ子氏を初めとして数多く論じられている（注1）。特に、丸山氏の、「源氏物語の場面に遊仙窟がヒントを与えているのではないかと思われる」ところは二つある。若紫の巻、北山における源氏君の垣間見、橋姫の巻、宇治の山荘における薫の垣間見の場面である」という指摘（注2）が示唆的だと思われる。しかし、「若紫」の巻において、『遊仙窟』の引用はただ筋・展開を真似たただけだろうか。本章では、「若紫」の巻と『遊仙窟』の受容関係をさらに明らかにする。

一 「若紫」の巻と『遊仙窟』の交渉

前掲の丸山氏の論文の中で、「若紫」の巻の北山の垣間見の部分の概要と遊仙窟の概要を、次のように纏めている。「若紫」の巻の垣間見の北山の部分については、

わらはやみの加持に北山の聖を訪れた光源氏が気晴らしの眺望を楽しむうち、ふと見下した僧都の小柴垣の内に思いがけぬなまめかしい女性の姿を見た。近寄つて見れば由緒ありげな「あて」なる尼と少女であり、若草の如き少女の美しさは日夜慕う藤壺にそっくりである。僧都の招きで訪れたのを幸いに根ほり葉ほり素性を聞けば藤壺の姪に当る娘とか、尼君は少女には祖母にあたる人であつた。心はずかしい僧都との応対から解放されて一途に祖母なる尼を尋ねて歌の贈答をする、（後略）

と纏めている。

また、『遊仙窟』については、

河源に遣された官吏・僕と称する一人称の主人公が行き暮れて到達した所はまさに人跡絶えた仙境であり、古老の指さす神仙窟を尋ねて川を溯れば物洗う婢女を見かけ、一夜の宿を乞うてかいまみれば思ひがけない二人の美しい女性が住んでいる屋敷であつた。数々の歌の贈答を重ねる内、遂に招じ入れられて一夜の歡をつくし、明けて辞し去れば歓楽は彼方となる。

と纏めている。

両者の関係については、丸山氏は、「このあたりまでの部分と遊仙窟冒頭のやりとりが似

ている」と指摘している(注3)。田中隆昭氏は、丸山氏の説を受けて、光源氏の発言も『遊仙窟』の影響が見られることを唱えている(注4)。なにがし僧都(後の北山の僧都)の邸に女性がいるのを見た光源氏は、

「何人の住むにか」と問ひたまへば、御供なる人、「これなん、なにがし僧都のこの二年籠りはべる方にはべるなる」、「心恥づかしき人住むなる所にこそあなれ。あやしうも、あまりやつしけるかな。聞きもこそすれ」などのたまふ。きよげなる童などあまた出でて来て、闕伽奉り、花折りなどするもあらはに見ゆ。「かしこに女こそありけれ」、「僧都は、よも、さやうには据ゑたまはじを」、「いかなる人ならむ」と口々言ふ。下りてのぞくもあり。「をかしげなる女子ども、若き人、童べなん見ゆる」と言ふ。

〔「若紫」の巻 二〇一ページ〕

とあるように、供人に、「何人の住むにか」(傍線部)と問い、供人は、「これなん、なにがし僧都の、この二年籠りはべる方にはべるなる」(傍線部)と答えている。

『遊仙窟』では、張文成の下女への「此誰家舎也」という問いと、下女の「此是崔女郎之舎耳」という答えが見られる。田中氏は、この両者のやりとりが対照的に描かれていると指摘している(注5)。唐突ながら、醍醐寺本『遊仙窟』の訓読を参照すると、「此は誰か家舎ノイェトカスル也」(2ウ)、「此ハ是崔女郎トイフヒトノ舎ノミ」(2ウ)とある。光源氏と供人の会話は、やはり『遊仙窟』の影響を受けたことを認めるべきだろう。

光源氏が垣間見た紫の上の容貌は、「限りなう心を尽くしきこゆる人にとよう似たてまつれる」(「若紫」の巻 二〇七ページ)と語られている。光源氏は、思慕している藤壺の宮と似ていると感じて、北山の僧都に紫の上の素性を尋ねる。

「ここにものしたまふは誰にか。尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」と聞こえねたまへば、うち笑ひて、「うちつけなる御夢語りにぞはべるなる。尋ねさせたまひても、御心劣りせさせたまひぬべし。故按察大納言は、世に亡くて久しくなりはべりぬれば、えしろしめさじかし。その北の方なむ、なにがしが姉妹にはべる。かの按察隠れて後、世を背きてはべるが、このごろわづらふ事はべるにより、かく京にもまかでねば、頼もし所に籠りてものしはべるなり」と聞こえたまふ。

「かの大納言の御むすめものしたまふと聞きたまへしは。すきずきしき方にはあらで、まめやかに聞こゆるなり」と推しあてにのたまへば、「むすめただ一人はべりし。亡せてこの十余年にやなりはべりぬらん。故大納言、内裏に奉らむなどかしこういつきはべりしを、その本意のごとくもものしはべらで過ぎはべりにしかば、ただこの尼君ひとりもあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿官なむ忍びて語らひつきたまへりけるを、もとの北の方やむことなくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりはべりにし。もの思ひに病づくものと目に

近く見たまへし」など申したまふ。

さらば、その子なりけり、と思しあはせつ。親王の御筋にて、かの人にも通ひきこえたるにやと、いとどあはれに見まほし。人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて心のままに教へ生ほし立てて見ばやと思す。

〔若紫〕の巻 二二二〜二二三ページ

北山の僧都が、紫の上の母は故大納言の娘であり、父は兵部卿宮であると言った。また、藤壺の宮との血縁関係も明らかにした（傍線部に当たる）。ここで思い出されるのは、『遊仙窟』の衣を洗う下女の答えである。衣を洗う下女が、張文成に、十娘の素性を、「博陵王之苗裔、清河公之旧族。容貌似舅、潘安仁之外甥。氣調如兄、崔季珪之小妹」と語っている。前章で述べたように、「博陵王」は東漢末から唐代まで続いた貴族社会における名族の一つである。「清河公」も名族の一つである。「潘安仁」は、西晋の詩人潘岳のことで、「安仁」は字であり、美男であったことでも知られているし、「崔季珪」は、三国魏の崔琰のことである。「季珪」は字で、風采のある男子として威厳があった。いずれも、中国の昔からの名門の代表である。下女は十娘の高貴な血筋を明らかにしたのである。

「若紫」の巻は、この会話の描写を借りて、北山の僧都の答えによって、紫の上の高貴な出身であることを表して、紫の上と藤壺の繋がりを示した。「若紫」の巻が『遊仙窟』に受けた影響は、ただ垣間見だけではなく、女性主人公の素性の問答までに及んでいる。

二「若紫」の巻の北山の〈黄金〉と『遊仙窟』の〈金〉

翌日、左大臣の息子たちが、北山へ光源氏を迎えに行った。この場面を引用しよう。

頭中将、懐なりける笛とり出でて吹きすましたり。弁の君、扇はかなう打ち鳴らし、「豊浦の寺の西なるや」とうたふ。人よりはことなる君たちを、源氏の君いといたううちなやみて、岩に寄りゐたまへるは、たぐひなくゆゆしき御ありさまにぞ、何ごにも目移るまじかりける。例の、箏吹く隨身、笙の笛持たせたるすき者などあり。僧都、琴をみづから持てまゐりて、「これ、ただ御手ひとつあそばして、同じうは、山の鳥もおどろかしはべらむ」と切に聞こえたまへば、「乱り心地いとたへがたきものを」と聞こえたまへど、けにくからず掻き鳴らしてみな立ちたまひぬ。

〔若紫〕の巻 二二三〜二二四ページ

ここに見える笛、箏、笙の笛、琴は、『遊仙窟』に行われる奏樂の場面にも見られる。それだけではなく、樂器の順番も一致している（注6）。

十娘喚香兒、為少府設樂。金石並奏、簫管間響。蘇合彈琵琶、緑竹吹箏。

〔篋〕。仙人鼓^レ瑟、玉女吹^レ笙。玄鶴俯^レ而聽^レ琴。白魚躍^レ而應^レ節。
（十娘香兒を喚び、少府の為に楽を設く。金石並び奏し、簫管間に響く。蘇合は琵琶を弾き、緑竹は箏を吹く。仙人は瑟を鼓し、玉女は笙を吹く。玄鶴俯して琴を聴き、白魚は躍って節に応ず。）

張文成を慰めるために、「神仙の窟」で侍女たちによる奏樂が催された。『遊仙窟』では、笛の代わりに、簫管が出てくる。この「簫管」は、『日本国語大辞典』が、「管、笛の一種」と説明している（注7）。また、「玄鶴俯而聽^レ琴、白魚躍而應^レ節」（波線部）という表現は、玄鶴が俯して琴の妙音を聞いて、白魚が躍り出して拍子を合わせるという意味である。侍女たちの見事な演奏によって、動物までもが感動したのである。この描写は、「若紫」の巻に見られる北山の僧都の「山の鳥もおどろかしはべらむ」（波線部）という発言を連想させる。

光源氏が、帰る際には、北山の聖や僧都から贈物を贈られた。

聖、御まもりに独結奉る。見たまひて、僧都、聖徳太子の百濟より得たまへりける金剛子の数珠の玉の装束したる、やがてその国より入れたる箱の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに、御薬ども入れて、藤桜などにつけて、所につけたる御贈物ども捧げたまつりたまふ。

（「若紫」の巻 二二二―二二二ページ）

金剛子の数珠は、聖徳太子の遺愛物である（注8）。北山の光源氏像に聖徳太子像が投影していることは既に指摘されている（注9）。『日本霊異記』に、大部屋栖古が、急死した後に、黄金の山で聖徳太子と出会って、蘇生した話が見られる（注10）。『三宝絵詞』に、聖徳太子の母が、夢で金色の僧を見て、懐妊した話も見られる（注11）。聖徳太子の説話には、〈黄金〉がよく出てくる。ただ、聖徳太子の造型を用いたのみならず、北山の僧都が歌で光源氏を金輪王に喩えることが既に指摘されている（注12）。

「山水に心とまりはべりぬれど、内裏よりおぼつかながらせたまへるもかしこければなむ。いまこの花のりを過ぐさず参り来む。」

宮人に行きて語らむ山桜風よりさきに來ても見るべく
とのたまふ御もてなし、声づかひさへ目もあやなるに、

優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目こそうつらね

と聞こえたまへば、ほほ笑みて、「時ありて一たび開くなるは、かたかなるものを」とのたまふ。聖、御土器賜はりて、

奥山の松のとぼそをまれにあげてまだ見ぬ花の顔を見るかな

とうち泣きて見たてまつる。

（「若紫」の巻 二二〇～二二二ページ）

「優曇華」は、三千年に一度だけ花が咲く植物であるし、如来や轉輪王が出現すると開花する植物でもある(注13)。新編日本古典文学全集の頭注では、「優曇華」を、「三千年に一度開花し、その時は、仏陀または轉輪聖王(正しい法をもって全世界を統治するという理想的な王者)が世に出現するという、靈瑞」と説明している(注14)。轉輪王のうち、金の輪宝を感得し、全世界を支配する聖王は、金輪王という(注15)。「優曇華」という仏教用語を用いて、金輪王の造型を光源氏に投影して、光源氏の聖王のイメージを滲ませている。保立道久氏は、金輪王が、黄金国家の王の觀念であることを指摘している(注16)。河添房江氏は、『源氏物語』において、財力の象徴である唐物や〈黄金〉が、光源氏の話とよく結びついたことを指摘している(注17)。北山の光源氏が、〈黄金〉と重なることを無視することは出来ないだろう。物語は、光源氏の将来の「権力者」である身分を〈黄金〉というものを借りて暗示している。

これらの先行研究を踏まえながら、『遊仙窟』に一步踏みこんでみよう。

①于^レ時金台銀闕、蔽^レ日干^レ雲。或似^二銅雀之新開^一、乍如^二靈光之且敞^一。
(時に金台銀闕、日を蔽ひ雲を干す。或は銅雀の新に開けたるに似、乍ち靈光の且く敞かなるが如し。)

②即相隨上^レ堂。珠玉驚^レ心、金銀曜^レ眼。五彩竜鬚席、錦繡緑辺氈、八尺象牙床、緋綾帖薦褥。車渠等宝、俱映^二優曇之花^一、馬瑙真珠、並貫^二頗梨之線^一。文栢榻子、俱写^二豹頭^一、蘭草燈心、並燒^二魚腦^一。

(即ち相隨つて堂に上る。珠玉心を驚かし、金銀眼に曜く。五彩竜鬚の席、錦繡緑辺の氈、八尺の象牙の床、緋綾の帖薦の褥。車渠等の宝は、俱に優曇の花に映じ、馬瑙真珠は、並びに頗梨の線に貫けり。文栢の榻子は、俱に豹頭を写し、蘭草の燈心は、並びに魚腦を焼く。)

③一時俱坐、即喚^二香兒^一取^レ酒。俄尔中間、擊^二大鉢可^一受^二三升^一已来。金鈕銅鐙。金盞銀盃。

(一時にして俱に坐するや、即ち香兒を喚びて酒を取らしむ。俄尔の中間に、一大鉢の三升を受くる可りなるを撃つて已に來れり。金鈕銅鐙。金盞銀盃。)

①、②、③は、「神仙の窟」の内部の描写である。「神仙の窟」の調度は、豪華であり、それは、仙境の非日常性を表している(注18)。傍線部が示すように、〈金〉という言葉が頻繁に出てくる。『遊仙窟』は、大量の〈金〉を使って、「神仙の窟」の仙境性を強調していると思われる。そのうち、②に見られる「金」「銀」「車渠」「馬瑙」「真珠」は仏教の七宝の中の五つである。また、「優曇之花」は、「若紫」の巻の「優曇華」と符号している。

とはいえ、『遊仙窟』の「神仙の窟」に見られる〈金〉など調度は、財力の象徴であるのみならず、仏教的な意味も持っている。

また、『遊仙窟』に、〈金釵〉という道具が、繰り返して出てくる。そのうちの一例を引用しよう。

④五嫂遂抽^二金釵^一送^二張郎^一、因報^レ詩曰、児今贈^二君別^一、情知後会難、莫^レ言釵意小、可^三以掛^二渠冠^一。

(五嫂遂に金釵を抽きて張郎に送り、因つて詩を報して曰く、児今君の別に贈る、情に知りぬ後会の難からんことを。言ふこと莫かれ釵の意小なりと、以て渠が冠に掛く可し、と。)

〈金釵〉は、「神仙の窟」の女性たちのアクセサリとしてよく描かれている。金属が稀な物である古代において、〈金釵〉も財力の象徴である。それだけではなく、『長恨歌』(注19)などに見られるように、〈金釵〉は恋の象徴である。〈金釵〉が楊貴妃の身代わりとして、皇帝に送われたことは、『長恨歌』に描かれている(空持「旧物」表「深情」、鈿合「金釵」寄将去。釵留「一股」合一扇、釵擘「黄金」合分「鈿」)。④は、張文成と「神仙の窟」の女性たちと別れる際に、五嫂が、張文成に〈金釵〉を贈った場面である。五嫂と、張文成とは「一夜」の関係ではないが、〈金釵〉によって、「恋」の関係を暗示している。

財力の象徴としての〈黄金〉は、「若紫」の巻や『遊仙窟』に見られる。しかし、〈黄金〉が「若紫」の巻において表す「権力者」という象徴は、『遊仙窟』においては、見当たらない。また、『遊仙窟』において表す「恋」という象徴は、「若紫」の巻には伺えない。これは、『源氏物語』と、『遊仙窟』との違いの一つと言えらると思われる。

三 「若紫」の巻の登場人物と『遊仙窟』の人物との関係

『遊仙窟』は、仙境訪問譚である。「若紫」の巻の北山の段も、仙境訪問譚とは言える。田中隆昭氏は、「若紫」の巻が、『桃花源記』の影響を踏まえつつ、『桃花源記』を利用した『遊仙窟』の影響も受けていることを指摘している(注20)。それは、前章で述べた、『遊仙窟』の仙境である「神仙の窟」が、「若紫」の巻に、北山の聖の「深き岩の中」に変容したことからも伺える。前章に挙げたように、新間一美氏は田中氏の説を受けて、『遊仙窟』の仙境を山の仙境と水の仙境を分け、『源氏物語』の場合も二つに分けられると指摘している(注21)。

北山は、『源氏物語』の仙境の一つである。また、北山という仙境は、『遊仙窟』の仙境を利用してゐる。これについては、前章で既に論じた。

『遊仙窟』の話は、官吏の張文成が「神仙の窟」で、館を見つけて、この館で、十娘と五嫂という二人の義理の姉妹と出会った物語である。短編であるが、張文成はこの十娘と

歌を詠み交わし、歓楽の一夜を過ごして、二人はそのまま別れてしまうなどの場面が描かれている。「若紫」の巻では、

ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾すこし上げて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みぬたる尼君、ただ人と見えす。四十余ばかりにて、いと白うあてに瘦せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなういまめかしきものかな、とあはれに見たまふ。……中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

〔若紫〕の巻 二〇五〜二〇六ページ

とあるように、光源氏は、読経していた尼君と「白き衣」「山吹」の汗衫を着て、走ってきた紫の上を垣間見た。丸山氏は、この「若紫」の巻の垣間見は、『伊勢物語』の初段で、男が「女はらから」を垣間見ることから変容していることを指摘している。また、「若紫」の巻は、『伊勢物語』の初段を踏まえつつ、『遊仙窟』も利用していることを論じている(注22)。つまり、都から離れた地で、男が複数の美しい女性を垣間見て、男が、その美しい女性に慕情を訴えて、女性が、男と応酬することは、『遊仙窟』と一致しているのである。

原岡文字氏は、丸山氏の説を受けているが、紫の上が光源氏の結婚対象となるのに対して、尼君がその仲立ちをするものであることは、『遊仙窟』の十娘が張文成の相手となるのに対して、五嫂が二人の仲立ちをすることから影響を受けたことを指摘している(注23)。つまり、「若紫」の巻の尼君と紫の上という二人の女性の構図は、『伊勢物語』の初段の「女はらから」からではなく、『遊仙窟』の十娘と五嫂という構図から変容しているのである。

「若紫」の巻の尼君の遺言に、

「乱り心地は、いづともなくのみはべるが、限りのさまになりはべりて、いとかたじけなく立ち寄せたまへるに、みづから聞こえさせぬこと。のたまはすることの筋、たまさかにも思しめし変らぬやうはべらば、かくわりなき齡過ぎはべりて、かならず数まへさせたまへ。いみじう心細げに見たまへおくなん、願ひはべる道の絆に思ひたまへられぬべき」など聞こえたまへり。〔若紫〕の巻 一三六〜一三七ページ

とある。尼君が、「かくわりなき齡過ぎはべりて、かならず数まへさせたまへ」(傍線部)と言つて、紫の上の後見を光源氏に託したのである。

一方、『遊仙窟』には、

五嫂因起謝曰、……、女因^レ媒^レ而嫁、不^レ因媒而親。新婦向來專^レ心為^二勾当^一、已後之事不^二敢預知^一。娘子安穩、新婦向^レ房臥去也。

(五嫂因つて起つて謝して曰く、……、女は媒に因つて嫁するも、媒に因らずして親し。新婦向來心を専らにして勾当を為せども、已後の事は敢て預り知らず。娘子安穩せよ、新婦は房に向つて臥し去らん、と。)

とある。五嫂は、十娘と張文成の仲人の役として描かれている。纏めてみると、「若紫」の巻の人物と『遊仙窟』の人物とは、次のような関係を持つていることになる。

光源氏―張文成　尼君―五嫂　紫の上―十娘

しかし、『遊仙窟』に登場している五嫂は若い美しい女性である。

下官為^レ性貪多、欲^二両花俱採^一答曰、暫遊^二双樹下^一、遙見^二両枝芳^一。向^レ日俱翻^レ影、迎^レ風並散^レ香。戲蝶扶^二丹萼^一、遊蜂入^二紫房^一。人今惣摘取、各著^二一辺箱^一。五嫂曰、張郎太貪生、一箭射^二両塚^一。十娘則謂曰、遮^レ三不^レ得^レ一、覓^レ兩都尽失。

(下官性と為り貪る多く、両花俱に採らんを欲し、答へて曰く、暫^二双樹の下に遊び、遙かに両枝の芳しきを見る。日をもつて俱に影を翻し、風を迎へて並びに香を散ず。戲蝶丹萼に扶まり、遊蜂紫房に入る。人今惣て摘み取りて、各々一辺箱に著かん、と。五嫂曰く、張郎は太だ貪なり、一箭に両塚を射んとす、と。十娘則ち謂つて曰く、三を遮らば一をも得ず、両を覓めば都尽て失はん、と。)

張文成が、「神仙の窟」が行われている酒宴で、十娘と五嫂を共に手に入れようとして(欲^二両花俱採^一)、「人今惣摘取、各著^二一辺箱^一」と言った。ところが、五嫂と十娘に諫められて、「両花」を並べて採ることが実現できなかった。それと比べると、「若紫」の巻に登場している紫の上が、ただ「十ばかり」の童女で、光源氏と歌を贈答した尼君が「四十余ばかり」の嫗なので、十娘と五嫂のような若い美しい女性とはかなり距離がある。この童女と嫗という構図は、むしろ『遊仙窟』から受容したものとは言えるだろう。

四「若紫」の巻の「歓乐的な一夜」

『遊仙窟』の「歡樂の一夜」という話が印象的である。丸山氏は、「若紫」の巻の北山の段においては、この「一夜」の話を再現していないと主張している(注24)。一方、田中氏は、光源氏の、北山の僧の邸でなかなか眠れない「一夜」が、『遊仙窟』の「一夜」に影響を受けたと指摘している(注25)。

ところで、『遊仙窟』は短編作品なので、話の展開が速い。『遊仙窟』の展開の速さと違

い、「若紫」の巻の「一夜」の話は、光源氏は再び紫の上の邸に訪れた際に、描かれていると思われる。それに関連した部分を挙げる。

忌など過ぎて、京の殿など聞きたまへば、ほど経て、みづからのどかなる夜おはしたり。いとすごげに荒れたる所の、人少ななるに、いかに幼き人おそろしからむと見ゆ。例の所に入れたてまつりて、少納言、御ありさまなど、うち泣きつつ聞こえつづくるに、あいなう御袖もただならず。 (「若紫」の巻 二四〇〜二四一ページ)

光源氏は、正妻である葵の上との関係は不和であるし、藤壺への恋も挫折した。悩みながら、光源氏は、紫の上の邸へ訪れる。祖母である尼君を失った紫の上は、少納言の乳母とともに、荒れた邸に住んでいる。紫の上の実父である兵部卿の宮は、正妻に憚って、紫の上を宮家に迎えることができない。そのため、紫の上の面倒を見る人は、ただ少納言の乳母一人である。この情況で、光源氏は、紫の上のもとに押し入った。

「少納言よ。直衣着たりつらむは、いづら。宮のおはするか」とて寄りおはしたる御声、いとらうたし。「宮にはあらねど、また思し放つべうもあらず。こち」とのたまふを、恥づかしかりし人とさすがに聞きなして、あしう言ひてけりと思して、乳母にさし寄りて、「a いざかし、ねぶたきに」とのたまへば、「b いまさらに、など忍びたまふらむ。この膝の上に大殿籠れよ。いますこし寄りたまへ」とのたまへば、乳母の、「さればこそ。かう世づかぬ御ほどにてなむ」とて押し寄せたてまつりたれば、何心もなくぬたまへるに、c 手をさし入れて探りたまへれば、なよやかなる御衣に、髪はつやつやかかりて、末のふさやかに探りつけられたるほど、いとうつくしう思ひやらる。d 手をとらへたまへれば、うたて、例ならぬ人のかく近づきたまへるは、恐ろしうて、「寝なむといふものを」とて強ひてひき入りたまふにつきてすべり入りて、「今は、まろぞ思ふべき人。な疎みたまひそ」とのたまふ。乳母、「いで、あなうたてや。ゆゆしうもはべるかな。聞こえさせ知らせたまふとも、さらに何のしるしもはべらじものを」とて、苦しげに思ひたれば、「さりとも、かかる御ほどをいかがはあらん。なほ、ただ世に知らぬ心ざしのほどを見はてたまへ」とのたまふ。

(「若紫」の巻 二四二〜二四四ページ)

紫の上が、乳母に、「いざかし、ねぶたきに」(傍線部 a)と声をかけているが、光源氏は、「いまさらに、など忍びたまふらむ。この膝の上に大殿籠れよ。いますこし寄りたまへ」(傍線部 b)と言っている。また、「手をさし入れて探りたまへれば、なよやかなる御衣に、髪はつやつやかかりて、末のふさやかに探りつけられたる」(傍線部 c)とあるように、光源氏が、紫の上の着物や、髪を探っている。これだけではなく、「手をとらへたまへれば」(傍線部 d)のとあるように、光源氏は、紫の上の手を捕まえた。

霰降り荒れて、すこき夜のさまなり。「いかで、かう人少なに心細うて、過ぐしたまふらむとうち泣いたまひて、いと見棄てがたきほどなれば、「御格子まありね。もの恐ろしき夜のさまなめるを、宿直人にてはべらむ。人々近うさぶらはれよかし」とて、^eいと馴れ顔に御帳の内に入りたまへば、あやしう思ひの外にもとあきれて、誰も誰もゐたり。……若君は、いと恐ろしう、いかならんとわななかれて、いとうつくしき御肌つきも、そぞろ寒げに思したるを、^fらうたくおぼえて、単衣ばかりを押ししくみて、わが御心地も、かつはうたておぼえたまへど、あはれにうち語らひたまひて、「いざたまへよ。をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」と、心につくべきことをのたまふけはひのいとなつかしきを、幼き心地にも、いといたうも怖ぢず、さすがにむつかしう寝も入らずおぼえて、身じろき臥したまへり。

〔若紫〕の卷 二四四〜二四五ページ〕

光源氏は、まだ幼い紫の上が、こんな霰が降つて風も荒い夜に、一人で過ぐすことができないうため、「いと馴れ顔に御帳の内に入りたまへば」(傍線部^e)とあるように、几帳の中に入って、紫の上を「らうたくおぼえて、単衣ばかりを押ししくみて」(傍線部^f)、紫の上の傍に、横になっている。

夜一夜風吹き荒るるに、「げにかうおはせざらましかば、いかに心細からまし。^g同じくはよろしきほどにおはしまさましかば」とささめきあへり。乳母は、うしろめたさに、いと近うさぶらふ。風すこし吹きやみたるに、夜深う出でたまふも事あり顔なりや。「いとあはれに見たてまつる御ありさまを、今はまして片時の間もおぼつかなくなるべし。明け暮れながめはべる所に渡したてまつらむ。かくてのみはいかが。もの怖ぢしたまはざりけり」とのたまへば、「宮も御迎へになど聞こえのたまふめれど、この御四十九日過ぐしてや、など思うたまふる」と聞こゆれば、「頼もしき筋ながらも、よそよそにてならひたまへるは、同じうこそ疎うおぼえたまはめ。^h今より見たてまつれど、浅からぬ心ざしはまさりぬべくなむ」とて、かい撫でつつかへりみがちにて出でたまひぬ。

〔若紫〕の卷 二四五〜二五六ページ〕

この光景を目に入れた侍女たちが、光源氏と紫の上のことを、「同じくはよろしきほどにおはしまさましかば」(傍線部^g)と言っている。一夜が明けて、光源氏は、再び紫の上を二条の院に迎えることを求めた。しかし、少納言が、紫の上の父である兵部卿の宮も迎える準備をしていることを理由に、光源氏を断つた。光源氏は、「今より見たてまつれど、浅からぬ心ざしはまさりぬべくなむ」(傍線部^h)と言ひ、兵部卿の宮より、自分のほうが紫の上を大切に育てると強く主張している。

以上の描写は、『遊仙窟』のように露骨に描かれていないが、平安時代の貴族男性である

光源氏にとっては、「歓楽の一夜」とは言えるが、紫の上にとっては、ただ恐怖の一夜に過ぎなかった。実事がないこの「一夜」と『遊仙窟』の「歓楽的な一夜」とは齟齬が見られる。だが、「歓楽的な一夜」はもちこされて、後に紫の上を二条の院に連れて行ったことによって、光源氏と紫の上の間に、「歓楽的な一夜」が実現できたのではないかと思われる。

おわりに

『源氏物語』の「若紫」の巻の北山に登場している、光源氏、尼君、紫の上は、『遊仙窟』の張文成、五嫂、十娘と対応関係を持っている。それだけではなく、「若紫」の巻には、『遊仙窟』の「歓楽の一夜」が描かれていないが、光源氏が、紫の上と風が吹き荒れる一夜をともにして、後に紫の上を二条の院に連れて行ったことなどがある。光源氏と紫の上の間に、「歓楽の一夜」が実現できた。それは、短編小説である『遊仙窟』を超えた一種の変容とは言えるだろう。また、「北山」に見られる楽器、唐物などにも『遊仙窟』の影響が見られる。『遊仙窟』と「若紫」の巻とでは、先に述べたように、〈黄金〉のイメージの違いにも注意すべきである。

- (1) 丸山キヨ子「源氏物語・伊勢物語・遊仙窟―わかむらさき北山・はし姫宇治の山荘・うひかうぶりの段と遊仙窟との関係―」『源氏物語と白氏文集』「東京女子大学学会研究叢書3」昭和三十九年八月）、田中隆昭「光源氏の北山行―若紫卷の桃源郷的世界―」『源氏物語の思惟と表現』新典社平成九年二月）、新聞一美「源氏物語と遊仙窟―若紫卷と夕顔卷を中心に―」『源氏物語と唐代伝奇』青簡舎 平成二十四年二月）など。
- (2) 注(1)の丸山氏の論文。
- (3) 注(1)の丸山氏の論文。
- (4) 注(1)の田中氏の論文。
- (5) 田中隆昭「北山と南岳―若紫卷の仙境的世界―」『国語と国文学』平成八年十月、『源氏物語 引用の研究』所収、勉誠出版 平成十年二月)
- (6) 注(5)の田中氏の論文にも指摘されている。
- (7) 『日本国語大辞典』(第二版 小学館 平成十五年一月)
- (8) 『河海抄』(玉上琢彌編 角川書店 昭和四十三年六月)には、「或人云法隆寺_二太子の御たから物の中に念珠_三兩三連_一にあり其中金剛子念珠一連あり又彼寺の縁起にもみえたり_{云々}」とある。
- (9) 堀内秀晃「光源氏と聖徳太子信仰」『講座源氏物語の世界』 有斐閣 昭和五十五年十月)
- (10) 観之道頭有_二黄金山_一。即到_レ炫_レ面。爰_二薨_一聖徳皇太子待立。共登_二山頂_一。其金山頂居_二一比丘_一。『日本靈異記』上巻、「信_二敬三宝_一得_二現報_一縁_二第五_一」(『新編日本古典文学大系』岩波書店 平成八年十二月)による)
- (11) 昔上宮太子ト申聖イマシキ。用明天皇ノハジメテ親王ニイマセシ時ニ、穴太部ノ真人の皇女ノ腹ニムマセ給ヘル御子也。ハジメハ母ノ夫人ノユメニ_二金色_一ノ僧アリテ云、我ヨヲスクフ願アリ。願ハ暫ク御腹ニヤドラム。我ハ救世菩薩也。家ハ西方ニアリ。トイヒテ、ヲドリテロニ入ヌトミテ懐妊シ給ヘリ。『三宝絵』中一聖徳太子(新編日本古典文学大系 岩波書店 平成九年九月)による)
- (12) 注(9)堀内氏の論文。
- (13) 『佛教語大辞典』(東京書籍 昭和五十六年五月)
- (14) 『源氏物語』「新編日本古典文学全集」(小学館)、「若紫」の巻、二二〇ページ、頭注一〇。
- (15) 『佛教語大辞典』(東京書籍 昭和五十六年五月)
- (16) 保立道久『黄金国家』(青木書店 平成十六年一月)

- (17) 河添房江「若紫巻の光源氏と唐物―瑠璃壺・金剛子の数珠・黄金」(『源氏物語時空論』東京大学出版社 平成十七年十二月)
- (18) 拙稿には、「若紫」の巻の「北山」が、『遊仙窟』の「神仙の窟」の要素が見られるし、「北山の僧都」という人物も『遊仙窟』の影響が受けられたことを論じている。(『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』(16)平成二十八年三月)
- (19) 空持^二旧物^一表^二深情^一、鈿合金釵寄将去。釵留^二一股^一合一扇、釵擘^二黄金^一合分^レ鈿。
『白氏文集』二下 「新釈漢文大系」 平成十九年七月)
- (20) 注(5) 田中氏の論文である。
- (21) 新聞一美「源氏物語夕顔巻と遊仙窟―「邂逅相遇」の物語―」(『源氏物語と東アジア』新典社 平成二十二年九月)
- (22) 注(2) 丸山氏の論文。
- (23) 原岡文子氏は(『源氏物語 若紫』(有精堂校注叢書 昭和六十三年九月)、『伊勢物語』初段の「女はらから」の設定そのものが既に『遊仙窟』を踏まえてのものとおぼしきことはもとより、『遊仙窟』を直接に該当巻が受容しているのではないかと考えられる点もなくはない」と指摘している。しかし、「若紫」の巻の尼君と『遊仙窟』の若い未亡人である五嫂とは、かなり距離がある。この点から見ると、原岡氏の論は、不十分なところもあると思われる。
- (24) 注(2) 丸山氏の論文である。
- (25) 前注(5)の田中氏の論文。田中氏は、僧都の坊で光源氏が若紫へ思いに身を焦がして眠れぬ一夜と、張文成が十娘を垣間見ながら眠れぬ一夜と共通していることを指摘している。

「蜻蛉」の巻と『遊仙窟』

『源氏物語』と『遊仙窟』の受容関係を論じるために、「蜻蛉」の巻の末尾に見られる、女一の宮の女房中將のおもとと、薫が交わした会話を無視することはできない。第二部の第一章の15ページにも挙げたが、その場面をもう一度挙げよう。

箏の琴いとなつかしう弾きすさむ爪音をかしう聞こゆ。思ひかけぬに寄りおはして、「など、かくねたまし顔に掻き鳴らしたまふ」とのたまふに、みなおどろかるべかめれど、すこしあげたる簾うちおろしなどもせず、起き上がりて、「似るべき兄やははるべき」と答ふる声、中將のおもととか言ひつるなりけり。「まろこそ御母方のをぢなれ」と、はかなきことをのたまひて、……（「蜻蛉」の巻 二七一〜二七二ページ）

この「蜻蛉」の巻の場面に関しては、藤原定家の『奥入』に指摘がある（注2）。第一章に、既に詳しく論じているため、ここでは簡潔にまとめる。薫の「など、かくねたまし顔に掻き鳴らしたまふ」（傍線部）という発言は、『奥入』が、『遊仙窟』の「故々 将^{ホソキ}織^{タナス}手^{エラ}

一時々^{ヨリクニ}弄^{カキナラス} 二小^{ホソキ}絃^ヲ一耳^ニ聞^{キク} 猶^{イキノ}氣^ヲ絶^タ 眼^{イカハカリカ}見^{アラ}若^レ 為^ナ怜^ラ」の部分から引用さ

れていることを指摘し、また、「似るべき兄やははるべき」（傍線部）と、「まろこそ御母

方のをぢなれ」（波線部）という会話も、『遊仙窟』の「気調^{キテウノイキサシハコノカミノサイキケイカ} 如^{オトイモワトナレハ}兄^キ 崔^キ季^キ珪^キ之^ノ小^コ妹^メ

容^{ヨウ}貌^{ボウ} 似^ニ舅^{ニウ}一^ニ潘^{パン}安^{あん}仁^に之^ノ外^{ガイ}甥^{セイ}」という部分から変容したことも指摘している。

中西進氏は、この場面において、薫が、女一の宮を仙境に住んでいる十娘に準えていることを指摘している（注3）。ここで、注目したいのは、薫の発言の「まろこそ御母方のをぢなれ」（波線部）である。薫は女一の宮の母方の叔父だから、薫が、女一の宮を『遊仙窟』の十娘に、自分を潘安仁に準えていることになる。つまり、ここでは、『遊仙窟』の人物との対応関係を十分に、意識しているのである。

薫―潘安仁（御母方のおぢ） 女一の宮―十娘

（「蜻蛉」の巻の人物と『遊仙窟』の人物との対応関係1）

「蜻蛉」の巻のこの場面において、ただ、単純に、『遊仙窟』を踏まえた表現を用いて応酬しているだけでなく、ちゃんと、「蜻蛉」の巻の人物が、『遊仙窟』の人物関係と対応していることも分かる。また、それだけではなく、その直後の場面において、薫は、自分を張文成に、女一の宮を十娘に準えていて、「神仙の岩屋」の「歡樂」を再現しようとして

いると見られる。だが、その結果は、うまくいかなかった。これは、「蜻蛉」の巻と『遊仙窟』の大きな違いである(注4)。また、薫が、女一の宮と女二の宮を「並べ持ちたてまつらば」(「蜻蛉」の巻 二七三ページ)とされている場面は、読者は、張文成が、十娘と五嫂を手にいれようとする場面を思い起こすと思われる。

薫―張文成 女一の宮―十娘か 女二の宮―五嫂か

(「蜻蛉」の巻の人物と『遊仙窟』の人物との対応関係Ⅱ)

この場面において、「蜻蛉」の巻と『遊仙窟』との人物対応関係を右のように示した。この対応関係Ⅰ、Ⅱは連続的な場面に見られるのである。短い部分の中にも、対応関係の变化があることは、「宇治十帖」の特徴だろうか。他の巻を探ってみよう。

Ⅱ「橋姫」「椎本」「総角」の巻の「一男双美」の型と『遊仙窟』

序論に挙げたように、丸山キヨ子氏は、『源氏物語』が『遊仙窟』にヒントを得たのは、「若紫」の巻の垣間見と、「橋姫」の巻の垣間見であることを指摘している(注5)。鈴木儀一氏は、張文成が、山里の仙境に住む美女の十娘の姿を垣間見たことと、十娘と詩を贈答したことは、平安貴族にとつて、甘美な恋愛物語の典型として認識されたことと指摘し、さらに、「橋姫」の巻の垣間見は、この『遊仙窟』によったこととして読むとよいと論じている(注6)。新間一美氏は、宇治の中の君と大君が、『遊仙窟』の十娘のような魅力的な女性でもあるし、また、訓読の重要性を指摘して、「橋姫」の巻の垣間見と『遊仙窟』の受容関係を述べている(注7)。

第一章で述べたように、「蜻蛉」の巻には、薫が姉妹である女一の宮と女二の宮を手に入れようとする場面がある(注8)。このように、一人の男性と二人の若い女性をめぐる恋愛を描く型を「一男双美」という。「一男双美」という型は、『遊仙窟』の特徴と言える(注9)。しかし、「蜻蛉」の巻のこの場面は、ただ薫の妄想であるため、女一の宮を十娘、女二の宮を五嫂という対応関係と判断していいかどうかということは判断できない。この人物関係との対応は、「若紫」の巻と「橋姫」の巻においてはどうかだろうか。

第三章に述べたように、「若紫」の巻の北山の段で、光源氏は、読経していた尼君と、「白き衣」「山吹」の汗衫を着て走ってきた紫の上を垣間見た。丸山氏は、この「若紫」の巻の垣間見は、『伊勢物語』の初段を踏まえつつ、『遊仙窟』も利用していることを指摘している(注10)。しかし、この童女と嫗という「一男双美」の構図は、『遊仙窟』の「一男双美」とは距離が見られる(注11)。「若紫」の巻の、年配の尼君と若い紫の上と比べると、「橋姫」の巻の、大君(二十四歳)と中の君(二十二歳)という若い姉妹の組み合わせと、『遊仙窟』五嫂(十九歳)と十娘(十七歳)という若い義理の姉妹という組み合わせのほうが近いと思う。「橋姫」の巻の垣間見の場面を読みながら、『遊仙窟』の受容が頭に浮かんでくるの

が自然だと思われる。しかし、薫の目に入った大君と中の君は、どちらが十娘の役か、どちらが五嫂の役か、ということが、判断できない。つまり、この「橋姫」の巻の垣間見において、薫は大君と中の君の区別がつかないと考えられる。

薫は、姫君たちの戯れの会話を聞き、かわいらしい姿を見て、「いとあはれになつかしうをかし」（「橋姫」の巻 一四〇ページ）と感じている。「霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず」（「橋姫」の巻一四〇ページ）とあるように、霧が深いので、薫は、姫君たちの姿がはっきり見えなかった。ぼんやりとする中で、姫君たちの様子を見た薫は、かつて若い女房たちが読んでいた昔物語のことを思い出した。『花鳥余情』が、『住吉物語』の姫君が琴を弾いて、中將が琴の音を聞きつける場面と、『うつほ物語』の「嵯峨の院」の巻の姫君たちが合奏する場面を取り上げている（注12）。また、『万水一露』は、『うつほ物語』の「俊蔭」の巻の若小君と俊蔭の娘が結ばれる話を指摘している（注13）。昔物語の中に、都から離れたところで不意に姫君を垣間見る場面があって、古注釈が取り上げている物語に限らず、薫は宇治の姫君たちを垣間見た時にこのような場面を思い浮かべたのだろうか。

また、薫が、匂宮に宇治の経験を語っている際に、「ほのかなりし月影の見劣りせずは、まほならんはや」（「橋姫」の巻 一五四ページ）と言っている。それも、薫が、姫君たちの容貌がはっきり分からない証拠の一つである。

ところで、いったい、薫は、何を「いとあはれになつかしう」と思っているのだろうか。また、薫は、なぜ物語のような場面と感じているのだろうか。

ア 三の宮の、かやうに奥まりたらむあたりの見まさりせんこそをかしかるべけれど、
あらまじごとだにのたまふものを、聞こえはげまして、御心騒がしたてまつらん
と思して、……
（「橋姫」の巻 一五三ページ）

イ 「……さる方に見どころありぬべき女の、もの思はしき、うち忍びたる住み処ども、
山里めいたる隈などに、おのづからはべるべかめり。この聞こえさするわたりは、
いと世づかぬ聖さまにて、こちごちしうぞあらむと、年ごろ思ひ悔りはべりて、耳
をだにこそとどめはべらざりけれ。ほのかなりし月影の見劣りせずは、まほならん
はや。けはひありさま、はた、さばかりならむをぞ、あらまほしきほどとおぼえは
べるべき」など聞こえたまふ。
（「橋姫」の巻 一五四ページ）

匂宮は明石の中宮腹の第三皇子で、幼い時に女一の宮と共に、紫の上のもとで育てられた。兄の東宮が即位したら、次の次の東宮に定められるとの見通しのために、周りに注目されている。そのため、匂宮は薫のように自由に宇治へ訪問することができない。だから、普段、匂宮は、「かやうに奥まりたらむあたりの見まさりせんこそ」（アの波線部）とあるように、人があまり行かないところにいる女性と意外な出会いが面白いと思っている。だから、薫は、宇治で山の奥に美しい姫君たちが垣間見たことを教えて、「（匂宮の）御心騒

がしたてまつらん」と思うのである（アの傍線部）。薫は、「さる方に見どころありぬべき女の、もの思はしき、うち忍びたる住み処ども、山里めいたる隈などに、おのづからはべるべかめり」（イの波線部）と言って、ますます匂宮の好奇心を煽っている。また、薫が宇治の姫君たちに対する「ほのかなりし月影の見劣りせずは、まほならんはや」（イの傍線部）という評価から見ると、少なくとも、「橋姫」の巻の垣間見の場面において、薫は、大君か、中の君か、どちらの姫君にも心を傾けてはいないのだ。

垣間見の後に、大君と薫が歌を贈答した場面が見られる。

峰の八重雲思ひやる隔て多くあはれなるに、なほこの姫君たちの御心の中ども心苦
しう、何ごとを思し残すらむ、かくいと奥まりたまへるもことわりぞかしなどおぼゆ。

「あさぼらけ家路も見えずたづねこし榎の尾山は霧こめてけり

心細くもはべるかな」とたち返りやすらひたまへるさまを、都の人の目馴れたるだ
になほいとことに思ひきこえたるを、まいていかかはめづらしう見ざらん。御返り聞
こえ伝へにくげに思ひたれば、例のいとおつましげにて、

雲のゐる峰のかけ路を秋霧のいとど隔つるころにもあるかな

すこしうち嘆いたまへる気色浅からずあはれなり。（「橋姫」の巻 一四八ページ）

薫は、山里の景色を眺めながら、寂しい山の奥に住んでいる若い姉妹のことを、いとお
しいと感じて、姫君たちに歌を送った。確かに、返歌しているのは大君だったが、地の文
にも、「かくいと奥まりたまへるもことわりぞかし」（傍線部）とあるように、薫の歌の宛
先は、宇治の姫君たちだった。ただ、当時、八の宮が不在のため、姉の大君が父の代わり
に返歌したのであった。大君に対して、薫は、ただの「客人」に過ぎないのではないだろ
うか。第二章で論じたように、「東屋」の巻まで、薫は宇治の山荘の「客人」である。

このように見ると、薫は、大君と中の君のどちらかというわけではなく、山奥に住まう
美しい姉妹に魅了されたことが分かる。「橋姫」の巻において、確かに、指摘されてきたよ
うに、読者は、『遊仙窟』の張文成が「神仙の窟」のような所で十娘と五嫂と出会った場面
を思い起こすと思われる。『遊仙窟』の場合は、張文成は、十娘が箏を弾いた音に惹かれて、
十娘を垣間見ている。このように男性主人公が音楽に惹かれることは、「橋姫」の巻と符号
する。ところが、大君と中の君は、年齢を考えると、『遊仙窟』の五嫂と十娘と対応してい
るとは言えない（注14）。

薫―張文成 中の君―五嫂か十娘か 大君―十娘か五嫂か

（「橋姫」の巻の人物と『遊仙窟』の人物との対応関係）

右の対応系図が示すように、薫は張文成の役に対応できるが、大君と中の君は、十娘と
五嫂との対応関係は明らかにできない。

薫が二回も大君と中の君を垣間見たことは異例である。「椎本」の巻に、薫が、大君と中の君を二度目に垣間見たことが描かれている。長いが、引用しよう。

まづ一人たち出でて……、いとそびやかに様体をかしげなる人の、髪、桂にすこし足らぬほどならむと見えて、未まで塵のまよひなく、艶々とこちたうつくしげなり。かたはらめなど、あならうたげと見えて、にほひやかにやはらかにおほどきたるけはひ、女一の宮もかうざまにぞおはすべきと、ほの見たてまつりしも思ひくらべられて、うち嘆かる。

また、みざり出でて、……気高う心にくきけはひそひて見ゆ。黒き袷一襲、同じやうなる色あひを着たまへれど、これはなつかしうなまめきて、あはれげに心苦しうおぼゆ。髪さはらかなるほどに落ちたるなるべし、末すこし細りて、色なりとかいふめる翡翠だちていとをかしげに、糸をよりかけたるやうなり。紫の紙に書きたる経を片手に持ちたまへる手つき、かれよりも細さまさりて、痩せ痩せなるべし。立ちたりつる君も、障子口にゐて、何ごとにかあらむ、こなたを見おこせて笑ひたる、いと愛敬づきたり。

「椎本」の巻 二二七〜二二九ページ

この場面では、「橋姫」の巻と違い、大君と中の君がはっきり描き分けられている。薫の目に入った中の君は、「女一の宮もかうざまにぞおはすべきと、ほの見たてまつりしも思ひくらべられて」（傍線部）とあるように、薫は、以前見た今上帝の女一の宮と似ていると見て見ている。大君は、「気高う心にくきけはひそひて見ゆ」（波線部）とある。「橋姫」の巻と比べると、「椎本」の巻に垣間見られた宇治の姫君たちの様態、髪、衣装などのほうが、二人の違いを適格に表している。この「椎本」の巻の垣間見の場面から見ると、「橋姫」の巻においては、琵琶を弾いたのは中の君、箏の琴を弾いたのは大君と描かれている。しかし、薫は、一度も大君と中の君を垣間見たにもかかわらず、それ以上に展開がない。「椎木」の巻は、この二度目の垣間見をもって、幕が閉じられている。

「橋姫」の巻の垣間見の場面を読み返してみよう。「月をかしきほどに霧りわたれる」（「橋姫」の巻 一三九ページ）夜に、楽器を取り換えることによつて、あえて、姉妹の姫君を区別していなかったのではないだろうか。新聞一美氏は、薫が垣間見た中の君と大君の容貌のありさまは張文成が垣間見た十娘の容貌を応用していることが重要であると指摘している（注15）。このように、楽器を取り替えて、あえて、姫君たちを区別つかないように語ることによつて、読者が、どちらの姫君を十娘としてとつてもおかしくないように描いていると思われる。

清水好子氏は、「薫の心がはっきりと大君に傾いた瞬間はこの物語のどこにも書かれていない」と指摘している（注16）。確かに、「総角」の巻までに、薫の姫君たちに対する心情は、曖昧に描かれていることが伺える。

この曖昧な表現は、八の宮の遺言にも伺われる。八の宮が、薫への遺言に、姫君たちのことを「思ひ棄てぬものに数まへたまへ」（「椎本」の巻 一七九ページ）と言っているが、

姫君たちへの遺言では、「この山里をあくがれたまふな」（「椎本」の巻 一八五ページ）と言っている。この二つの遺言は、姫君たちと薫の間に矛盾が生じている原因の一つだろう。実は、大君のほうも、一度仲人の役をしている。

我よりはさま容貌も盛りにあたらしげなる中の宮を、人並々に見なしたらむこそうれしからめ、人の上になしてば、心のいたらむ限り思ひ後見てむ、みづからの上のもてなしは、また誰かは見あつかはむ、この人の御さまの、な^のめにうち紛れたるほどならば、かく見馴れぬる年ごろのしるしに、……（「総角」の巻 二四〇ページ）

八の宮が亡くなった後、大君は、結婚することを断念して、宇治の山荘に一生籠もることを決めた。しかし、大君は、若く美しい妹である中の君を、独身のままで山里に暮らせることを可哀想だと思つて、中の君を「この人」（薫）と結婚をさせようと考えた。「総角」の巻のこの場面においては、大君は、仲人の五嫂の役に当たると思われる。

薫―張文成 大君―五嫂 中の君―十娘

（「総角」の巻の人物と『遊仙窟』の人物との対応関係Ⅰ）

ところが、後に大君の望が叶えられずに、薫の手引きで中の君は匂宮と結ばれることになった。この人物対応関係もうまくいかないのだ。以上のように、「宇治十帖」においては、『遊仙窟』との対応関係がはっきりしていない。

三 「宇治十帖」の「歓楽的な一夜」と『遊仙窟』

ところで、「蜻蛉」の巻に、薫は半生を顧みて、「なほ心憂く、わが心乱りたまひける橋姫かな」（「蜻蛉」の巻 二六〇ページ）と思つている。新編日本古典文学全集の頭注は、薫にとつて、やはり、大君は大切な存在であると指摘している（注17）。この点から見ると、今確認をしたように、大君と中の君は、「若紫」の巻の紫の上と尼君のように、『遊仙窟』の十娘と五嫂と明確に対応できないが、薫に対して、結局、大君は、十娘という存在になつてゐるのは疑いないだろう。

『遊仙窟』は、大幅に、「神仙の窟」で行われた豪華な酒宴、侍女たちの合奏、男女の間での戯れの歌の贈答を描いている。また、張文成と十娘の間に、歓楽的な一夜があることも印象的である。ところで、この「歓楽的な一夜」が、「橋姫」の巻を初めとして、「宇治十帖」にどう描かれているだろうか。

「総角」の巻に、八の宮の一周忌が近いために、薫が宇治の山荘を訪れて、夜に、大君に意中を訴える場面があるが、大君は、積極的に抵抗したために、薫と空しく一夜を過ぎた。

はかなく明け方になりけり。……光見えつる方の障子を押し開けたまひて、空のあはれなるをもろともに見たまふ。女もすこしぬざり出でたまへるに、ほどもなき軒の近さなれば、しのぶの露もやうやう光見えもてゆく。かたみにいと艶なるさま容貌どもを、「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも、同じ心にもて遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぐさまほしき」と、いとなつかしきさまして語らひきこえたまへば、やうやう恐ろしさも慰みて、「かういとはしたなからで、物隔てなど聞こえば、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」と答へたまふ。

〔総角〕の巻 一三七〜一三八ページ

夜が明けて、薫が、「光見えつる方の障子を押し開けたまひて、空のあはれなるをもろともに見たまふ」(傍線部)とあるように、「女」(大君)と一緒に、空を眺めていることが描かれている。ここで、男女関係として使われる「女」という言葉によって、物語が、薫と大君の関係を恋愛関係として、暗示していることが伺える。また、一人は、「いと艶なるさま容貌ども」(波線部)とあるように、美しい姿を互いに見交わしながら話をしたことも、男女関係として描かれていると思われる。薫のことを恐ろしく思っていた大君も、次第に心が慰められてゆく(二重傍線部)。それと比べて、匂宮と中の君の「一夜」を見よう。

明けゆくほどの空に、妻戸おし開けたまひて、もろともに誘ひ出でて見たまへば、霧りわたれるさま、所がらのあはれ多くそひて、例の、柴積む舟のかすかに行きかふ跡の白波、目馴れずもある住まひのさまかなと、色なる御心にはをかしく思しなざる。山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御容貌のまほにうつくしげにて、限りなくいつきすゑたらむ姫宮もかばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの、わが方ざまのいといつくしきぞかし、こまやかなるにほひなど、うちとけて見まほしう、なかなかなる心地す。水の音なひなつかしからず、宇治橋のいともの古りて見えわたさるるなど、霧晴れゆけば、いとど荒ましき岸のわたりを、「かかる所にいかで年を経たまふらむ」など、うち涙ぐまれたまへるを、いと恥づかしと聞きたまふ。

男の御さまの、限りなくなまめかしくきよらにて、この世のみならず契り頼めきこえたまへば……

〔総角〕の巻 一八二〜一八三ページ

匂宮と中の君の三日夜の儀の翌朝に、匂宮は「妻戸おし開けたまひて、もろともに誘ひ出でて見たまへば」(傍線部)とあるように、中の君を誘って、一緒に、山里の景色を眺めている。匂宮は、中の君の容貌を見て、「女君の御容貌のまほにうつくしげにて、限りなくいつきすゑたらむ姫宮もかばかりこそはおはすべかめれ」(波線部)と思っている。この「姫宮」は妹の女一の宮のことで、中の君が兄妹である女一の宮に劣らないと感じている。また、中の君の目に入った匂宮の姿は、「限りなく、なまめかしく、きよらにて」(波線部)

とある。しかも、未だ慣れてない中の君は、「いと恥づかしく聞きたまふ」（二重傍線部）のである。

薫と大君の「一夜」と、匂宮と中の君の「一夜」と比べると、描写が似ているが、両者の間に、根本的な違いは、薫と大君の「一夜」は、普通の男女関係につながる事ができないことである。

この「一夜」の後、薫が中の君ではなく、はっきり大君のほうに心が惹かれたことが描かれている。しかし、大君は、この「一夜」によって、薫を拒否する意志が固まっていた。結局は、大君の死によって、薫との話も幕が閉じられている。また、薫は、大君のみならず、中の君との間とも空しい一夜を過ごしている。

逢ふ人からにもあらぬ秋の夜なれど、ほどもなく明けぬる心地して、いづれと分くべくもあらずなまめかしき御けはひを、人やりならず飽かぬ心地して、「あひ思せよ。いと心憂くつらき人の御さま、見ならひたまふなよ」など、後瀬を契りて出でたまふ。我ながら、あやしく夢のやうにおぼゆれど、なほつれなき人の御気色、いま一たび見はてむの心に思ひのどめつつ、例の、出でて臥したまへり。

（「総角」の巻 二五四〜二五五ページ）

薫は、女房たちを通して、姫君たちの部屋へ入った。ところで、大君は薫の存在に気づいて、別の部屋に脱出した。部屋に中の君がいることを察した薫は、「あひ思せよ。いと心憂くつらき人の御さま、見ならひたまふなよ」（傍線部）と、大君への気持ちを持って、「例の、出でて臥したまへり」（波線部）とあるように、中の君に指一本も触れず、部屋から出た。

薫は、大君との間にも、中の君の間にも、「一夜」の話が描かれることがなく、『遊仙窟』の張文成と十娘の間におかれた「歓乐的な一夜」と齟齬が見られる。もちろん、『遊仙窟』においては、最後に、張文成と十娘が別れたまま、話が終わったが、一応、張文成と十娘の間に「歓乐的な一夜」が成立している。それは、「宇治十帖」の「一夜」との大きな違いだと思われる。

おわりに

「宇治十帖」においては、『遊仙窟』の人物関係を思い起こさせるところが、薫を中心に、散在している。そのうち、薫、大君、中の君は、物語の展開によって、『遊仙窟』の人物との対応関係は、それに合わせて変化している。また、薫と大君の間に置かれた「歓乐的な一夜」は、二度の垣間見によっても、実現できなかつた。これは、「宇治十帖」における『遊仙窟』の受容が、たんに、筋・展開を真似るための引用ではなく、あえて、違う展開の方向を目指すための手法だったということではないだろうか。

また、「宇治十帖」の「橋姫」の巻などと、「蜻蛉」の巻に見られる『遊仙窟』の引用とは確かに違う。「蜻蛉」の巻以降の「手習」の巻、と「夢浮橋」の巻に、宇治の大君と中の君はもう登場していない。そして、「蜻蛉」の巻の巻末に、『遊仙窟』をはっきり踏まえる表現が見られるのは、宇治の姉妹の話を総括する機能を持っているのではないだろうかと考えられる。「蜻蛉」の巻では、人物との対応関係が見られ、それだけではなく、短い部分だけと、人物関係との対応関係も変化していく。この点に関しては、「宇治十帖」の他の巻と一致する。また、『遊仙窟』において、「飲樂的な一夜」が実現できないことも「宇治十帖」の特徴である。

- (1) 宇治の姫君たちと楽器の関係は二説がある。古注釈は、琵琶の前に大君、箏の前に中の君がいる説を取り上げている。それに対して、最近の説は、琵琶が中の君、箏が大君とみる。
- (2) 『奥入』は「日本古典文学影印叢刊」（貴重本刊行会 昭和六十年 九月）による。
- (3) 中西進『源氏物語』と『遊仙窟』 「文学史上の『源氏物語』」 「国文学解釈と鑑賞別冊」至文堂 平成十二年六月）
- (4) 第一章で論じた。
- (5) 丸山キヨ子「源氏物語・伊勢物語・遊仙窟―わかむらさき北山・はし姫宇治の山荘・うひかうぶりの段と遊仙窟との関係―」（『源氏物語と白氏文集』 「東京女子大学学会研究叢書3」 昭和三十九年八月）
- (6) 鈴木儀一氏は、「なお、源氏物語・橋姫の巻に都を離れて宇治に淋しく住む姉妹の姫君が琵琶と琴とを合奏し、それを薫がかいま見るといふ設定は、やはりこの延長線上にある構想によつたものと思われる。」と指摘している。（『伊勢物語と遊仙窟』 『渡辺三男博士古稀記念日中語文交渉史論叢』 桜楓社 昭和五十四年四月）
- (7) 新聞一美氏は、「場面自体が遊仙窟に基づくのならば、薫が見た中の君の「らうたげににほひやかなるべし」と、大君の「うち笑ひたるけはひ」とあるさまは、十娘のような魅力を持つていてもよい。文成が垣間見た十娘は、「華（はな）の容（かほ）婀娜（あだ）とたをやか」で、「斂（れん）咲（せう）としたるゑめるものから、残んの靨（ゑみく）を偷（かく）」していた。その「花の顔」のほほえみのさまを宇治の二人の姉妹に応用したと思う」と指摘している。注（6）の鈴木氏や、新聞氏は、「思われる」や「思う」と言い、あくまでも、「想像レベル」の論点である。（『源氏物語』 若紫巻と『遊仙窟』 『源氏物語の展望』 第五輯 三弥井書店 平成二十一年三月）
- (8) 十娘ともう一人の女性の五嫂は、「神仙の窟」で開かれた宴に出ている。五嫂という女性もたいそう美人であるし、張文成は、「欲兩花俱採」と思っている。
- (9) 董上徳氏は、『遊仙窟』は「劉阮天台」の「二男二美」の構造の影響を受けて、「一男双美」という構造を開創していることを論じている。この「一男双美」という構造は、以降の中国文学作品にも大きな影響を与えたことも指摘している。（「略論中國古代艷遇型「遊仙」故事の承傳與變異——以《遊仙窟》「一男双美」故事框架為中心」（九州中国学会報） 第四十一卷 平成十五年三月）
- (10) 前注（5）の論文。
- (11) 「若紫」の巻に登場している紫の上は十歳で、尼君は四十歳である。『遊仙窟』に登場している十娘は十七歳で、五嫂は十九歳である。
- (12) 住吉物語に姫君の琴引き給ふを中将きゝつけ侍る事みえたり又うつほ第四月おもしろき夕暮八君いま宮ひめ宮みす巻あけてことゝも引あはせあそひ給ふ事あり

『花鳥余情 松永本』「源氏物語古注集成1」伊井春樹編 桜楓社 昭和五十三年四月)

(13) 薫の心也うつほの物語にとしかけかの女の事ひとりゐて琴ひきしを今若君といふ人とをりつゝ聞てかよひてたえくなりしことなとありき子なとも出来たりしことありそれをわかき女房などのよみしを薫のきゝし時空事をいふと思ひてにくかりしか今姫君達の様を見て思ひ合せ給との儀也

『万水一露』「源氏物語古注集成 28」伊井春樹編 桜楓社 平成四年二月)

(14) 「椎本」の巻の大君は二十五歳で、中の君は二十三歳である。『遊仙窟』の五嫂と十娘との設定が近い。

(15) 前注(7)の論文。

(16) 清水好子「薫創造」『文学』25 岩波書店 昭和三十二年二月、『清水好子論文集』第一卷所収、武蔵野書院 平成二十六年八月)

(17) 「新編日本古典文学全集」「蜻蛉」の巻、二六〇ページの頭注に、「自分の憂愁の根源は結局「橋姫(大君)」にあるとする」と指摘している。

第三部 薫という人物造型と『孝経』

第一章 『源氏物語』の薫という人物と『孝経』の受容関係―「孝」という思想に着目して―

はじめに

『源氏物語』の「宇治十帖」に、薫と漢籍が関わる場面がよく見られる。例えば、

御前とは見たまはぬに、白き薄物の御衣着たまへる人の、手に氷を持ちながら、かくあらそふをすこし笑みたまへる御顔、言はむ方なくうつくしげなり。いと暑さのたへがたき日なれば、ちたき御髪の、苦しう思さるるにやあらむ、すこしこなたになびかして引かれたるほど、たとへんものなし。ここらよき人を見集むれど、似るべくもあらざりけりとおぼゆ。御前なる人は、まことに土などの心地ぞするを、思ひしづめて見れば、黄なる生絹の単衣、薄色なる裳着たる人の、扇うち使ひたるなど、用意あらむはや、とふと見えて、……（「蜻蛉」の巻 二四八〜二四九ページ）

とあるように、薫が垣間見た「白き薄物の御衣」を着ている女一の宮の顔は、「言はむ方なくうつくしげ」（傍線部）である。周りの女房たちは、「まことに土などの心地ぞする」（波浪線部）とある。この「まことに土などの心地ぞするを」の部分は、唐代伝奇である『長恨歌伝』との関係が既に指摘されている（注1）。この場面の前に、大君・中の君・浮舟を楊貴妃に擬えている場面がある。中西進氏は、ここで登場している女一の宮は浮舟の後の女性であるし、女一の宮を楊貴妃に擬えることによって、一貫性を貫いたことを表していることを指摘している（注2）。他には、「宿木」の巻に、

口惜しき品なりとも、かの御ありさまにすこしもおぼえたらむ人は、心もとまりなんかし。昔ありけん香の煙につけてだに、いま一たび見たてまつるものにもがなとのみおぼえて、やむごとなき方さまに、いつしかなど急ぐ心もなし。

（「宿木」の巻 三八二〜三八三ページ）

とあるように、大君が亡くなった後、薫は大君のことが忘れられず、「昔ありけん香の煙につけてだに、むいま一たび見たてまつるものにもがな」（傍線部）と、漢の武帝の反魂香が欲しかったと語られている。この話は、『李夫人』に見られる（注3）。

まことに故宮の御子にこそはありけれと見なしたまひては、限りなくあはれにうれしくおぼえたまふ。ただ今も、はひ寄りて、世の中におはしけるものを、と言ひ慰め

まほし。蓬萊まで尋ねて、釵のかぎりを伝へて見たまひけん帝はなほいぶせかりけん、これは別人なれど、慰めどころありぬべきさまなりとおぼゆるは、この人に契りのおはしけるにやあらむ。
(「宿木」の巻 四九四ページ)

同じく、「宿木」の巻に、薫は大君と似ている浮舟を見て、玄宗皇帝が亡くなった楊貴妃のゆかりを求めるために、方士を蓬萊山に行かせたが、釵しかもらえない話を思い出したことも語られている。この話は、『長恨歌』『長恨歌伝』にも伺われる。恋愛をテーマにしている漢籍が薫と姫君たちとのエピソードによく出てくる。

ところで、「柏木」の巻に、薫の父である柏木の遺言に、『孝経』や「孝」という儒教思想の影響が見られる言葉が出ている。そして、「宇治十帖」においては、息子である薫という人物もそのような儒教思想が反映されているかを探ってみよう。特に、『孝経』という作品と薫という人物の受容関係を取り上げたい。

一 『源氏物語』と『孝経』の受容問題

『源氏物語』の「柏木」の巻には、頭の中将の息子である柏木が死の直前に、夕霧に告白した発言がある(注4)。

「心には、重くなるけぢめもおぼえはべらず。……さるは、この世の別れ、避りがたきことはいと多うなむ。親にも仕うまつりさして、今さらに御心どもを悩まし、君に仕うまつることもなかばのほどにて、身をかへりみる方、はた、ましてはかばかしからぬ恨みをとどめつる、おほかたの嘆きをばさるものにて、また心の中に思ひたまへ乱るることのはべるを、かかるいまはのきざみにて、何かは漏らすべきと思ひはべれど、なほ忍びがたきことを誰にかは愁へはべらむ。……」

(「柏木」の巻 三二五ページ)

柏木は、自分の人生を、「親にも仕うまつりさして、今さらに御心どもを悩まし、君に仕うまつることもなかばのほどにて、身をかへりみる方、はた、ましてはかばかしからぬ恨みをとどめつる」(傍線部)と省みている。『岷江入楚』は、「是は世間立身の事なるへし此三段のかき様面白し」と評価した(注5)。また、「孝経云夫孝始_二於事_一親中_二於事_一君終_二於立_一身」と『孝経』の「開宗明義」の章を引いている(八三ページ)。

頭の中将は、かつて、光源氏とは「朝廷に仕うまつりし際は、羽翼を並べたる」(「行幸」の巻 三〇七ページ)関係を持っていた。「絵合」の巻にも、頭の中将の光源氏に対する対抗意識が見られる。ところで、光源氏の養娘である前斎宮の女御(秋好中宮)と、娘の明石の女御(明石の中宮)が立后したことによって、頭の中将の一族の威勢が衰えていく。柏木は、頭の中将の嫡男でありながら、一門を再興する責任を負うことなく、朱雀院の女

三の宮に懸想する日々を送っている。女三の宮が六条の院に入ったにもかかわらず、柏木は、小侍従（女三の宮の女房）の手引きで、女三の宮と一夜の逢瀬をもった。最後に、柏木は、女三の宮との密通が光源氏に発見されたため、苦悶しながら病死した。柏木の一生は、まさに、『孝経』の思想に背いていると言えよう。

女三の宮は、柏木との間に、薫という「不義の子」を産んだ。薫は、自分の出生の秘密に悩みつつ、俗世を逃れるため、宇治の八の宮のもとに通い始めていた。その三年目の秋に、宇治の八の宮の山荘で、老女房である弁と出会う。弁は、薫の出生の秘密を薫に語った。

「よし、さらば、この昔物語は尽きすべくなんあらぬ、また、人間かぬ心やすき所にて聞こえん。侍従といひし人は、ほのかにおぼゆるは、五つ六つばかりなりしほどにや、にはかに胸を病みて亡せにきとなん聞く。かかる対面なくは、罪重き身にて過ぎぬべかりけること」などのたまふ。 （「橋姫」の巻一六二〜一六三ページ）

薫は、弁から真実を聞かされ、「かかる対面なくは、罪重き身にて過ぎぬべかりけること」（傍線部）と言っている。当時は、実父を知らないことは、「罪」である。『源氏物語』の正編において、冷泉帝は、光源氏と藤壺の宮の間に産まれた「不義の子」として描かれている。「薄雲」の巻において、天変地異が起こって、太政大臣（源氏の妻である葵の上の父）、藤壺の宮や式部卿の宮（桃園の式部卿の宮）が、相継いで亡くなった。ある日、夜居の僧都が、冷泉帝に帝の出生の秘密を明らかにした。

「いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当らむと思ひたまへ憚る方多かれど、知ろしめさぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ命終りはべりなば、何の益かははべらむ。仏も心ぎたなしとや思しめさむ」とばかり奏しさして、えうち出でぬことあり。（「薄雲」の巻 四四九〜四五〇ページ）

この「知ろしめさぬ」罪に関しては、「新編日本古典文学全集」の頭注に、「僧都が事実を帝に知らせず、ために帝が、源氏を実の父であること知らず、臣下として放置することによって、天罰が帝に下るに至る。その責任上、僧都自身が重罪を得るとの考え。」と、「帝自身の、実父を臣従させる重罪と解する説もある。」という二説を取り上げている（「薄雲」の巻 四五〇ページ 頭注二）。二種の解釈から見ると、「罪」の主体に対する解釈が分かれているが、冷泉帝が実父のことを知らないことが、「罪」であることは一致している。冷泉帝の「罪」について、物語が曖昧にしているが、井内健太氏は、「不孝の罪」としての可能性が高いこと指摘している（注6）。

『源氏物語』から大きな影響を受けた『狭衣物語』の最後の巻に、天空が様々な異変を引き起こしたことが見られる。天照大神が、斎宮（嵯峨院の女三の宮）に、狭衣の大將は

将来即位することを告げた。

「大将は、顔かたち、身の才よりはじめ、この世には過ぎて、ただ人にてある、かたじけなき宿世・ありさまなめるを、おほやけの知りたまはであれば、世は悪しきなり。若宮は、その御次々にて、行末をこそ。親をただ人にて、帝に居たまはんことはあるまじきことなり。さては、おほやけの御ために、いと悪しかりなん。やがて、一度に位を譲りたまひては、御命も長くなりたまひなん。このよしを、夢の中にも、たびたび知らせたてまつれど、御心得たまはぬにや」などやうに、さださだとのたまはすること多かりけれど、あまりうたてあらば、漏らしつ。(巻四 三四三ページ)

齋宮の姉である女二の宮は、いったん狭衣の大將と結婚したが、後に出家した。女二の宮は、狭衣の大將の間に、若宮が儲けている。ところで、若宮は、女二宮の父である嵯峨院の皇子として世間に知られている。若宮が将来即位するが、「親をただ人にて、帝に居たまはんことはあるまじきこと」(傍線部)のため、「一度に位を譲りたまひては」(傍線部)とあるように、狭衣の大將が先に即位することになる。ここでは、「さては、おほやけの御ために、いと悪しかりなん」(二重傍線部)という言葉に注目すべきである。父親を知らずに臣下にして、子が即位することは、世間に対して、たいそう悪いことである。これは、天変地異の原因であろう。『源氏物語』の冷泉帝の場合も同じだと思われる。それはなぜだろう。『孝経』を参考して考えてみよう。

故生則親安^レ之、祭則鬼享^レ之。是以天下平和、災害不^レ生、禍乱不^レ作。故明王之以^レ孝治^二天下^一也如^レ此。(「孝治」の章 二二〇～二二三ページ)

ここには、親が生きている間に、親孝行をして、親を安楽に暮らさせて、親が亡くなった後に、ちゃんと供養をすることを唱えている。そうすると、天下平和が保たれて、天変地異、戦争禍乱も現れない。有徳の君主は、「孝」によって天下を治めた。君主と「孝」の関係論論じている。

冷泉帝は、夜居の僧都から出生の秘密を知って、光源氏に譲位しようと考えている。皇統乱脈は大変なことであるため、譲位することはもちろん実現できなかった。「藤裏葉」の巻で、冷泉帝が光源氏に准太上天皇の位を贈ったことよって、冷泉帝の「孝」が実現してきたと見られる。冷泉帝の「御代」も最盛期を迎えた。

しかし、薫は臣下であるため、冷泉帝の場合とは大きく隔だっている。

つれなくて、これは隠いたまひつ。かやうの古人は、問はず語りにや、あやしきこととの例に言ひ出づらむと苦しく思せど、かへすがへすも散らさぬよしを誓ひつる、さもやとまた思ひ乱れたまふ。(「橋姫」の巻 一六三ページ)

薫は、弁から渡された柏木の遺書を、ただ、「つれなくて」取り隠した（傍線部）。弁の話に対して、薫は、多少不信感を持ちながら、都に戻って、母女の三宮の邸を訪れた。

かかること、世にまたあらむやと、心ひとつにいとどもの思はしさそひて、内裏へ参らむと思しつるも出で立たれず。宮の御前に参りたまへれば、いと何心もなく、若やかなるさましたまひて、経読みたまふを、恥ぢらひてもて隠したまへり。何かは、知りにけりとも知られたてまつらんなど、心に籠めてよろづに思ひぬたまへり。

〔「橋姫」の巻 一六五〜一六六。ページ〕

もう既に出家した女三の宮は、日々仏道に精進している。薫は、母にどうしても自分の出生の秘密を聞くことができなかつた。やはり、「心に籠めてよろづに思ひぬたまへり」とあるように黙った。「橋姫」の巻は、この場面をもって終焉している。唐突ながら、薫の出生の秘密もここで一区切になった。薫という人物造型と『孝経』の受容問題は、ここまで有効な解釈が見当たらないが、後の節で改めて考えてみよう。

二 皇女降嫁と「孝」の問題

「宿木」の巻の冒頭に、藤壺の女御（今上帝の女御）が、力を尽くして女二の宮を養育していることが描かれている。ところで、女二の宮が十四歳になる年に、藤壺の女御は、物の怪に悩まされて亡くなった。女二の宮の外祖父である左大臣が、既に亡くなっていたため、女二の宮は有力な後見をすべて失った。今上帝は女二の宮の将来も心配している。

宮は、まして、若き御心地に心細く悲しく思し入りたるを、聞こしめして、心苦しくあはれに思しめさるれば、御四十九日過ぐるままに忍びて参らせたてまつらせたまへり。日々に渡らせたまひつつ見たてまつらせたまふ。黒き御衣にやつれておはするさま、いとどらうたげにあてなる気色まさりたまへり。心ざまもいとよくおとなびたまひて、母女御よりもいますこしづしやかに重りかなるところはまさりたまへるを、うしろやすくは見たてまつらせたまへど、まことには、御母方とても、後見と頼ませたまふべき伯父などやうのはかばかしき人もなし。わづかに大蔵卿、修理大夫などいふは、女御にも異腹なりける、ことに世のおぼえ重りかにもあらず、やむことなからぬ人々を頼もし人にておはせんに、女は心苦しきこと多かりぬべきこそいとほしけれなど、御心ひとつなるやうに思しあつかふも安からざりけり。

〔「宿木」の巻 三七五〜三七六。ページ〕

喪服姿の女二の宮が、かえって美しく見られるが、今上帝は、「女は心苦しきこと多かり

よくも、Bさるべき人の心にゆるしおきたるままにて世の中を過ぐすは、宿世宿世にて、後の世に衰へある時も、みづからの過ちにはならず。あり経てこよなき幸ひあり、めやすきことになるをりは、かくてもあしからざりけりと見ゆれど、なほたちまちにふとうち聞きつけたるほどは、C親に知られず、さるべき人もゆるさぬに、心づからの忍びわざし出でたるなん、女の身にはますことなき疵とおぼゆるわざなる。なほなほしてきた人の仲らひにてだに、あはつけく心づきなきことなり。みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを、思ふ心より外に人にも見え、宿世のほど定められんむ、いと軽々しく、身のもてなしありさま推しはからるることなるを。あやしくものはかなき心ざまにやと見ゆる御さまなるを、これかれの心にまかせてもてなしきこゆるさやうなることの世に漏り出でむこと、いとうきことなり」など、見棄てたてまつりたまはむ後の世をうしろめたげに思ひきこえさせたまへれば、いよいよわづらはしく思ひあへり。

〔若菜上〕の巻 三三三〜三四ページ

もし、女三の宮が親（傍線部B）に認められた人と結婚したら、後に不如意な生活に落ち込まれても、女三の宮の罪にはならない。もし、女三の宮が親にも知られない（傍線部C）うちに、勝手に結婚相手を決めてしまったら、女三の宮の最大な罪になる。『礼記』には、「聘則為_レ妻、奔則為_レ妾」とある（注7）。『源氏物語』に大きな影響を与えた、白居易の「新楽府」の「井底引銀瓶」は、「止_二淫奔_一也」を主旨としての作品である（注8）。『細流抄』は、「孟子曰不待父母之命媒妁之言鑽穴隙相窺踰牆相從則父母国人皆賤之」と解している（注）。朱雀院は、無邪気な女三の宮が好色者に誘惑されて、名に疵をつけられることを心配している。ところで、朱雀院の悩みの肝心な問題は、大切に育てている女三の宮が、「すき者ども」に手に入られたら、「亡き親の面を伏せ、影を辱づかしむる」という結果になることである（傍線部A）。そうならば、結局に、女三の宮の罪のことになる。この「亡き親の面を伏せ、影を辱づかしむる」と似ている表現が、「松風」の巻にも見られる。

「世の中を棄てはじめしに、かかる他の国に思ひ下りはべりしことども、ただ君の御ためと、思ふやうに明け暮れの御かしづきも心になふやうもやと思ひたまへたちしかど、身のつたなかりける際の思ひ知らるること多かりしかば、さらに都に帰りて、古受領の沈めるたぐひにて、貧しき家の蓬葎どももありさまあらたむることみなきものから、公私にをこがましき名を弘めて、親の御亡き影を辱めむことのみじきになむ、やがて世を棄てつる門出なりけりと人にも知られしを、その方につけてはよう思ひ放ちてけりと思ひはべるに、君のやうやう大人びたまひ、もの思ほし知るべきにそへては、なかう口惜しき世界にて錦を隠しきこゆらんと、心の闇晴れ間なく嘆きわたりはべりしままに、仏神を頼みきこえて、さりとめかうつたなき身にひかれて山がつの庵にはまじりたまはじと思ふ心ひとつを頼みはべりしに、思ひよりがたくてうれしきことどもを見たてまつりそめても、なかなか身のほどを……」

明石の君たちが明石から都へ出発する朝に、明石の入道は、自分の半生を顧みて、「親の御亡き影を辱づかしめむことのいみじさ」（傍線部）のため、出家したと言っている。『河海抄』は、『孝経』の「詩云、夙興夜寐、亡_レ忝_ニ尔所生_一」を引いている（注10）。この引かれた「詩云」云々という句は、孝子として、「朝早く起き、夜遅くて寝て、親を辱しめることのないようにする」という意味である。同じく、「若菜上」の巻に見られる「亡き親の面を伏せ、影を辱づかしむる」という表現も、「孝」という問題とつながると考えられる。女三の宮が、朱雀院に認められてない男と密通したら、親を恥じさせることになる。それは、「不孝」である。

以上の例から見ると、皇女降嫁の場合には、「孝」という儒教の思想が重要な要素として働いていると見られる。

三 薫の孝の問題

また、「宿木」の巻の、女二の宮の婿の問題に戻ってみよう。

この中納言より外に、よろしかるべき人、また、なかりけり。宮たちの御かたはらにさし並べたらんに、何ごとも目ざましくはあらじを、もとより思ふ人持たりて、聞きにくきことうちまますまじく、はた、あめるを、つひにはさやうのことなくてしもえあらじ、さらぬさきに、さもやほのめかしてまし、など、をりをり思しめしけり。

（「宿木」の巻 三七七ページ）

今上帝は、薫が宇治の八の宮の大君に心を寄せていること（傍線部）を知りつつ、薫を女二の宮の婿として選んだ。それはなぜだろうか。今上帝の心内文の部分を引用しよう。

朱雀院の姫宮を六条院に譲りきこえたまひしをりの定めどもなど思しめし出づるに、しばしは、いでや飽かずもあるかな、さらでもおはしなましと聞こゆることどもありしかど、源中納言の人よりことなるありさまにてかくよろづを後見たてまつるにこそ、その昔の御おほえ衰へず、やむごとなきさまにてはながらへたまふめれ、さらずは、御心より外なることどもも出で来て、おのづから人に軽められたまふこともやあらまし、など思しつづけて、ともかくも御覧する世にや思ひ定めましと思しよるには、やがてそのついでのままに、……

（「宿木」の巻 三七六〜三七七ページ）

今上帝が、女二の宮の婚姻問題を解決するために、朱雀院が女三の宮を光源氏に降嫁にした事例を参考にした。当時まだ東宮だった今上帝は、実は、朱雀院に女三の宮の将来を

依頼されたこともあった。当時、女三の宮の降嫁のことについて、「いでや飽かずもあるかな」「さらでもおはしなましと聞こゆること」（傍線部）という噂があった。ところで、薫（源中納言）という子が儲けられているから、元々の皇女の威勢が今まで維持されている（波線部）。これは、今上帝が薫を選んだもつとも重要な理由だと思われる。『孝経』の「士人」の章に、

子曰、資_二於事_一、父以事_レ母、其愛同。故資_二於事_一、父以事_レ君。其敬同。故母取_二其愛_一、而君取_二其敬_一。兼_レ之者父也。

（一三五〜一三九ページ）

とある。薫の場合は、名義上の父である光源氏や、実父である柏木が、既に亡くなっている。また、薫は、冷泉院と秋好の中宮から庇護を受けているが、冷泉帝の後胤がないため、政治の中心とも離れていく。この現実の上に、薫の「孝」は「事_レ母」に反映されると考えられる。

ここで参考になると思われるのは、『うつほ物語』の仲忠の例である。『うつほ物語』の後半は、立太子の話を中心に展開していく。皇女降嫁の問題ではないが、嵯峨の院の皇女である小宮は、東宮の妃である。藤壺だけが東宮の寵愛を受けているために、小宮は不遇になっている。朱雀帝は、親の嵯峨の院と大后の宮の気持ちを考えて、「御歳高くなりぬれば、御代、今いくばくもあらじを。そがうちにも、宮のいとらうたくし給ふ宮なり。天下に、心に適はずとも、少し心とどめてこそ」（蔵開・中）の巻 五四九ページ）と、東宮を強く諫めた。朱雀帝の皇女である女一の宮は、「沖つ白波」の巻で、仲忠に降嫁した。仲忠は、「孝の子」として知られている（注11）。朱雀帝が女一の宮を降嫁した際に、仲忠が持っている「孝」という特質も十分考えていると思われる。この点に関しては、次章に詳しく論じる。『源氏物語』に戻ろう。

今上帝は、女二の宮を薫に降嫁することを決意して、薫を内裏に呼んだ。

いでや、本意にもあらず、さまさまにいとほしき人々の御事どもをも、よく聞き過ぐしつづ年経ぬるを、今さらに聖よのもの、世に還り出でん心地すべきこと、と思ふも、かつはあやしや、ことさらに心を尽くす人だにこそあなれとは思ひながら、后腹におはせばしもおぼゆる心の中ぞ、あまりおほけなかりける。

（「宿木」の巻 二七九ページ）

ところで、薫は、女二の宮と結婚することを本意に思いながら、后腹の女一の宮のほうに憧れている。そのために、すぐ今上帝に答えなかった。女二の宮との縁談を無視して、宇治の姉妹と（擦れ違い）（注12）に悩んでいる薫の姿を見た、母である女三の宮が、心配している。

「幾世しもあらじを、見たてまつらむほどは、なほかひあるさまにて見えたまへ。世の中を思ひ棄てたまはんをも、かかるかたちにては、妨げきこゆべきにもあらぬを、この世の言ふかひなき心地すべき心まどひに、いとど罪や得んとおぼゆる」とのたまふが、かたじけなくいとほしくて、よろづを思ひ消ちつつ、御前にてはもの思ひなきさまをつくりたまふ。

〔宿木〕の巻 四〇〇ページ

女三の宮も既に出家していたが、薫が仏道に精進する様子を、「いとど罪や得んとおぼゆる」と言っている。薫は、母の女三の宮を安心させるため、「御前にてはもの思ひなきさまをつく」っている（波線部）。薫は、不本意ではあるが、女二の宮を三条の宮に迎えようとしている。その意向を知った女三の宮は、「いとうれしきこと」（宿木）の巻 四七六ページ）とあって、自分が住んでいる寝殿を女二の宮に譲ろうとしている。薫は、母の女三の宮のように嬉しく思っていないけれど、この婚姻は、母の女三の宮に支援されたことであるため、「言ふ限りなききよらを尽くさせたまへり」（宿木）の巻 四八六ページ）とあるように、女二の宮を迎えた。

薫と女二の宮との縁談の問題に関して、薫の母である女三の宮の正面的な描写はないが、女三の宮の影響力を無視することが出来ないと思われる。今上帝は、薫が母の女三の宮に孝養を尽くしたことによって、薫に女二の宮を降嫁させることを決意した。それだけではなく、母の女三の宮が全力的にこの縁談を支援する態度も、最終的に、薫が女二の宮と結婚を承諾した理由の一つではないだろうか。

おわりに

これらのできごとの下敷きは、やはり、『孝経』に見られる「事母」という思想だとと思われる。

薫が、出生の秘密を知って、女三の宮のもとを訪れた場面に戻ってみよう。

かかること、世にまたあらむやと、心ひとつにいとどの思はしさそひて、内裏へ参らんと思しつるも出で立たれず。宮の御前に参りたまへれば、いと何心もなく、若やかなるさましたまひて、経読みたまふを、恥ぢらひてもて隠したまへり。何かは、知りにけりとも知られたてまつらんなど、心に籠めてよろづに思ひあたまへり。

〔橋姫〕の巻 一六五〜一六六ページ

女三の宮は、昔のことを既に忘れてしまつて、「いと何心もなく」（傍線部）読経している。薫は、その母の様子を見て、「心に籠めてよろづに」（波線部）思っている。実父も既に亡くなった薫にとって、父に仕える態度と同じように、母に仕えることは「孝」である。この親子の対照的な描写から、薫の「事母」という決心が伺えるだろう。

薫という人物造型においては、 \wedge 孝 \searrow という儒教思想が見られると思われる。それは、『源氏物語』に大きな影響を与えた『うつほ物語』の主人公である仲忠が親に孝を尽くしたことが参考になる。仲忠は「孝の子」（「俊蔭」の巻 三五ページ）である。仲忠という人物造型は、よく、『孝子伝』と重ねて論じられている（注13）。しかし、仲忠という人物造型には、それ以上に儒教思想の影響が見られると思われる。次章では、『うつほ物語』の仲忠と『孝経』や \wedge 孝 \searrow という儒教思想との関係を論じ、儒教思想が物語においてどのような機能を持っているかという問題を考えてみよう。

- (1) 『細流抄』(『内閣文庫本細流抄』「源氏物語古注集成7」伊井春樹編 桜風社 昭和五十五年二月)には、「長恨歌伝粉色如土とある楊貴妃のまへにてはそのほかの宮女はみなつちのことくみゆるといへる也」と指摘している。新編日本古典文学全集の頭注にも同じく、『長恨歌伝』の影響があると指摘している。(『蜻蛉』の巻 二四九ページ 頭注一四)
- (2) 中西進氏は、「ここに登場する女一の宮は薫にとつて浮舟後の女性である。いわば大君から引きついできた女性像の最後に準備された人物だから、大君と似通っていた楊貴妃の側に一の宮をおくことは、筋にならなっている。やはり、この一貫した女性像を造型するために用いられた一節であったと思われる」と指摘している。(『源氏物語と白楽天』(岩波書店 平成九年七月))
- (3) 新編日本古典文学全集の頭注には、「李夫人に死別した漢の武帝が、画像を掲げて方士に霊薬をたかせると、不思議にも香煙の中に夫人の姿が現れたという故事。『白氏文集』による」と指摘している。(『宿木』の巻 三八三ページ 頭注一四番)
- (4) 特にことわりがない限り、『源氏物語』、『狭衣物語』の本文の引用は小学館新編日本古典文学全集により、頁数を記した。傍線は私による。『孝経』の本文は、『新釈漢文大系』(明治書院 昭和六十一年六月)を用いた。
- (5) 『岷江入楚』の引用は、『源氏物語古注集成 13』(桜楓社 昭和五十九年一月)による。
- (6) 井内健太『源氏物語』における冷泉帝の罪について(『東京大学国文学論集』(12) 平成二十九年三月)
- (7) 『礼記・中』「内則」(『新釈漢文大系』明治書院 昭和五十二年八月)
- (8) 『白氏文集一』(『新釈漢文大系』明治書院 平成二十九年五月)
- (9) 『細流抄』の引用は、『源氏物語古注集成7』(桜楓社 昭和五十五年二月)による。
- (10) 『河海抄』の引用は、『紫明抄・河海抄』(角川書店 昭和四十三年六月)による。
- (11) 懐妊している俊蔭の娘の面倒を見ている嫗は、瑞夢を見て、俊蔭の娘に、この子は、「いとかしこき孝の子なり」(『俊蔭』三十五ページ)と語った。後に、仲忠孝養譚も物語に描いている。
- (12) 薫が既に、宇治の大君と死別した。また、大君に中の君と結婚することを勧められたが、薫は、中の君を匂宮に譲った。
- (13) 阿部恵子「仲忠孝養譚について―その出典及び俊蔭巻での構想上の位置―」(『実践国文学』第3号 昭和四十八年三月)。三木雅博『「うつほ物語」忠こそその(継子いじめ譚)の位相―『孝子伝』の伯奇譚・クナラ太子譚との比較考察から(『国語国文』73号 平成十六年一月)。狩野二三『「うつほ物語」仲忠孝養譚の位置(愛知県立

大学大学院国際文化研究科論集」第5巻 平成十六年三月）など。

第二章『うつほ物語』仲忠の人物造型―『孝経』引用を中心に―

はじめに

『うつほ物語』は、俊蔭家と正頼家のことが中心に描かれている長編物語である。「俊蔭」の巻で、俊蔭の娘は、若小君（後の兼雅）との間に、子を産んだ。両親を失っていた俊蔭の娘は、亡くなった乳母が使っていた姫に面倒を見てもらう。姫は、瑞夢を見て、俊蔭の娘に、この子は、「孝の子」であると語った（注1）。この子が、後の仲忠である。子が五歳になった時、姫は亡くなった。貧しい暮らしを送っている俊蔭の娘は、北山の熊から「うつほ」を譲られて、子に秘琴を伝授した。この話は、中国の孝子説話に影響されていることが既に指摘されている（注2）。また、仲忠が、母の俊蔭の娘に孝養を尽くしている時に、いろいろな奇瑞が起こった。それらの話にも、『孝子伝』の影響が見られる（注3）。

その後、兼雅が俊蔭の娘の親子を三条の邸に迎えた。子は、元服して、「仲忠」と名づけられた。物語の後半の立場争いの後に、仲忠は、藤原氏の公卿として、正頼の娘である藤壺（源氏）腹の東宮の東宮大夫に就任した。物語の最後では、右大将になった仲忠が、俊蔭家を再興した。ところで、物語の後半では、仲忠の「孝の子」のことは強調されていない。仲忠の〈孝〉という特質が、後半の物語において、どんな機能として働いているかは、物語から直接に伺えない。

仲忠という人物が、ただ〈孝〉という特質をもって、物語の主人公として描かれていることは稀薄である。一方、『孝経』には、「故以_レ孝事_レ君則忠」（「士人」の章、一四〇ページ）、「子曰、君子之事_レ親孝。故忠可_レ移_二於君_一」（「廣揚名」の章、三〇一ページ）という言葉が見られる（注4）。それは、初めて「孝」と「忠」との関係論じているのである。『うつほ物語』の主人公は、「孝の子」として生まれて、元服の場において、「仲忠」と名づけられた。さらには、仲忠という人物と『孝経』の関係も気になる。

そこで、本章では、「仲忠」という人物造型と『孝経』の引用関係を考察したい。

一 〈孝の子〉の仲忠

鈴木温子氏は、『うつほ物語』の中に、「親」と「君」の二つの語が並んでいる箇所が三例あることに注目している（注5）。以下、鈴木氏が指摘した箇所を引用しよう。

①おとどのたまふやう、「人の子は、天下に言へども、女はむつましく、男は疎くなむありける。この朝臣をば、親・君のごとくなむ思ひつる。かかれど、このいぬを、今まで見奉らざりつる。かかりける物を、今まで見ざりける。……」

（「国譲・中」の巻 七一五〜七一六ページ）

②新宰相も、急ぎ参り給ひて、「実頼は、殿隠れ給ひて後、夜昼、悲しきことを思ひ給へ嘆きつるに、今日なむ、その心も忘れて、うれしう思ひ給ふる。なほ、かくて経給はば、すべて、同じきはらからと聞こゆとも、親・君と仕うまつらむ」とて、

〔国譲・中〕の巻 七三〇ページ

③尚侍のおとど、「目もこそ、二つあれ。一所を、親・君と頼み奉るわが子には、なか、かくはのたまふ。わが子の身代はりに、我こそ死なめ」と、臥しまろび給ふ。

〔国譲・下〕の巻 八一―ページ

①は、兼雅が、初めて孫のいぬ宮(仲忠の娘)を抱いた場面である。兼雅は、「人の子は、天下に言へども、女はむつましく、男は疎くなむありける」と言っているが、仲忠のことを、「この朝臣をば、親・君のごとくなむ思ひつる」と評価している。②は、宰相に昇進した実忠が、兄の実正に、「親・君と仕うまつらむ」と語った場面である。③は、女一の宮(仲忠の妻)が難産で、内侍のおとど(仲忠の母)が、仲忠に、「親・君と頼み奉るわが子には、なか、かくはの給ふ。わが子の身代はりに、我こそ死なめ」と語った場面である。ここで注目すべきは、三例のうち二例が仲忠という人物に関わりがあることである。仲忠の父の兼雅が、仲忠のことを、①のように、「この朝臣をば、親・君のごとくなむ思ひつる」と言い、また、③では、仲忠の母である俊蔭の娘が、仲忠のことを、「親・君と頼み奉るわが子」と言っている。両親は仲忠のことを親や君主のように思い、頼りにしていると述べている。

鈴木氏は、これらの三つの例が、『孝経』の「開宗明義」の章の「夫孝始_二於事_一親中_二於事_一君終_二於立_一身_一(八三ページ)という言葉の影響を受けていると論じている(注6)。『孝経』において〈孝〉というのは、親に仕えることから始まり、出仕して親に対して仕える態度で君主に仕えることで、最後に、立派な人物になることをいう。成立時期が『孝経』の以降になる『孝子伝』は、『孝経』の思想を説話化したものとも言われている(注7)。しかし、この「事_一君」という表現は、『孝子伝』には見当たらない。仲忠の〈孝の子〉という造型は、『孝子伝』ではなく、『孝経』の影響も受けたものと言えよう。

二 平安時代の『孝経』の享受

『孝経』が日本に伝来した明確な記録は見当たらないが、八世紀初期に成立した『養老令』の「学令」に、『孝経』が『論語』と並んで挙げられている(注8)。『日本三代実録』に見られる清和天皇の詔書(注9)には、「一卷孝経、十八篇章、六籍之根源、百王之摸範也」と書かれている。同じ詔書に、「御注一本、理当遵行、宜自今以後、立於学官、教授之経、以充試業」ともある。『孝経』を大学寮のテキストとして採用し、特に唐の玄宗が撰述した『御注孝経』の重要性を述べている。また、当時の故実書などに見られる皇太子や親

王の「読書始」にも、『孝経』が多く用いられている(注10)。

儒家の經典の一つである『孝経』は、当時の漢学者にとつては、不可欠な教養だった(注11)。「菅家文章」には、貞観年間に行われた釈奠で『孝経』が講じられた詩と序文が見られる(巻一 二八 「仲春釈奠、聴講孝経」、同賦資事父事君。并序」、一二七ページ)。笹川勲氏は、「釈奠」が公卿や殿上人も参加する行事であるため、『孝経』が平安貴族たちにも馴染み深い漢籍であることを指摘している(注12)。同じく、『菅家文章』に、関白太政大臣藤原基経の書斎で、『孝経』の読講が行われたことが見られる(巻二 一四六 「相国東廊、講孝経」畢。各分一句、得忠順弗失而事其上」、二三〇ページ)。また、醍醐天皇の娘の三人の内親王を得て、仲忠の父である藤原兼雅のモデルともいわれる藤原師輔(注13)の日記である『九曆』に、「紀在昌孝経天子章ヲ読ム」(天曆四年(九五〇)五月二十四日)と書かれている(注14)。

これらだけではなく、女流作品とされる『源氏物語』にも『孝経』の影響が見られる。これについては、後の章に触れよう。『紫式部日記』(「御湯殿の儀」の段)に、「御文の博士ばかりや替りけむ。伊勢の守致時の博士とか。例の孝経なるべし」と、博士たちが『孝経』を誦する記事が見られる(注15)。「栄華物語」(巻十八「玉の台」)には、「またある僧坊を見れば、うつくしげなる男ども、千字文を習ひ、孝経を読む」と書かれている(注15)。尼たちは、法成寺で、可愛い男の子たちが、『千字文』と『孝経』を朗読している光景を見た。『今鏡』にも、後朱雀帝の皇子である尊仁親王の御書始めに、大江挙周が『御注孝経』を教えた記事が見られる(注16)。

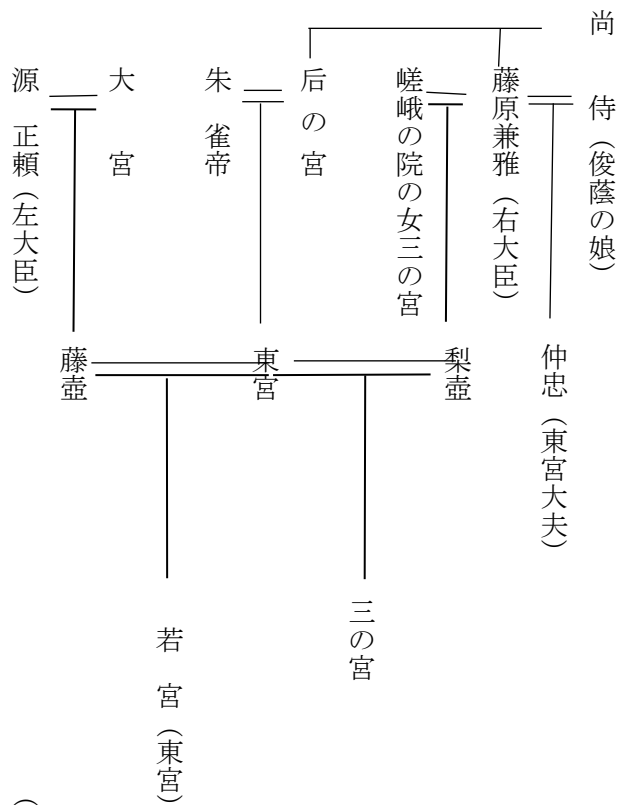
『孝経』がこのように享受されていたことから見れば、『孝経』は平安時代に浸透したことが分かる。そのため、『うつほ物語』の「仲忠」という人物造型が『孝経』を受容することで成立していることは、むしろ当然である。

三 東宮大夫の仲忠

室城秀之氏は、『うつほ物語』は、二つの〈家〉の王権獲得の物語であり、そうであり続けることによって長編化した」と指摘している(注17)。「うつほ物語」は、俊蔭の一族の秘琴伝授の物語のみならず、王権獲得の物語でもある。この指摘は重要だと思われる。

秘琴伝授の物語には、前に述べた仲忠の孝養譚の以外にも「孝」の思想が見られる。俊蔭は、遣唐使の船が難破して、波斯国に漂着した。三年目の春に、桐の大木を伐っている阿修羅と会った。俊蔭は、阿修羅に自分が「不孝の子」(「俊蔭」の巻 一二ページ)であることを訴えた。その俊蔭の孝心に打たれた阿修羅から、琴を得た。日本に戻った俊蔭が、琴を方々に献上し、帝からの東宮の琴の師となるように要求されたが、それを拒んで、官を拝辞して、娘に秘琴を伝授した。俊蔭は、帝に対して、官を辞する理由を、「父母あひ見ずして、長く別れて、悲しびはあまりありと言へども、学び仕うまつる勇みはなし。みさ

いの罪にはあたるとも、この琴は学び仕うまつらじ」（「俊蔭」の巻 二一ページ）と言った。物語の最後、「楼の上・下」の巻の末尾で、八月十五日の夜、嵯峨の院と朱雀院は俊蔭の京極の邸にやってきたが、そこで、俊蔭の娘といぬ宮が、それぞれの琴を披露している。両院ともに、俊蔭の一族の琴に感動している。朱雀院は、禄として、俊蔭に中納言を追贈した（「楼の上・下」の巻 九三八ページ）。新編日本古典文学全集（以下、「新編」と言う）は、頭注で、「俊蔭一族の根幹は、「孝」の思想に貫かれた価値観である」と指摘している。物語の後半は、藤壺腹の皇子と梨壺腹の皇子との立坊争いの話題が中心になるが、これは、王権獲得の物語である。



右の系図が示しているように、立坊争いは、藤原氏と源氏の王権獲得の争いである。東宮（後の今上帝）は、藤壺腹の若宮に思いを寄せているが、親である朱雀帝と后の宮の意見を考慮せざるをえない。后の宮は、弟である兼雅の娘、梨壺腹の三の宮を立坊させようとしている。また、東宮大夫の任命について、藤壺の兄たちも希望しているが、東宮は、「大将をなし給ふ」（「国譲・下」の巻 七八六ページ）とあるように、仲忠を任命した。最終的に、源氏の血統を持つ藤壺腹の若宮が東宮になったが、藤原氏の血統を持つ仲忠が、東宮大夫に就任した。この結果には、東宮が藤原氏と源氏とを融和しようとする意図が伺われる。しかし、ここで、東宮はなぜ仲忠を東宮大夫に任じたのかという疑問が湧いてくる。「蔵開・中」の巻には、朱雀帝が、仲忠を俊蔭の詩集と日記を講書させたことが語られている。

「今一つを」として御覧すれば、これは、俊蔭が、京より筑紫へ出で立ち、唐土へ渡

りたりける間より始めて、京に娘の上を言ひ初めて言ひつつ、折々に詩あり。……「夜明けぬべし。長き夜をし尽くすべくもなき言どもなめり。今は、これらは、ただに見む。集ども日記どもなどをなむ、読ませて聞くべき。それは、仏名過ぐしてせむ。この朝臣、『いと苦し』と思ひためり」と仰せられて、春宮に聞こえ給ふ、「そのこととなければ、対面すること、いと難し。『かかるついでに聞こえむ』と思ふことどもあり。この朝臣こそあめれ。それは、行く先の御後見すべき人なめれば。……」

〔蔵開・中〕の巻 五四八〜五四九ページ

朱雀帝は聞き終わって、東宮に、仲忠のことを、「行く先の御後見すべき人なめれば」(傍線部)と語っている。朱雀帝が仲忠に俊蔭の漢詩を読書させることには一定の政治目的があると思われる。また、帝は、妹である嵯峨の院の小宮のことについて、次のように語っている。

「……月ごろ聞けば、『上にもものし給はず』と言ふなるを、なほ、上に出で給ひて、例の作法に政あらせてこそ。候はせむに、思す人あらば、夜は参上らせ、昼は上局賜ひなどしてこそ。例に違ひて聞こゆれば。そがうちに、小宮と申しし人の、いたく嘆かるるやうに聞こゆるは。などかは、いと、さしも。院の聞こし召す所もあり。御歳高くなりぬれば、御代、今いくばくもあらじを。そがうちに、宮のいとらうたくし給ふ宮なり。天下に、心に適はずとも、少し心とどめてこそ」と聞こえ給へば、

〔蔵開・中〕の巻 五四九ページ

嵯峨の院の皇女である小宮は、藤壺だけが東宮の寵愛を受けているために、不遇になっている。朱雀帝は、親の嵯峨の院と太后の宮の気持ちを考慮して、「御歳高くなりぬれば、御代、今いくばくもあらじを。そがうちに、宮のいとらうたくし給ふ宮なり。天下に、心に適はずとも、少し心とどめてこそ」(傍線部)と、東宮を強く諫めた。朱雀帝は、俊蔭が詩集と日記で嘆いた「不孝の罪」に触発されたのではないだろう。

立坊争いがだんだん激しくなった「国譲・下」の巻では、

「……世をば、左大臣、仲忠の朝臣となむまつりごつべき。太政大臣、いとよき人なれども、才なむなき。才なき人は、世の固めとするになむ悪しき。右大臣は、有様・心もかしこけれども、女に心入れて、好いたる所なむついたる。さるべき人は、頼もしげなくなむある。この二人は、大将の朝臣は、さらに言ふべきにもあらず、今一人も、才もあり、心もいとかしこく重し。その人、臥し籠りて、娘どもをも取り乱りて惑はさむに、人々なむ騒ぐことあらむ。よし、見給へ」と聞こえ給へば、「よし、聞こえじや」など、怨じ聞こえ給ふ。

〔国譲・下〕の巻 七五二ページ

とあるように、朱雀帝は、太政大臣（藤原忠雅）は政治の能力を持たず、右大臣（藤原兼雅）は、好色めいたところがあると批判した。仲忠に対しては、「大将の朝臣は、さらに言ふべきにもあらず」（傍線部）と高く評価した。ここで、朱雀帝は、仲忠を次世代の東宮の後見として定めたことが読めるだろう。このように、仲忠が東宮大夫に任じられたのは、むしろ、朱雀帝の影響が大きいと言えよう。

四 仲忠の〈孝〉と〈忠〉

仲忠という人物をあらためて考えてみよう。

十六といふ年、二月に冠せさせ給ひて、名をば、仲忠といふ。上達部の御子なれば、やがて冠賜ひて、殿上せさせ、上も春宮も、召し纏はし、うつくしみ給ふ。

（「俊蔭」の巻 五四ページ）

〈孝の子〉として生まれた子は、兼雅によって北山から三条の邸に迎えられて、十六歳の二月に元服して、「仲忠」と名づけられている。帝（後の嵯峨の院）と東宮（後の朱雀帝）から、寵愛を受けている。すでに、俊蔭は官を辞して朝廷と離れていたが、ここから俊蔭の一族は再び政治の舞台に戻ることになる。後に、娘のいぬ宮が誕生し、秘琴伝授を受けた後に、入内する可能性が見られる。これらの話の始発は、仲忠の元服の場面である。

前に述べたように、秘琴伝授の物語には〈孝〉の思想が貫かれていることは確かである。「蔵開・中」の巻で、仲忠が朱雀帝の前で、俊蔭の詩集と日記を読み上げている。朱雀帝は俊蔭の詩集に出ていた「不孝の罪」を嘆く内容に感動して、〈孝〉のことを意識した。同じ巻には、仲忠が、父の兼雅を説得し、継母である嵯峨の院の女三の宮を三条の邸に迎えることも描かれている。「新編」の頭注には、「女三の宮を救済することは、両親の贖罪行為を代行するものであり、仲忠の孝子としての性格を明らかにする」と評価する記述がある。世の中の人々は、「右大将は、継母の宮迎へ奉りて、御前していますべかなり」と称賛した（「蔵開・下」の巻 五九一〜二ページ）。父の兼雅のほかの妻である、故式部卿の宮の中の君や、仲頼の妹など、これまで顧みられなかった女君たちも、仲忠の援助を受けている。仲忠は、両親のみならず、継母に対しても孝養を尽くしている。そして、仲忠が〈孝の子〉であることが世の中に広く知られることになった。朱雀帝は、もちろん、仲忠が〈孝の子〉であることを知っている。しかし、帝はどんな根拠によって、仲忠が将来の政治を補佐する人であると判断したのだろうか。

『孝経』では、親と君主との関係を、〈孝〉と〈忠〉との関係として初めて論じている。「廣揚名」の章には、「子曰、君子事親孝。故忠可移於君」と見える。『御注』では、「以孝事君則忠」と注している。子と親との最高の関係は、「孝」である。また、臣下と君主との最上級の関係は、「忠」である。有徳の君子は、親に〈孝〉を尽くす。だから、親に

仕える〈孝〉をもって、君主に対すると〈忠〉になる。「事君」の章には、「君子之事^レ上也、進思^レ尽^レ忠、退思^レ補^レ過」と見られる。君主に仕えることに、「尽忠」は最も重要である。また、「忠心蔵^レ之。何日忘^レ之」がある。君主に対する「忠心」は、いつでも忘れることはない。『孝経』は、〈孝〉の思想を解いているが、核心は〈忠〉の思想である。つまり、臣下として〈忠〉の重要性を論じている。

また、先に引いた『菅家文草』の貞観年間に行われた積奠で、『孝経』が講じられた詩の序文には、「孝子之門、必有^二忠臣^一」と見られる(『菅家文草』巻一 二八)。(孝の子)として生まれた仲忠は、継母を迎える行動により、世間の賞賛を浴びている。この理想の〈孝の子〉は、もちろん、君主に対して〈忠〉の質も備えている。

立坊争いの中で、藤壺の最大のライバルは梨壺である。後の宮は、梨壺腹の三の宮を立坊させようとして、兼雅と相談した。

「……よろづのこと、仲忠の朝臣に語らひて侍るを、おほかたの心寄せよりも、また、思ひ侍るめる筋待めれば、よにも動じ侍らじ」。宮、「いと不用の御子ぞ。さこそあなれ。

さ不孝ならむ者をば、子とも、な見給ひそかし。さもあらばあれ。それらは、一つ心ならずともありなむ。ただ一の上だに、『一つ心ならむ』とのたまへば。「承りぬ。ただ、せさせ給はむになむ」とてまかで給ひぬ。(「国譲・下」の巻 七五一ページ)

兼雅は、「よろづのこと」を息子である仲忠と相談していると言い、また、仲忠は藤壺腹の若宮に心を寄せているから、梨壺腹の三の宮の立坊を支持しないだろうと述べている。それに対して、後の宮は、「さ不孝ならむ者をば、子とも、な見給ひそかし」(傍線部)と腹を立てている。ここは、物語の中で、仲忠が唯一「不孝」と言われた箇所である。後の宮がそう言った理由は、仲忠が、父である兼雅と「一つ心ならず」(波線部)ということによる。

しかし、『孝経』の「卿大夫」の章に、「詩曰、夙夜匪^レ懈、以事^二一人^一」とあり、『詩経』の大雅の「烝民」の篇の一節を引いて、公卿たちの〈孝〉を説明している(注18)。つまり、公卿や殿上人の〈孝〉は、朝から夜まで怠ることなく、君主の一人に仕えることであるという。仲忠は、終始、東宮が立坊をさせようとしている藤壺腹の若宮のことを支持している。だが、藤壺は、立坊争いの間、ずっと里帰りをしている。一方、仲忠の異腹の妹である梨壺腹の三の宮が立坊される噂や、小宮が妊娠することが話題になっていた。藤壺は、過去の一連の事件を思い出して身震いする。そのような時に、仲忠は、藤壺のもとに参上したのである。

大将、参り給ひて、夕方、西のおとどに参り給ひて、實子に褥参り給ひて、これか
れ物聞こえ、大将、女御の君に物聞こえ給ふ。孫王の君して、御いらへなど言ひ継が
せ給へば、大将、「今は、かく、ありしよりも親しく仕うまつるべく侍るを、御通辞な

くとも承りなむは」などで、「先つ頃、世の中にあやしきことを申しけるを、卑下せる所に、『いかに思う給ひたらむ』と、聞こし召しけむことをなむ、ここにもかしこにも、限りなく思う給へ嘆きて、誰も誰もまかり歩きもせで侍りつる。ある所より、かの三条に、とかくのたまはすることなむありける。『さる心も思ひ知れ』とて、かの宮消息にて侍りし、『こと定まりて御覽せさせむ』とてなむ、まだ失はで侍る』とて、この君して、宮の御文を奉り給ひて、聞こえ給ふ、「かくも聞こゆまじけれど、昔の心ざし失はず、今、行く先、頼み聞こゆることも、なほ侍れば。『うたてある心も持たる者ぞ』ともぞ思し出づる」と聞こえ給へば、見給ひて、大宮なども、「いと恐ろしくもありけるかな」と。大将も、「御覽じてば、賜はりなむ」と聞こえ給へば、女御の君、かく書きて、出だし給ふ。

来る春を雲に知らせずなりにせば藤も絶えぬる松にやあらまし

大将、見給ひて、

石の上の種よりまつと聞きしかば緑も春ぞ深く知るべき

など聞こえ給ふほどに、大殿おはし合ひて、内裏に宮参り給ふべきことを定め給ふ。

十月十五日、女御もろともに参り給ふべし。あるべきことども、皆定め給ふ。

〔国譲・下〕 七九一〜七九二ページ

仲忠が、まず、「今は、かく、ありしよりも親しく仕うまつるべく侍るを」(傍線部)と述べて、新東宮に対する忠心を明らかにした。仲忠は、藤原氏が梨壺腹の皇子の立坊を計画したことを、「世の中にあやしきことを申しける」(波線部)と言う。また、かつて、后の宮は梨壺腹の三の宮の立坊を計画して、兼雅に手紙を送った。仲忠は、この手紙を藤壺に渡した(二重傍線部)。それによって、仲忠は、自分が梨壺腹の三の宮を立坊させる計画に加担していなかったことをうち明けたのである。

さらに、仲忠は、新東宮の将来を期待することを歌に詠んで、藤壺の不安を慰めている。物語の中で、仲忠は、藤壺腹の若宮に対する忠心が揺らいだことがない。若宮が立坊された時、仲忠は、「このことにより、頭を、えさし出で」(国譲・下)七八四ページ)と言い、自分が立坊争いにまつたくかかわらなかつたことを自覚している。

以上に見たように、仲忠は、「卿大夫」の〈孝〉、すなわち、〈忠〉を貫いていると言えよう。そして、仲忠は、藤原氏の血統を持つにもかかわらず、源氏の母腹の新東宮の東宮大夫に任じられたのである。

おわりに

『孝経』の「士人」の章に、「故以孝事君則忠」(一四〇ページ)とある。〈孝〉の気持ちをもって君主に尽くすとすれば、〈忠〉になる。〈孝の子〉として生まれた仲忠は、臣下として、〈忠〉の特質も備えている。この〈忠〉の特質により、仲忠が、物語の後半の中心、

立坊争いの中に、ほかの藤原氏の公卿たちと区別されて、特別な位置に置かれることになる。『うつほ物語』の主題は二つある。それは、秘琴伝授と王権獲得である。この二つの主題は、「仲忠」の元服の場面において、初めて交渉する。また、写本においては、「仲忠」という名前は、基本的にひらがな書きであり、必ずしも、「仲」に、「忠」という字で書かれているわけではない。しかし、長い研究史の中で、「仲忠」という文字において受容されてきたのは、この人物の造型に〈忠〉の精神を読み取る読者の考え方が、名前の用字にも反映されたのではないかと思われる。

『孝経』によって、親に仕えるのは〈孝〉である。〈孝〉を以て君主に仕えるのは〈忠〉である。『うつほ物語』の中で、仲忠は、親に孝養を尽くしているだけでなく、君主である朱雀帝や今上帝たちにも忠心をもって仕えている。それは、物語の後半に、仲忠の〈孝〉という特質のみならず、〈忠〉という特質が暗線として働いているのである。また、仲忠の娘のいぬ宮の入内も予測できる。そして、次世代の後見としても、仲忠はきつと大きな役割を果たすことになるだろう。

注

- (1) 「いとかしこき孝の子なり」(「俊蔭」の巻 三五ページ)
- (2) 阿部恵子「仲忠孝養譚について―その出典及び俊蔭巻での構想上の位置―」(「実践国文学」第3号 昭和四十八年三月)。三木雅博『「うつほ物語」忠こそその(継子いじめ譚)の位相―『孝子伝』の伯奇譚・クナラ太子譚との比較考察から(「国語国文」73号 平成十六年一月)。狩野一三『「うつほ物語」仲忠孝養譚の位置(「愛知県立大学大学院国際文化研究科論集」第5巻 平成十六年三月)など。
- (3) 阿部恵子、注(2)論文。阿部氏は、「仲忠孝養譚は、舟橋本系孝子伝を出典書としている可能性が大きいと考えられる」と指摘している
- (4) 『孝経』は、「新釈漢文大系」(明治書院 昭和六十一年)を用いて、『御注』は「漢文大系」(富山房 昭和四十八年)を参考にした。
- (5) 鈴木温子『「うつほ物語」の「親」と『孝経』『礼記』(『物語研究』4 平成十六年三月)
- (6) 鈴木温子、注(5)論文。
- (7) 『孝子伝』は『孝経』の影響を受けた表現がよく見られる。例えば、陽明本の序文の「立身之道、先知孝順深、識尊卑別」(二八一ページ)という言葉は、『孝経』の「開宗明義」の章の「夫孝始_レ於事_レ親中_レ於事_レ君終_レ於立_レ身」の影響が見られる。また、船橋本の序文にある「原夫、孝之至重者、則神明応響而得也」(ページ)という言葉は、『孝経』の「応感」の章の「孝悌之至、通_レ於神明_レ」の影響が見られる。『孝子伝』は、『孝子伝注解』(汲古書院 平成十五年二月)を用いた。
- (8) 学令
凡経。周易。尚書。周礼。儀礼。礼記。毛詩。春秋左氏伝。各為_二一経_一。孝経。論語。学者兼習之。(「日本思想大系」『律令』(岩波書店 昭和五十一年十二月)二六三ページ)
- (9) (貞観二年(八六〇)十月十六日)制。哲王之訓。以_レ孝為_レ基。夫子之言。窮_レ性盡_レ理。
既知。一卷孝経。十八篇章。六籍之根源。百王之摸範也。(中略)大唐玄宗開元十年。撰_二御注孝経_一。(中略)故玄宗廣酌_二儒流_一。深廻_二睿想_一。為_二之訓注_一。(中略)御注一本。理當遵行。亘自今以後。立於學官。教授之経。以充試業。(本文は「新増補訂国史大系」第4巻(吉川弘文館 平成十二年十二月)(五六ページ)による。)
- (10) 趙秀全「日本における「孝」と『孝経』の展開―奈良朝以前から平安期まで―」(『芸典文学』6 平成二十五年三月)において詳しく論じている。
- (11) 『菅家文草』の引用は、「日本古典文学大系」(岩波書店 昭和四十一年十月)による。
- (12) 笹川勲『「源氏物語」柏木の言葉と思想―『孝経』引用を中心に―」(「國學院雑誌」

第115巻第4号 平成二十六年四月)

- (13) 山口博「藤原師輔論」(『王朝歌壇の研究―村上冷泉円融朝篇―』桜楓社 昭和四十二年六月)において、官位と女と、二つの欲望を追求した師輔は、藤原兼雅と共通していると論じている。
- (14) 『九曆』の引用は、東京大学史料編纂所「大日本古記録」(岩波書店 昭和三十三年七月)による(一八七ページ)。
- (15) 『紫式部日記』、『栄華物語』の引用は、「新編日本古典文学全集」(小学館)による。
- (16) 十一月には二宮御書始とて、式部大輔奉周と聞えし博士、御注孝経といふ書教へたてまつりて、蔵人実政、尚復とて、それも御師なるべし。(「すべらぎの第一 星合」『今鏡全訳注』講談社学術文庫 昭和五十九年六月)(二二三ページ)。
- (17) 室城秀之『うつほ物語の表現と論理』(中古文学研究叢書2 若草書房 平成八年十二月)(一七ページ)。
- (18) 『詩経』の引用は、「新釈漢文大系」(二五九ページ)(明治書院 平成十二年七月)による。

結論

本論文は、『源氏物語』と『遊仙窟』の受容関係を考察した。

第一部では、万葉時代から江戸時代までの日本文学と『遊仙窟』の影響関係を確認した。『遊仙窟』の言葉の引用、作者の逸話や、作品の翻案などがあることが分かる。それは、『源氏物語』が『遊仙窟』を受容する手法とは違うことを指摘した。

第二部では、『源氏物語』と『遊仙窟』の受容関係を取り上げた。

第一章では、『蜻蛉』の巻に見られる『遊仙窟』の問答の場面を取り上げた。薫が女一の宮を『遊仙窟』の仙境に住んでいる十娘に準えることによって、従来の説と違い、巻末の「ありと見て」の歌は、女一の宮のことも含めて詠んでいることを指摘した。

第二章では、『若紫』の巻の北山と、『宇治十帖』の宇治の山荘を取り上げた。北山の聖の岩に囲まれた奥深い所にある住まいと宇治の阿闍梨の「山の岩屋」、北山の僧都の「柴の庵」と宇治の八の宮の「草の庵」とは共通点が見られることを指摘した。その上で、それらの根源は『遊仙窟』に出てくる「神仙の窟」と「草亭」だと論じた。

第三章では、『若紫』の巻と『遊仙窟』の受容関係を考察した。光源氏や、紫の上と尼君という「一男双美」の型は、『遊仙窟』から影響を受けていることが既に論じられている。しかし、紫の上と尼君の、童女と姫という構図は、『遊仙窟』の若い義理の姉妹と大きく隔だっている。それは、『源氏物語』における『遊仙窟』からの一種の変容だと指摘した。

第四章では、『宇治十帖』と『遊仙窟』の受容関係を考察した。「橋姫」の巻の垣間見の場面から、『遊仙窟』の人物関係を意識しながら、物語の進行によって、変化していることを指摘した。『遊仙窟』は短編物語である。既に論じたように、正編において、「帚木」「空蝉」「夕顔」「若紫」の巻など、半ば独立している巻に、それぞれ『遊仙窟』の影響が見られる。また、人物関係との対応関係は、さほどの変化が見られない。「宇治十帖」においては、『遊仙窟』との人物関係との対応関係の変化や挫折によって、物語が展開されていくことを指摘した。

第二部の考察によって、『宇治十帖』に『遊仙窟』の影響が見られる場面は、すべて薫という人物と関わりがあることが分かった。

さらに、第三部では、薫と別の漢籍との関係を考察した。

第一章では、『遊仙窟』以外の漢籍と薫との関係を確認した。恋愛をテーマとしての漢籍がよく見られることが分かった。さらに、そういうジャンルの漢籍ばかりではなく、『孝経』という儒教思想の影響を受けていることが察した。薫は、政治の失意者のグループの一員であるが、今上帝の寵愛を受けている女二の宮と結婚した。それも、仲忠と同じく、「孝」という特質があるのは最大な原因だと思われる。薫という人物造型は、『孝経』の「事」母」という思想に影響されていることを指摘した。

第二章では、『源氏物語』に大きな影響を与えている『うつほ物語』と『孝経』の関係

を考察した。『うつほ物語』の男性主人公の仲忠は、〈孝〉という特質ではなく、〈忠〉という特質をもって、政治の争い中に勝利者になった。これは、『孝経』の「故以孝事君則忠」という思想の影響であることを指摘した。

本論文は、『源氏物語』と「宇治十帖」の影響関係を大きく変えるものではない。しかし、正編と『遊仙窟』との受容方法の違いが、確認できたのではないだろうか。また、今まで、あまり論じられていない、『孝経』や〈孝〉という儒教思想と「宇治十帖」の主人公である薫の造型との関係に触れた。

初出一覧

第一部 日本文学と『遊仙窟』

第一章……書き下ろし

第二部 『源氏物語』と『遊仙窟』

第一章……書き下ろし

第二章 『源氏物語』の北山と宇治の山荘と『遊仙窟』——『源氏物語』の「若紫」の巻に

おける『遊仙窟』の受容——「北山」を中心に（白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集二〇一六年三月）

第三章 『源氏物語』における『遊仙窟』の受容——「若紫」の巻に着目して——『源氏物語

における『遊仙窟』の受容——「若紫」の巻に着目して——（白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集二〇一八年三月）

第四章 『源氏物語』における『遊仙窟』の受容——「橋姫」「椎本」「総角」の巻を中心に

——『源氏物語』の「昔物語」について——古注釈の視点から——（国文白百合（47）二〇一六年三月）

第三部 薫という人物造型と『孝経』

第一章 『源氏物語』の薫という人物と『孝経』の受容関係——「孝」という思想に着目に

して——『源氏物語』の薫という人物と『孝経』の受容関係——（国文白百合（49）二〇一八年三月）

第二章 『うつほ物語』仲忠の人物造型——『孝経』引用を中心に——『うつほ物語』仲忠

の人物造型——『孝経』引用を中心に——（『日本文学論究』（77）二〇一八年二月）